

こうして比企谷八幡は
SAOで本物を知る。

OzUkI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022年12月25日

本物を模索していた青年

比企谷八幡はクリスマスの日にはSAOの世界に囚われた。

2年近く囚われた世界で比企谷八幡は本物を知る。

はい！

ハアスです（？▽？；）キリト君には別のヒロインいるから安心してね！

初めてクロスオーバーを書くので文章が拙い事があります。ご了承ください。

更新頻度は一週間に6回を目安にしていきます！

更新時間は正午か真夜中の12時にします

話の流れとしては

S A O 帰還直後⇒S A O 回想⇒A L O アスナ救出⇒G G O ⇒キャリバー⇒感動のマガーズロザリオ

その後出来たらアリシゼーションもやります。

追記

4 / 2 0

お気に入りが入りが1000越えました！ありがとうございます！

4 / 2 1

U A が10000越えました！ありがとうございます！

4 / 2 7

U A が20000越えました！ありがとうございます！

お気に入りが2000越えました！ありがとうございます！

5 / 5

U A が30000越えました！ありがとうございます！

5 / 12

U Aが40000、お気に入りが300越えました！ありがとうございます！

目次

第一章 SAOからの目覚め

1話 SAO帰還 | 1

2話 面会 | 9

第二章 混濁の二年間

3話 デスゲームの始まり | 14

第4話 アスナとの出会い | 20

第5話 ビーター | 26

第6話 白虎の里 | 32

第7話 そしてハチマンは見つけかけた本物を失う。 | 36

第8話 エレンからのプレゼント | 42

第9話 シリカとの出会い | 52

第10話 アスナとの再会 | 61

第11話 お昼寝の時間 | 66

第12話 圏内事件 | 70

第13話 ラフィン・コフィン | 75

第14話 所有欲 | 80

第15話 何とかデイルさんとの | 83

デュエル | 83

第16話 ユニクススキル | 87

第17話 恋する乙女 | 94

第18話 焰月 | 101

第19話 リズの告白 | 105

| | | | | | |
|-----------|-------------------------|-----|--------|--------------|-----|
| 第20話 | 大切な人達 | 109 | 第31話 | 初の序列戦 | 157 |
| 第21話 | 現実世界 | 113 | 第32話 | 最強の奥義は時に囷となる | |
| 第22話 | 同志? | 117 | ものである。 | | 162 |
| 第23話 | ハチマンのSAOでの生活 | 122 | 第33話 | 動き出した悪意 | 168 |
| は波乱万丈である。 | | | 第34話 | クラディールの思惑 | |
| 第24話 | 仲直り | 127 | 172 | | |
| 第25話 | ハチマン、血盟騎士団に入るってよ。 | 133 | 第35話 | 絶望 | 175 |
| 第26話 | アスナの家にお泊まりをする事になった。(前編) | 138 | 第35話 | 赦されない罪 | 179 |
| 第27話 | アスナの家にお泊りする事になった。(後編) | 144 | 第36話 | アスナの諭し | 182 |
| 第30話 | 諜報部の実態 | 150 | 第37話 | ホンモノ | 186 |
| | | | 第38話 | 最悪の結末 | 190 |
| | | | 第39層 | 焰月の進化 | 194 |
| | | | 第40話 | 本当の最終奥義 | 197 |

| | | | | | |
|-----------|----------------|-----|------|------------|-----|
| 第41話 | 俺の二つ名 | 206 | 第48話 | 結婚報告 | 250 |
| 第42話 | ユニークスキル同士の決闘 | 211 | 第49話 | サウサーの宣戦布告 | |
| 今後の流れについて | 読者様によつて | 211 | 第50話 | アスナの正体 | 258 |
| 話が変わります | | 216 | 第51話 | 刺身には醤油が一番! | |
| 第43話 | 欺瞞の関係 | 220 | 263 | | |
| 第44話 | ヒースクリフの正体 | 224 | 第52話 | 池の主 | 267 |
| 第45話 | 二人の思惑 | 231 | 第53話 | JKはAI | 273 |
| 第46話 | こうして比企谷八幡はSA | | 第54話 | ユイユイとエレン | 277 |
| Oで本物を知る。 | | 235 | | | |
| 第47話 | やはりアスナは小悪魔だつた。 | 243 | | | |

第一章 SAOからの目覚め

1話 SAO帰還

「さらばだ、ハチマンくん。アスナくん。キリトくん。」

最後にヒースクリフ 茅場昌彦がそう言つて

八幡、明日奈、和人の意識は暗転した。

八幡 side

目が覚めると目の前には病院の白い天井が広がっていた。

なんとか体を起きあがらせようとしても筋力が衰えているからか力が入らない。

そうこうしてやつと起きあがったとき一人の人物が目の前に現れた。

「お兄ちゃんっ!!!」

泣きながら抱きついてきた女の子は俺の愛する妹・小町だった。俺は枝のように細くなつた手で小町を抱き返した。

「小町大きくなつたな…」

「お兄ちゃんもね！ちゃんと生きて帰ってくれて小町すごい嬉しいよ！あつ！今の小町の超ポイント高い！」

「そのポイントは相変わらずなのな…」

「変わってなくて安心したでしょ？じゃあ小町は看護師さん呼んでくるね！」

小町の姿を見て実感できた事はただ一つ。

（ああ・現実世界に帰ってこれたんだ…）

この思いだけだった。

翌日、看護師さんの指示によりリハビリが始まった。

小町に助けってもらわないと歩くことすらままないほどまで衰えた自分の体を少し情けなく思ったしまった。

「クツソ：やっぱり現実だと体が重いな…」

「VR空間だと体が軽くて思うように動くからいいよね」

「あれ？小町ってVRやってたっけ？」

「うん・お兄ちゃんがSAOに入ってからアルヴ Heim・オンライン 通称（ALO）ってというゲームが発売されたんだ・あつ！もちろんナーブギアじゃなくて安全なアミューズファイアっていう機械ね！小町はお兄ちゃんがどんな世界にいるのか見てみたくなっただんだ…」

「そうか…ところでアルヴ Heim って言うことやっぱり妖精がモチーフなのか？」

「えっ！お兄ちゃん何で知ってるの!？」

「バツカ、アルヴ Heim っていったら北歐神話に出てくる地名だろ？こんなの馬鹿じやなきや皆知ってる」

「お兄ちゃん：今の発言は小町的にポイント低いよ…」

「そういえばお兄ちゃん。看護師さんから面会 OK 出たから今日はたくさん来るからね！」

「マジかよ…」

そんな会話を1時間ほどしてリハビリを終えて小町も家に帰ってしまったので病室でくつろいでいるとコンコンとノックが鳴ったので早速来たかと思い：

「どうぞ」

と言うとそこに現れたのは…

知らない男だった。

side out

明日奈side

ハチマンくんと別れて目が覚めるとそこは

病院の白い天井……ではなく鋼鉄の檻の中だった。

「えっ……ここはどこなの!? ハチマンくん! ハチマンくん!」

そう叫びここがどこなのか調べようと歩き回ろうとすると自分の足と打ち立てられた杭に鎖が繋がっていて歩き回る事は出来なかった。

たまたま近くに鏡があつたので姿を確認してみると

そこには確かに自分がいたのだがよく見てみると背中に羽が生え耳が少しとんがっていた。

「こんな事をしたのはいったい誰なの!? 絶対許さない!!」

その時鋼鉄の檻のドアがカチャッと開いた。

「おーおー怖いねー僕の愛しのティターニアちゃん? いや、結城明日奈さん?」

「!?」

自分の本名を呼んだ全く面識の無いであろう男がそう言つてとても嫌らしい視線を

投げ掛けるので明日菜は警戒心をMAXにして話しかけた。

「あなたは誰なの？私をこんな風にしたのもあなた？」

「そうだよ。それにしても面識が無いように言うなんてひどいなあ。僕は須郷だよ。覚えてるかな？」

そう言われて明日菜ははっと思い出した。

「あのめんどくさかった人ね。それで何か用？」

「そんな言い方をしないでくれよ。もう少して僕たちは結婚するんだから。」

「は？」

「今君はアルヴヘイム・オンライン通称ALLOという世界にいる。そしてALLOの運営を行っているのが私のいるレクトだ。つまり君の命は僕の手中とも言える。結婚ぐらいいの見返りがあつてもいいだろう。」

明日奈は正直この気持ち悪い男と話すのさえ嫌だったが

聞きたいことがあつたので声を振り絞った。

「SAO生還者の中でも私だけこうなの？」

「違うよ。あと100人ほど君のように目覚めてない。」

「100人を目覚めさせてないのには意味があるのでしょ？」

「さすがは僕の嫁になる存在だあ!!君の言うとおり僕には目的がある…それは…」

【人間の感情や思考を意のままにコントロールする方法の研究をするためだよ。】
「……………」

明日菜は何も言う気にならなかったが須郷は続けた。

「SAOのサーバーに細工をし、君を含む一部の参加者をALOに監禁する。そして、閉じ込められた参加者の意識に外部から意図的に刺激を与え、その反応を調べるなどして研究を重ねるんだ。最終的には会社ごと研究成果をアメリカの軍需関連企業に売り渡そうと考えているけどね。」

「…最低っ…」

「ああ??調子に乗んなよ?この技術を使えば記憶さえもコントロール出来るんだ!そうすれば君は僕のものになる!!」

(お願い!!ハチマンくん助けに来て!!)

そう明日奈は願うしかなかった。

side out

キリトside

キリトもハチマンと同様な状況だった。

目が覚めると目の前には妹のスグがいて翌日はリハビリをしていた。一点違うと言えどキリトには面会に来てくれる人があまりいないという点だが：

キリトは現実に戻ってからハチマンやアスナや???.の事ばかり考えていた。その中でもキリトは

(早く???.に会いたい!!)

と考えていた。

しかしその???.は……

アスナ同様目覚めていなかった：

2 話面会

八幡 side

「えっと…誰ですか？」

「これは失礼。私は菊岡です。」

彼はそう言つて名刺を渡してきた。

『総務省通信ネットワーク内仮想空間管理課職員 菊岡 誠二郎』

「元々はSAO対策部隊に所属していたよ。」

「SAO生還者の俺に話を聞きに来たつてところですか。」

「よく分かつたね。」

「でもなんで俺なんですか？」

「そりゃあ八幡君はSAO四天王の一人じゃあないか。」

「それだつたらアスナとキリトがいるでしょ。」

「初めにキリト君のところに行つたら『そういうのはハチマンのほうがかうまく説明できますよ。』つて言つてたからさ」

「あの野郎…まあいいですけどアスナは？」

「実はアスナ君はまだ目覚めていないんだ」

「どういうことですか!？」

「原因は不明。アスナ君以外にも100人ほど目覚めていないんだ。今政府が急いで解決目指してる。君はアスナ君と付き合っているみたいだね?本当に申し訳ない」

「別に貴方たちのせいじゃないんですし謝らなくてもいいですよ。ですがなるべく早く解決してください」

「分かった。それじゃあSAO内の出来事を話してくれるかな?」

「分かりました」

そういつてあのデスゲームでの2年間を語ろうとした時、勢いよくドアが開いた。

「ヒツキーイイイ」

「うわあ!？」

総武高校時代のクラスメイト 由比ヶ浜結衣はいきなり自分のところに飛び込んできた。俺はその豊満な胸に埋もれる事になり必死で抵抗したが、やはりまだ筋力が足りないらしい。

「うういい! (苦しい!)」

「ほらほらガハマちゃん。比企谷君が苦しそうだよ?」

「ああ!ヒツキーごめん!!」

救世主到来!?!いいえ、そこにいたのは魔王 雪ノ下陽乃でした。

「今比企谷君とつても失礼なこと考えていなかった?」

「いいえ、滅相もございませぬ。」

なにになに?この人エスパーなの?

「ちよ!結衣先輩何やつてるんですか!?!」

「そうよユイユ:結衣さん?そのエロ企谷君に胸なんか押し付けたら何されるかわかんないわよ?」

そう言ったのは元総武高校生徒会長 一色いろはと奉仕部部长の 雪ノ下雪乃だ。

っていうかあれ?今雪ノ下ユイユイって呼ぼうとしてたよね?

「ヒツキーマジキモイ!!」

「俺はそんなことしねえよ…」

「あはは、皆すごいいね…」

そんな濃いキヤラ達に埋もれて空気になった菊岡さんが言った。

「「菊岡さん!?!」」

「やつと気付いたね…」

「あれ?お前らは菊岡さんと面識あるのか?」

「ええ。貴方がSAOにいる間この病室によく来ていたのよ。」

「そうなのか。んで菊岡さん。早く終わらせたいんで別室いきましょ。こいつらいると邪魔だろ?」

「別にいいよ。君たちも彼のSAOでの話聞きたいよね?」

「聞きたい聞きたい!!」

「はあ…まあいいか。そういえば俺からお前らにお願いしたいことがあったんだけどいいか?」

「内容によるわね。」

「今度から俺のこと八幡って呼んでくれないか?」

「まさか愛の告白!?!」

「何でそうなるんだよ…ただSAOで2年間ハチマンって呼ばれてたから他の呼び方だとれないからだ。しかも俺彼女いるしな。」

「えええ?!?!」

この発言は彼女たちにとってかなりの爆弾発言だったらしい。

「はははは八幡君?いくら何でも勝手に彼女作って妄想するのはどうかと思うわ?」

「そうだよ八幡!!」

「そうですよ八幡センパイ!!」

「お前ら早速呼び方変えてくれてありがとな。そこの菊岡さんに聞けばわかると思う

ぞ」

「「本当なんですか!?!」」

「本当だね。」

そういつた瞬間雪ノ下さん以外の3人が倒れてしまった。こいつらまさか俺の事好きなのか? いいや、勘違いはよくないな。

「ほら、起きろ」

「「八ッ!」」

「そのことも含めてちゃんと話すからよく聞けよ。じゃあまずは俺たちがデスゲームに囚われたと知ったところから始めるか。」

「じゃあ比企谷君お願いね。」

こうして俺はあのデスゲームについて語りだした。

第二章 混濁の二年間

3話 デスゲームの始まり

「リンクスタート!!」

そういつて比企谷八幡はSAOの世界へと入っていった。

SAOの世界に入ってまずしてみた事はモンスターとの実戦だった。

βテスターでは無かった彼は初めてVRMMOを体験しているのだ。

モンスターと一早く戦ってみたかったのだろう。

そうして15分ほどモンスターと交戦していると二人の男が話しかけてきた。

「よう・初めまして！俺はクラインだ！」

なんか戸部みたいでめんどいな…と思いつつも人柄は良さそうだったので話を聞いてみることにした。

「初めまして。俺はキリトだ。」

もう一人は俺のようなボツチっぽい少年だったため話すのに苦はないと感じた。

「初めまして。俺はハチマンだ。ところで何の用だ？」

「ああ…俺はβテスターなんだがこのクラインは初めてSAOをやるみたいだな。さっ

き戦う姿を見てたけど君もβテスターだろ？こいつに教えてくれないか？」

「お前が教えればいいだろ」

ど正論をぶちかましてやったと思ったら

「キリトは教え方が悪いから全然分かんねえんだよお！なあ頼むハチマン！教えてくれないか？」

すぐに論破されました。めんどくさい。

「生憎俺はβテスターじゃないしVRMMOさえ初めてだ。」

「「え!？」」

「君はそれである動きか…すごいね」

「そうか？」

すると突然雑魚の群れが襲ってきた。

数は12、かなり多い。

「おいハチマン。共闘するぞ。」

「分かった。」

俺とキリトは目の前の5体をスキル「レイジスパイク」で薙ぎ払う。

しかし残りの2体がクラインの方へ向かってしまった。

それを見た俺は咄嗟に

「剣を振ろうとする動作を溜めてみる！そうすればあとは勝手に発動する！」

その必死の叫びが功を奏してクラインはスキル「レイジスパイク」を使い敵を殲滅することが出来た。

「やったな、クライン」

「ありがとな！ハチマン！よかったらフレンド交換しないか？」

そのぐらいなら良いかと思

「あぁいいぜ」

「キリトもしようぜ。」

「おう！」

こうして三人ともフレンド交換をしてそれぞれ今後のSAOでの生活に夢見

それがデスゲームになるとは知らず

3時間ほど狩り続けているとすっかり7時になっていた

「わりいな、飯だからいったん戻るわ。」

「OK。また9時ごろ合流な！」

そういつて左手を操作してログアウトしようとするも…

「ログアウトボタンが無い？」

「俺もだ…確かSAOはこのボタン以外でログアウトすることは不可能だったはず。」

「まじかよ…まあバグならそろそろ運営からメッセージと届くと思うぞ。」
その時全員の体が光だした。

「なんだこれは？」

「テレポーションだ。おそらくどこかに収集される。」

ログアウトの説明でもあるのかと思いいテレポーションされた先は

アインクラッド第一層 始まりの町の広場だった。

おそらく全プレイヤーがここにいるみたいだ。

ざわざわとざわつき始めた時にプレイヤーたちの頭上にある一人の男性が現れた。

「私は茅場晶彦だ。」

そう言う周囲はさらにざわつき始めた。

なんせSAOの創作者が目の前にいるのだ。

そして彼はデスゲームの始まりとも言える宣告をプレイヤーに伝えた。

「君たちはすでにメニューからすでにログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしこれは不具合ではない。もう一度言う、これは不具合ではない。ゲーム上の仕様だ。」

その発言を始めとして彼は絶望ともいえる発言を次々としていった。

(HPが0になったら現実でも死ぬだと…ふざけんじゃねえぞ…)

ハチマンは珍しく切れていたがこんな状況なら切れるのも当たり前だろう。

「では私から君たちにプレゼントだ。アイテムストレージを確認してくれ。」

そこあったのは…手鏡だった。

すると突然クラインの体が光はじめた。

「クライン!!」

二人はそう叫ぶと自分たちの体が光はじめたことに気づいた。

三人とも体の光がなくなり安否を確認すると

「「お前ら大丈夫か!!」って…どちらさま?」

「まさかクラインとキリトか?」

クラインは赤毛こそ変わっていないものの長髪が短髪になっていてキリトは青年の顔からどつちかかというと大天使戸塚のような中性的な顔だった。

「そういうえばナーブギアは顔の形をスキャン出来る…」

「ところであいつはなんでこんなことをしたんだ?」

「すぐに答えてくれるさ…」

そういうとキリトの言ったと落ち茅場晶彦はそのことについて語り始めた。

「諸君は今なぜ私がこんな事をしたのかと疑問に思っているだろう。私の目的は既に達成している。私はこの世界を作り出し君たちを鑑賞するためだけにS A Oを作った。」

「茅場ツ!!」

「以上でSAOのチュートリアルを終了する。健闘を祈る。」

そういつて茅場晶彦は消えた。

「嫌ああ!!!」

一人の少女の叫びから群衆は騒ぎ始めた。

「ハチマン、キリト」

「分かっている。行くぞ!」

そういつて三人は路地裏へと向かった。

第4話 アスナとの出逢い

路地裏に行くときリトが口を開いた

「クライン ハチマン 俺と一緒に次の村に今すぐ行くぞ。俺は安全なルートでの行き方を全部知ってる。」

「でもよお：あんなこと突然言われても…」

「茅場の言っていたことは全て事実だ」

「俺は他のゲームで知り合った仲間と徹夜で並んでこのゲーム買ったんだ。あいつら、今広場にいると思うんだよ…」

「それは何人だ？」

「4人だ」

そう聞くと神妙な顔つきになったキリト。俺にはその意味がよくわかる。4人も足手まといが増えてしまうと

全員安全に連れてくのは無理だ。

「お誘いありがとな！キリトはハチマンと二人で行ってくれ！」

「分かった…」

そう言つて別れようとしたとき

「おいハチマン！ お前目は腐りまくつてるけど意外と顔立ちいいな！」

「余計なお世話だ」

「キリトも可愛い顔してんじやねえか！ 結構好みだぜ！」

ふん。 大天使様とっかを見たらそんなこと言えないぞ！

「お前もその仏頂面の方がお似合いだよ！」

そして本当に別れるとキリトが口を開いた。

「早速次の村に行くぞ！」

「待てキリト。」

どうやらこいつは分かってないらしい

「何でだよ！」

「行くのはまだだ。」

「お前わかつてるのか!?! こうしている間にも俺達の現実での時間は失われていくんだぞ
！」

「分かつてないのはお前だ!!」

怒鳴つたハチマンを見てキリトは驚いた。そしてハチマンは続ける。

「いいか？ 勇気があつて剛胆なやつが最後まで生き残れるのはフィクションの世界だけ

なんだ。現実で生き残る事が出来るのは慎重で石橋を叩いて渡るようなやつだと思っている。」

「……そうだな。俺は焦っていたのかもな……」

「おう。とりあえず周辺の敵狩ってから近くの宿に泊まるぞ。」

「そうだな！」

そうして2時間ほど狩りをした後に二人は宿で眠りについた。

そこから1カ月。

S A Oでの死者は既に2000人を越えていた。

しかし未だ一層さえクリアされてない……

ところが今日キリトの情報によると

第一層ボスの攻略会議があるらしい。

俺らは向かうことにした。

キリトと別行動していたため待ち合わせ場所に向かっていたのだがその途中フードを被った性別が分からない人がモンスター群れに襲われていた。

それをみて即座にスキル「バーチカルアーク」を使い敵を一掃した。

「おい。大丈夫か？」

「ありが…とう」

　　どうやら女らしい

「ねえ。どうしたらあの強さを手に入れられるの？」

「あ？そんなもんひたすらレベル上げだよ」

「違う。貴方の強さはそれだけじゃない。私それを知りたいのよ！私とパーティーを組みなさい」

「は？」

「いいから組みなさいよ！」

　　そういうとパーティーの誘いのメッセージが来た。

（まあこのままほっとくと危なっかしいし闘い方ぐらい教えてやるか）

　　そう思いししぶり認証した。

　　どうやら彼女の名前はA s u n aと言らしい。

「ちようどそこに敵がいる早速戦うぞ」

「うん！」

「スイッチは知ってるな？」

「ボタンなんてないよ？」

　　まさか知らないとは…

「スイッチって言うのはパリイした瞬間に攻守を交代することだよ。そうやって攻守を交代することで回復などを順番にしていくな。俺がパリイするからその瞬間にスイッチしてくれ」

「分かったよ！」

そう話していると敵が襲ってきたので隙だらけの攻撃をパリイした。

「今だ！アスナ！」

「はあああ!!」

アスナはとて素早く正確な「リニア」を突き出し相手はポリゴン粒子となった。

「やったな！」

「ねえ君。何でさっき私の名前分かったの？」

ええ…それも知らないとは…

「パーティー組むと左上の辺りに名前が出てるだろ？」

「え？…あははは！全然気がつかなかったよ！君の名前はハチマン？ハチマン君って呼ぶね！」

「お、おう。」

そう言うのと彼女はフードを外した。

そこにいたのは綺麗な橙色の髪をした美少女だった。

(はあああ!?!こんなかわいかったの!?)

雪ノ下にも劣らないレベルの可愛いだ。

そんな子に教えてたなんて：

俺はすぐに帰ってたため

「わりいな。もうそろそろ第一層ボスの攻略会議があるんだよ。それにいかねえと」

「まってハチマン君!!私も連れてって！」

「別に来たけりゃ勝手に来い」

そう言って全速力で草原を駆け抜け待ち合わせ場所へと向かった。

第5話 ビーター

全速力で走って10分ほどで待ち合わせ場所についたらキリトはまだそこにいなかった。「キリトめ…遅刻しやがって。」

「ふーん。キリト君っていうんだ」

「うわあ!？」

そこにはさっき全速力で振り切ったはずのアスナがそこにいたのだ。

(あの速さに初心者がついてこれるって…こいつ本当の天才か?)

そんな事を思っているとキリトがやってきた。

「おーいごめんハチマン!遅れた…ってその女の子は誰!?まさか彼女か?でもハチマンに彼女なんてありえない…」

「違うし失礼だ。さっきここに向かおうとした時にたまたまであったやつだ。」

「でもなんでここに?」

「私はアスナ。よろしくね。私がここにいるのは第一層ボス攻略会議があるって聞いたからだよ!」

「お、おう。俺はキリトだ…」

キリトも俺同様に美少女に弱いのか少しキョどっている。

「そろそろ時間だ。行くぞ」

「分かった」

そうして俺ら3人は第一層ボス攻略会議をする広場へと向かった。

広場は丸型で周囲に椅子が並んでいて中心に広場がある小さい東京ドームみたいな構造をしていた。

椅子に座りしばらく待つと一人の男が中心に立った。

「今日はこの会議にこんなにもたくさんの方が来てくれてうれしいよ！僕はディアベル！気分的に騎士やってまーす！」

ああ、こいつは俺の苦手なリア充というやつだな？俺とは疎遠の人物だ。

しばらく話を聞いていると一人の男が前に出てきた。

「おいおいちよつと待つてくれやディアベルはん。」

そういつて前に出てきたとんがりヘアの男はつづけた。

「ワイはキバオウや！その話の前にまずはあのゴミどもが俺たち新規プレイヤーに謝らなあかんやろ。」

「えつと…そのゴミっていうのはβテスターの事かな？」

「そうに決まってるやろ!!あいつらは周辺の狩場を独占して俺ら新規プレイヤーにアイ

テムや金が行かないようにしている!!こんなかにもβテスターはいるんやろ?はよ謝れや!」

一部は事実だがかなり見当違いなことを言っている。

何より「仲間」のキリトの事が馬鹿にされているのを聞いて我慢できなかった。

「ちよつといいか?」

「なんや!」

「俺はハチマンと言うものだ。確かにβテスターはお前のいったようなことをしている。それも事実だ。だけどβテスターがいなけりやお前らは何にもできないだろ?」

「なんやと!」

「βテスターは自分で自ら危険を冒してダンジョンの攻略本を無償で配布している。

βテスターに謝罪させるって言うのは見当違いなんじゃないですか?ウニ頭さん」とすると突然皆が噴出し笑い始めた。あれ?俺なんか変なこと言った?

そう言われると真っ赤になったキバオウは

「もういいわ!気分悪うなった!」

と吐き出して席に戻っていった。

「ありがとな。ハチマン」

「別にいいぞ。俺が言いたかったただけだしな」

そういった俺の顔は少し赤かったらしい。

「じゃあ改めて攻略会議を続けるね」

ディアベルは作戦やフォーメーションを伝えその日の攻略会議は終わった。

その数日後俺らはずいにボスの扉の前まで来た。

「絶対に勝つぞおお!!」

「おお!!」

そして俺らはボス戦に突入した

「我、ボス戦に突入す!!」

「キリトくんとハチマンくんは何を言ってるの?…」

ごほん：気を取り直して

ボスの名前は「イルファングザコボルトロード」

βテストの言った通りだ。

そうして10分ほど戦い残りHP僅かという所に追い込んだところでディアベルが

一人ボスに突撃していった。

どうやらディアベルはラストアタックボーナスが欲しかったらしい。

しかしその瞬間ボスは赤ゲージになったことによる新しい攻撃を繰り出した。

その事がβテスト時代の物とは違うという事に気付いたキリトは必死に叫んだが間

に合わなかった。

その攻撃を直接うけたディアベルはポリゴン粒子となって消えていつてしまったのだ。

その直後キリトがラストアタックを取り

戦いは犠牲者1人を出して終わった。

「勝ったぞおお!!」

皆が喜ぶ中一人キリトに物申す者がいた。

ウニ頭の関西人ことキバオウだ。

「おいキリトはん！何であの攻撃の事を教えなかった！」

「どうやらウニはキリトが最初から知ってて教えなかった物だと思ってるらしい。」

「おい、キバ：」

「大丈夫だハチマン」

ラストアタックボーナスのアイテム「コートオブミッドナイト」を来てキリトは言った

「元βテスターだつて？俺をあんな素人連中と一緒にしないでもらいたいなあ。S A Oのベーターテストに当選した1000人のうちのほとんどのレベリングのやり方も知らない初心者だった。今のあんた等のほうがまだましき。でも俺はあんなやつらと

は違う。俺はβテスト中に他の誰も到達できなかった層まで登った。ボスの刀スキルを知っていたのはずっと上の層で刀を使うモンスターと散々戦ったからだ。他にもいろいろ知っているぜ。情報屋なんか問題にならないくらいにな。」

「そんなチーターじゃないか！チーターにβテストでビーターだ！」

「ふん。ビーターか：いい響きだな。」

そう言ってキリトはその場を去った。

ハチマンは気付いた。これはいつも俺のやっていた自己犠牲だと。そして俺は恩師の数々の言葉を思いだした。

「比企谷、誰かを助けることは君を傷つけていいことにはならない」

「君のやり方では、本当に助けたい誰かに出会った時助けることができない」

俺はこの言葉の意味が今はつきりと分かった。

第6話 白虎の里

第一層攻略から3カ月。

俺はその日第18層に来てひたすらレベル上げをしていた。しかしそこで事件は起こった。

第18層の森林の中に本来レベル20程度の敵しか出てこないはずなのにレベル3のモンスターのが6体出てきたのだ。今の俺のレベルは42。4体までならいけるが6体は正直キツイ。あいにく結晶は一つも持ってないので逃げることも出来ない。文字通り絶体絶命だった。

死を覚悟で戦おうとした瞬間目の前の敵が一体ポリゴン粒子となって消えていつて後ろには5人のプレイヤーがいた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。助かった。」

見たところギルドらしい。

助かったと思ったのも束の間でリーダー以外は戦い方がてんで駄目だ。

するとギルドメンバーの中でも唯一の女性がモンスター2体押し倒され殺されかけ

てた。

「危ない！」

俺は体術スキルを会得していたので

スキル【閃打】を使い敵を吹っ飛ばすと宙に浮いて身動きの取れない敵を殲滅した。

「大丈夫か？」

「ありがとう」

その後リーダーが残りの一体を倒して勝利を収めることが出来た。

するとリーダーが俺に話しかけてきた。

「君強いんだね。さっきの戦いを見てたら強いって分かったよ！」

「そんなことねえよ。さっきだって実際やられそうになってたろ？」

「そりやああのレベルの敵にあんな囲まれてたらね：

ところで一つお願いがあるんだが俺達のギルドに入ってくれないか？今アタッカー

が俺とそこの女の子のエレンしかいないんだ」

「まあ助けてくれた恩があるしな。別にいいぞ。」

そう言うのと目の前にギルド招待のメッセージが届いた。

名前は【白虎の里】と言うらしい。

そしてギルド招待を認証するとメンバーの自己紹介が始まった。どうやら【アスト、

「ブーツ、ロッキー、ダン、エレン」と言うらしい。

「俺の名前はハチマンだ。よろしく頼む」

「ああ。よろしくな。じゃあ早速ギルドハウスに行こう。」

家なんてあるのかよ・と思いつつそのギルドハウスへ向かった。

「ようこそ！我がギルド【白虎の里】へ！」

家を見ると結構広い。高かったんだらうな：

「ところでハチマン？お前レベルは何だ？」

「ん？28だよ」

本当の事を言つて変に期待させても困るからな。

「んでハチマン。エレンに槍の使い方方を教えてくれないか？」

「俺は槍なんて使つたことねえぞ。だから教える事は無理だ」

「じゃはやっぱりこのブーツが教えるのが一番いいぞ！」

「ブーツは教えんの下手だからやだ。あんたのこと嫌いだし」

「ハウツ!!」

「ここで痛恨の一撃イイ!!」

俺はこのSAOという世界でこんな馬鹿騒ぎが出来るこいつらのアットホームな雰囲気がとても居心地が良かった。

そして俺は思ったのだ。

“ここなら” 本物” を見つけられるのではないかと。

第7話　そしてハチマンは見つけかけた本物を失う。

俺が白虎の里に加入してから1週間後。

突然エレンが失踪したとリーダーからメールがあった。

団員は必死に探していたが俺は盗賊スキルを使うことで10分ほどでエレンを見つけて出す事が出来た。

そこは森奥深くの寂れた廃墟だった。

「おいエレン。何してんだよ。早くギルドハウスに帰るぞ。」

「ねえ。ハチマン。一緒に死のう」

「は？何いってんだよ。」

「私怖い。この世界にすることが。ならいつともう死んじやった方が！」

「馬鹿か!!お前が死んだら悲しむやつもいるんだ!!しかも軽々しく死ぬなんて言うんじゃないよ!!」

ハチマンの突然の怒号に驚いたのか体を震わせていた。

「エレン。お前やお前達の事は俺が絶対に守る。だから安心しろ」

「……そうだね。ありがとうハチマン！戻ろう！」

エレンはすっかりいつも通りの元気を取り戻したようだ。安心した俺はエレンと一緒にギルドハウスへと戻っていった。

そしてそこから3日後俺らは27層へと来ていた。

こいつらには高すぎると思うがどうしても取りたい物があるらしい。まあこいつらも充分に強くなったしも恐らく大丈夫だろう。ただ1つ心配なのはリーダーが居ないという事だけだが：

「よーし!!今日も余裕でダンジョンクリアするぞー!」

「おー!」

その掛け声と共に俺らはダンジョンへと進んでいった。

それが惨劇になるとも知らずに：

こいつらの戦いを見てると始めに比べて本当に強くなったと思う。この層の敵を圧倒している。

そして10分ほど敵を倒しているとパーツが隠し部屋を見つけたらしい。

そこで俺は思い出した。

4日ほど前にキリトからメツセージが届いたのだ。

その内容は

「20層から30層までのダンジョンには気を付けろ。大体ダンジョンの隠し部屋にあるチェストはトラップだ。俺もこの間引つ掛かったが結晶が使えなかったからかなり苦しい戦いになった。ハチマンのレベルじゃ倒せるとは思いうけど気を付けてくれよな」
そうだった。俺ならともかくあいつらならヤバイ!!

「待て!!!」

「え?」カチャ

すると突然部屋が赤くなり20体ほどのモンスターが出てきた。

「転移結晶を使え!!」

「ハチマン!!ここ使えないよ!!」

しかも敵のレベルが高すぎる。俺は必死で戦って2, 3体倒したところで最悪の現場を見てしまった。

「ダアアアン!!!」

ダンにはモンスターに後ろから真一文字に裂かれポリゴン粒子となっていた。すると次々にロッキー、パーツが殺されてしまった。まだ生きているエレンだけでも助けよ

うとしたがもうその時には遅かった。

「エレエエエエ?!!!!」

「ハチマン……」

パライイイン

「……」

その後の事は全然覚えていない。残っていた敵を殲滅して不在だったリーダーに報告すると俺に呪いの言葉を吐いてリーダーは自殺してしまった。

当然も当然だ。

俺は虚偽のレベルを伝えていた上にあのダンジョンの隠し部屋の事を知っていた。そもそもあんなレベルの高い所に連れてっては行けなかった。

俺は：見つけかけた”本物”を失ってしまった。

そして俺はこの腐った世界に絶望した

そこから1週間俺は自暴自棄になっていた。

常に最前線で敵と戦いいつ戦ってもおかしくないような戦い方をしていた。

今は47層のダンジョンにいる。少し奥深くへと進んでいくと頭がクラクラし始めた。

「クツツ……この世界にも疲労何てあるのかよ……」

そう言い残してハチマンは倒れた。

目を覚ますとそこは知らない場所だった。

誰かの家なのか？

「こんにちは。ハチマン君」

「うわあ!？」

「驚かせてごめんね。キリト呼んでくるから待ってて」

誰だ今の……そんなことを考えているとキリトがやって来た。

「よう。やっと目覚めましたか。」

「俺どうなってたんだ？」

「お前があそこにいるかもって思ってた俺もあのダンジョンに入ってたな。やっとお前を見付けたんだがお前はまるで死んでもいいような戦いをしてた。配だったから後をつけてたらお前が急に倒れたからここまで運んだんだよ」

「そうか：ありがとう。それにしても何でそこに俺がいると思ったんだ？」
「ああ：それはな：」

第8話 エレンからのプレゼント

「ああ・それはな・」

キリト side 一週間前

一週間前突然フレンドからハチマンが居なくなつた。

急いで生命の碑を見に行ったがHachiManの名前に斜線は引かれて居なかつた。つまり生きてはいるのだ。

俺は今では攻略組にいるサチに情報収集してもらいつつ片っ端から探していった。

その1週間後。βテストからの知り合いの情報屋 アルゴから重要な情報を聞いたのだ。

「ハッチーなら最前線で戦つてるの見たゾ？」

「それは本当か!？」

「俺たちは嘘つかないゾ」

その直後サチからもメッセージがあつた。

「今最前線で次々とソロプレイヤーがダンジョンをクリアして言う情報があるの。見た目は170-180ぐらいの身長で目が腐つてるって!!これってハチマン君

だよね？」

【ああ。そうだ。情報ありがとう】

返信を返すと急いで47層のダンジョンを片っ端から探していった。

「それで今に至るって訳だ。」

「なるほどな」

「あまり詮索する気は無いが何があったのかぐらいは教えてくれないか？」

「分かった……」

俺はハチマンから事の顛末を聞いた。

ギルド全滅?……ハチマンがこうなるのも無理はない。

だけど……

「今の話を聞いたら立ち直れないのは分かる。だからってお前が死んでいい事にはならない」

「俺は別に死んでもいいんだ。せつかく見つけた本物を自分のせいで失った。そんな俺に生きてる資格何てな……」

「そんなわけないだろ!!お前が死んで悲しむやつもいるんだ!!」

「お前の言う本物が何なのかは分からない!!…そして失った本物を取り戻すことは出来ない…だが、その本物を新しく見つける事は出来る。俺と一緒に見つけてやるよ!!!俺は死なねえからな」

「ありがとう…キリト。少し落ち着いたよ」

「そりゃあ良かった」

そこでふとキリトは思い出した。

「そういえばハチマン? 町の噂で聞いたんだがクリスマスマスの夜モミの木の下に『背教者ニコラス』って奴が出るらしいんだ。そいつが蘇生アイテムをドロップするらしい」

「それは本当か!」

「あくまでも噂だからな…でも信憑性は高いと思うぞ。でもここで問題が出てくる。どう考えてもレベルが足りない」

ハチマンのレベルは47だった。

「少なくとも60少しは無いとダメみたいだ」

「分かった。今すぐ下層でレベル上げしてくる」

「待て!俺も行く。一緒について言っただろ?」

「おう、ありがとな」

そう言ったハチマンの顔は……少しだけ晴れていた。

ハチマン side

そしてクリスマス当日。ハチマンとキリトのレベルは64になっていた。そして「背教者ニコラス」の現れるだろうモミの木に向かつていった。その途中索敵スキルを発動させていると数人が尾行していることに気づいたため立ち止まった。

「尾けてるのは誰だ？」

すると盗賊スキルを解除したのかそこに出てきたのはクライン筆頭のギルド風林火山だった。

「おい。ハチマン、キリト。お前ら二人で行くつもりなのか？」

「嫌、俺一人で行くつもりだ。」

「何ってんだ!?! ソロじゃ死んじまうぞ! 俺たちと一緒に行くぞ!! 誰にドロップしても恨みっこなしだ」

「なんでだよ!?! 一緒について言ったら!! それにソロじゃお前が死んじま…」

「黙れよ」

「これは俺一人がやらないと意味がないんだ」

そう俺は一人じゃないと意味がない。蘇生アイテムを使いエレンの最後の言葉を聞

かなければならないのだ。

それがどんな言葉だとしても。

すると突然大量の軍隊が出てきた。

「ゲ！こいつらレアアイテムのためなら一線さえ超えるって有名な聖龍連合じゃねえか！」

「ハチマン！ここはキリトと俺たちで食い止める早く行け！」

「クライン……」

俺はその場をキリトと風林火山に任せ急いでモミの木の下に向かった。

クリスマスの鐘が鳴った時上からすさまじい雄叫びとともに【背教者ニコラス】が落ちてきた。

「うるせえよ……」

そう吐き捨てて俺は斬りかかった。

10分ほど戦った所で回復結晶が無くなってしまった。

だがモンスターの体力もあと一撃が二撃分。

「ハアアアアア!!」

俺は最後の力を振り絞って真一文字に切り裂き

【背教者ニコラス】はポリゴン粒子となっていた。

ドロップしたアイテムを急いで確認すると

そこには蘇生アイテムがあつた。

だが喜んだのも束の間。アイテムの説明を見て俺は絶望した。

キリトside

聖龍連合と交戦すること20分。俺達の決死の抵抗により聖龍連合は去っていった。

「ああ・疲れたぜえ・」

そうクラインが言った直後ハチマンが戻ってきた。

その手には蘇生アイテムらしき物がしっかりと握られているのだがハチマンの眼がおかしい。

腐ってるのは普段だとして完全に絶望仕切ってる眼だ。

「おいハチマン。それ・蘇生アイテムなんだよな?」

「……そうだ……」

すると手に持っているアイテムをこちらに投げてきたので受け取ってアイテムの説明を見てみると驚愕の内容が書かれていた。

「死んでから10秒以内…?」

まあ当たり前と言えば当たり前だ。

HPが0になったら脳が焼かれるのだからそこから蘇生等とは当然無理なのだ。

余談だがこのアイテムの説明は後にとても重要な情報となる。

「キリト。それは今度お前の目の前で死んだやつに使ってくれ」

そう言つてハチマンが去ろうしたところを

クラインが止めた。

「ハチマン。お前だけは絶対に生きろよ!!」

クラインは涙ぐみながら言った。きっとハチマンの顔で事情を察したのだろう。そういう所だけは気が利くやつだ。

「じゃあな。クライン、キリト」

そう言つてハチマンは去つていった。

ハチマン side

俺は再び絶望した。蘇生アイテムがあると言う淡い期待を持っていたのだ。良く良

く考えたならそんなに都合の良いものが有るわけがない。それなりに条件があるはずだったのだ。

俺はこれからどうすればいいのだろう。

(とりあえず頭の整理をしたいから寝るか)

そう思い左手で操作して装備を外そうとすると

一犬のプレゼント入りメッセージが入っていた。

それは何と死んでしまったエレンからだった。

どうやら時限式でクリスマスの日に届くようにしたらし。俺はメッセージを聞くことにした。

「メリークリスマス、ハチマン！これをハチマンが聞いている時には私はもう死んでしまっているでしょう。私本当はずっと怖かったんだ。でもそれをハチマンが救ってくれたんだよ？実を言うと私はハチマンのレベル知ってたんだ」

そう言うと彼女は続けた。

「さて、ハチマンはあの日からずっと私は死なない。ずっと守るって言ってくれたよね。だから私が死んだ今ハチマンはきつと自分の事をすごく責めてるでしょう。だけどそれは私個人のせいなの。」

だからハチマンは頑張って生きてね。

生きてこの世界の最後を見届けて、この世界が生まれた意味、私みたいな弱虫がここに来ちやっつた意味、

そして、君と私が出会った意味を見つけてください。それが私の願いです。

じゃあね、ハチマン。君と逢えて、一緒にいられて、本当によかった。じゃあ時間も余っちゃつたし歌でも歌うね！」

フンフンフンフンフン

「最後に私からのプレゼント！ハチマン、来てる服がダサかったから私がプレゼントしてあげる！それじゃあ時間が来ちやつたから本当にお別れだね。もう一回言います。君と逢えて本当に良かった！」

そう言うのと記録結晶は効力を無くした。

そして俺はエレンの最後の言葉が分かってしまった。

「ありがとう。さようなら」

パライイイン

「バカやろう……」

俺は泣いた。

その涙がクリスマスの夜中に枯れることは無かった。

第9話 シリカとの出逢い

「ん・」

朝起きるともう11時になっていた。

どうやら泣き寝入りしてしまったようだ。

俺はエレンの言葉のおかげで自分を取り戻すことが出来た。

「そういえばプレゼントあるっていつてたな・」

メッセージのプレゼントを開けるとそこにはコートが入っていた。

名前は「ソウルズ・オブ・グレイエイツ」

エリの辺りに8つの勾玉がある灰色のコートだった。

「なかなかいいセンスしてんじゃねえか」

そう言つて俺はそのコートを着てまずはキリトに謝りに行こうと思ひ宿を出てキリトに謝罪の文と共にメッセージを打った。

どうやらキリトは今ロザリアというプレイヤーが筆頭のオレンジプレイヤーの集まるギルドを黒鉄宮へ送ってもらうように依頼されたようで今は28層にいるようだ。

俺は今33層。少し敵を狩ってから行こうと思いき33層の森へと向かった。

10分ほど敵を狩っていると女の子の悲鳴が聞こえたためすぐに向かうとそこには今にもモンスターに切り裂かれそうな小さな少女がいた。

「危ない!!」

俺はすぐに動きモンスターに斬りかかるとモンスターはポリゴン粒子となっていた。

「大丈夫か?」

「はい。私は大丈夫ですけどピナが…」

「ピナって言うのは?」

「小さなドラゴンです。私ビーストテイマー何ですけど私が殺されそうになったときにピナが代わりになってくれたんです。私のせいでピナが…」

「ちよつと待て。そのピナから何か遺留品が落ちなかつたか?」

「えつと…ピナの羽があります」

「何か遺留品があれば47層の思い出の丘つて所に咲く花で蘇生出来るぞ」

「ほんどですか!?!でも…47層何て私のレベルじゃ無理ですよ…」

「…しようがないな。俺と一緒に行ってやるよ」

「嫌…でも悪いし…」

「お前見てると妹思い出してほっとけないんだよ」

「あはは！分かりました。ありがとうございます。私の名前はシリカです」

「俺の名前はハチマンだ。よろしく」

そう言つてシリカを助けることに俺は協力することにした。もう夜が近かつたためその日は宿に泊まろうと町を歩いていた。

するといかにもケバいい女がこちらに来て話かけてきた。

「あーら。シリカさんじゃない。あの森から抜け出せたのね。あれドラゴンちゃんは？もしかして死んじゃった？」

「確かにピナは死にました。でも生き返ります!!」

「ふーん。思い出の丘に行くんだ。でも貴方のレベルじゃ無理よ」

「だから俺がついてくんだよ」

「貴方もこの女にたらしこまれたの？こんな腐った目の男に何が出来るんだか」

確信した。こいつはウザい。こいつに関わるのは面倒なので無視して早く宿へ向かう事にした。

「シリカ。面倒だし早く行くぞ」

「は、はい！」

そう言つて俺らはあの女達と別れた。

「何なんだあの女は？」

「あの人はロザリアさんと言う前まで一緒に戦ってた人です。でも感じが悪かったので私はそのグループから抜けました。」

（ん？ロザリア：どこかで聞いた気が…）

「あ！思いだした…」

「何をですか？」

「シリカ。あの女とは二度と関わるな。あいつはオレンジプレイヤーだ」

「え？まさかロザリアさんが…」

「まあ関らなければ問題ないしな。宿も着いたしとりあえず休むぞ。後で明日の予定話すために部屋に行くからな」

「分かりました！」

そう言つて宿で俺らは別々の部屋で休んだ。

「さて、キリトに連絡するか。」

【ロザリアを33層で見つけたぞ。ケバい女の事だろ？】

するとすぐにメッセージが帰ってきた。

【そいつだ！情報ナイスだ!!】

【また情報あったら教えるわ】

そう返してシリカの部屋に向かい作戦を説明し始めた。

どのルートで進むのか話している途中に気配がしたので索敵スキルを使うとドア越しに誰かが居るのが分かった。

俺はシリカとの会話を止めて一気にドアまで詰めて思いっきりドアを開けたがそこには誰も居なかった。

「えつと・ハチマンさん？どうかしましたか？」

「今誰かいた。多分話の内容は全部聞かれたな」

「でもドア越し何て・」

「聞き耳スキルをある程度極めるとドア越しぐらいなら聞こえる」

「でも一体誰が・」

「さあな」

そうハチマンは言いつつ実は誰が聞いていたか分かっていた。

(恐らくロザリアの仲間だな・ん？じゃあ上手くいけば・)

そう思いハチマンはキリトにメツセージで作戦を伝えた。

翌日俺らは宿から出て47層に向かっていた。

「いいか？危ないと思っただらすぐ逃げろよ？俺が殺るから」

「大丈夫ですよ！」

「ほんとかなあ……」

そんな事を話しつつ俺らは47層へと着いた。

そこには綺麗な花畑が広がっていた。

「うわあ!!綺麗ですね！」

「そうだな。早く行くぞ」

「待ってくださいよお!!」

途中の道でシリカがモンスターに絡まれたり等トラブルがあつたが何とか目的地の
思い出の丘に着くことが出来た。少し遅れてシリカが着くとその時綺麗な一輪の花が
咲いた。

「これがそうだ。ここじゃ危ないから帰ってから使ってくれ」

「はい！本当にありがとうございます!!」

(さて・もうそろそろかな・)

俺は素敵スキルを使用すると案の定草むらに隠れている奴らがいた。

「おい。そこにいるやつら出てこい」

「何だい。待ち伏せしてるのが分かってたのね」

「まあな。レアアイテムが大好きなロザリアさんなら絶対に奪いに来るとは思ってたからな。つてことで増援呼びました。」

「何!？」

「キリトー出てこーい」

そう言うのと反対側の草むらからキリトが出てきた。どうやら隠蔽スキルで隠れていたらしい。

「ロザリア。お前を黒鉄宮送りにしてもらおうよう依頼されてる。大人しく言ってもらおうぞ」

「ふん！たかが二人に何が出来るんだい。殺しちやいな！お前たち！」

「黒のコートに：：片手直剣：：ロザリア様!!あいつ攻略組の黒の剣士ですよ!!」

「そんなわけ無いだろ!!こんなところに攻略組何て！早く行かないとお前達を殺すよ！」

「分かりました：おりやああ!!」

そう言つて5人ほど俺たちに掛かってきたが俺らは無傷だ。

「何で無傷なんだ!？」

頭の弱いこいつらに俺が説明してやった。

「あのな？お前ら精々レベル30だろ？俺は76でキリトは78だ。ここまでレベル差があるパツシブスキル自動回復で攻撃を食らっても実質無傷になるんだよ」

「そんな…」

「つてことで傷つくか大人しく黒鉄宮行くかどつちかにしろ。俺らはソロプレイヤーだから数日オレンジになろうがどうでもいい」

「分かりました……」

そう言うのとロザリアの部下たちは降伏したのか武器を捨てたので黒鉄器送りの転移結晶で先に送った。

「ロザリア？お前は どうするんだ？」

「……クツ……分かりました。」

「じゃあこつちに来い。早く送ってやる」

「はい……」

そういうとロザリアはこちらに來たが突然短剣を取り出してシリカに襲いかかった。

「死ねえええ!!」

するとキリトが一速く反応してロザリアに転移結晶を張り黒鉄宮へと送る事が出来た。

「ありがとうございます！」

「すまなかつた。君を困にするような事をして」

「いいですよ別に！助けてくれたじゃないですか！」

「そう言つて貰えると助かるよ。それじゃあ早く帰つて蘇生させてあげな」

「はい！本当にありがとうございました！ハチマンさん！キリトさん！」

そうシリカは言つて俺達と別れた。

第10話 アスナとの再会

シリカと別れた後俺はキリトにまず謝罪した。

「キリト。本当にすまなかつた。あの時はあんな態度取っちゃって……」

「いいんだよ別に。それよりお前が立ち直れて良かったよ」

「ギルドメンバーの一人から時限式のメッセージが届いてな。それで少し落ち着いたんだ。それでキリト……一度あんな態度取った身だが俺と、本物を、見つけて欲しい」
ハチマンは断られるのは覚悟していた。

それが当然とも言えるような態度を取ってしまったのだ。

「アハハハハ」

「何笑つてんだよ。こっちは真面目なんだぞ。」

「悪いな。お前のその顔見たら面白くなっちゃって。そんなん一緒に見つけてやるに決まってるんだろ。俺達親友なんだからよ」

「そうか……俺達親友だもんな。ありがとうキリト。じゃあまずは何処に行くんだ？」

「じゃあ攻略組の所に行くか。今の最前線は58層だな」

「了解。じゃあ行くぞ【黒の剣士】」

「その二つ名はやめろ!!お前にもその内附けられるからな!!俺の予感がそう言ってる!!」

「はあ?んな訳無いだろ。アホな事言っていないではよ行くぞ」

「つたく…」

そんなこんなで二人は最前線へと向かった。

余談だがハチマンはこの後本当に二つ名を付けられることになる。

58層に着いた二人は今攻略組の会議が真つ最中だと言う宿へと向かった。

「おい。ほんとに俺なんか入っていいのか?」

「良いに決まってるんだろ。っていうかお前攻略組の即戦力だぞ。」

そんな話をして宿へと着くとキリトが思い切りドアを開けた。

「会議の途中だぞ!!何開けてる…:…って【黒の剣士】!?!」

「その呼び名は止めろ」

「久しぶりキリト君。後ろに居るのは…もしかしてハチマン君!?!久しぶり!急にフレンドから消えたから驚いたよ!」

おお:俺の名前を覚えていてしかも俺の事を心配してくれてるとは。

やだ、ハチマン惚れちゃう。まあ冗談なんですけど。

ハチマンが入るとヒソヒソ話しているのが聞こえたのでそれを見てキリトが言った。

「この男、ハチマンは現在79レベル。俺の次に高いから即戦力のはずだ。今日から攻略組に積極的に参加するみたいだからよろしくな。因みにこいつもソロプレイヤーだ」

「えっと・よろしくな」

やった！ 嘯まずに言えたぞ！

「分かった。よろしくねハチマン君！じゃあ会議を続けようか」

会議の席に座ろうとすると俺を看病してくれたサチがいた。

「この間は本当にありがとな。助かった」

「別にいいよ！これからよろしくね！」

そんな会話をしてから席に座りある程度会議を聞いていると村の住人達を囿にして魔物を罠に嵌めると言う案がアスナから出た。

当然俺は反対だ。

「ちよつちよ待ちええ！」

最悪だ・嘯んでもうた。

おいそこ。キリト笑わない。

「えっと・俺は反対だ。住人達を囿にするなんて」

「所詮NPCよ。死んでも直ぐに蘇るの」

「それでも俺は反対だ。」

「俺もだな」

そう言つてキリトも同調してくれた。

「駄目です。攻略組にいる以上私の命令には従ってもらいます」

「……」
「ここである疑問が1つ湧いた。」

「何でお前がそんなに仕切つてるんだ?」

「そう言つてと突然周りがざわつき始めた。」

「あれ?何かおかしいこと言つた?」

すると一人の男が立ち上がった。

「馬鹿者かお前は!!アスナ様は攻略組最強ギルド【血盟騎士団】の副団長だぞ!そして私はこのアスナ様の護衛役に付けられたクラディール様だ!!身の程を知れ!」

嫌、お前は聞いてない。

「あのアスナがねえ・始めの頃は「スイッチ?ボタン何て無いよ?」とか天然キャラやつてたのに:」

「それは言わないでハチマン君!」

段々コメディー見たいになってきたから流れ戻そ。

「話を戻すけどその作戦なら俺は反対だ。参加しないぞ」
「俺もハチマンと同じだ。帰らせてもらう」

そう俺たちは言い放ってその場を去っていった。

第11話 お昼寝の時間

「キリト悪かったな。俺が変なこと言ったせいで…」

「俺も本当に思ってたことだしいいんだよ」

「そうか：これからお前はどこ行くんだ？」

「俺は家に戻ろうかな。この間ハチマンを連れてったころ」

「お前ってサチと付き合ってるの？」

「ん？付き合ってるっていうか結婚してるぞ」

「へーそうなの？結婚!?クソ野郎：お前は俺と同じエリートボツチだと思ってたのに：

見損なった」

「何だよそれ：つていうかお前にはアスナがいるだろ？」

「は？何いってんの？馬鹿なの？」

「はあ：まあいいけどハチマンはどうするんだ？」

「俺はそこら辺ぶらぶらしてるよ」

「そうか。じゃあなハチマン」

「おう」

そう言つて俺達は別れた。

少し歩いていけると眠くなつてきた。今日は日差しも天気も最高の設定だ。そう思つてるとちようどいい草原があつたのでそこで寝転がることにした。

本当に寝ると睡眠PKという寝てる間に相手の手でデュエルを仕掛けて殺されることもあるみたいだから寝ると言つても目を瞑る程度だ。

5分ほどそうしていると聞き覚えのある声が出た。

「攻略組の皆がダンジョンに潜つてると言うのに貴方は何をしてるの？」

アスナか：

「馬鹿なの？今日はゲーム設定が全部最高なんだよ。日差しとか天気とかかな。こんな日にダンジョン潜つてられるか。アスナも寝転がって見ろよ。最高だぞ」

「分かつたわよ…」

そう言つて寝転ぶとブツブツ文句を言つていたのに突然聞こえなくなった。

どうしたのかと思ひ目を開けて見るとそこには爆睡している副団長（笑）が居た。

「睡眠PKが怖いし見といてやるか…」

3時間たつてもまだ起きない。流石に寝すぎじゃないか？

そんなことを思っているとガサツと音が聞こえてきた

「ん…」

そこにはよだれを垂らしている寝起きの副団長（笑）が居ました。言葉の間違えると死なない程度に殺されるため慎重に俺は発言することにした。

「よお・気持ち良く寝れたか？」

そう言うところには顔が真っ赤なアスナがいた。

あれ？何か間違えた？

「一回奢る・・・」

「ん？」

「一回奢るって言うてるの!!それでチャラにして！」

「分かったよ・・・じゃあ今から行くぞ」

10分ほど歩くとサイゼのようなNPCレストランがあったのでそこに行くことにした。

「やっぱここが落ち着くわ」

「何で？」

「あ？安くて上手い洋風のレストラン。サイゼみたいだろ？」

「サイゼ：行ったことないんだよね・・・」

「お前田舎者なの？」

「千葉だから田舎かもね：」

「おい。千葉県民として田舎と愚弄することは許さんぞ」

「え？ハチマン君もなの？つていうかそろそろリアルの話はやめよ！」

「そうだな」

「キヤアアアアアア」

すると突然女性の悲鳴が聞こえてきた。

「何事だ!？」

「ハチマン君！行くよ！」

「分かった」

俺達は悲鳴の方向へと急いで向かった。

第12話 圏内事件

悲鳴のする方向へと行くとそこには体に剣を突き立てられ身動きの取れない武装した男がいた。

「アスナ！俺は下で受け止めるからアスナは上に行ってくれ！」

「分かった！」

しかしアスナが階段登っている途中に虚しくも男はポリゴン粒子となって消えていった。

「野次馬達!!デュエルのwinner表示を探してくれ!!圏内殺人ならそれしかない！」

「どこにもないぞそんなの！」

「ハチマン君！一番上まで来たけど誰も居ないよ！とりあえず凶器持ってそっち行くね！」

「分かった！」

デュエルじゃない？

まさか：圏内PKで新しい方法が生まれてしまったのか：

「この中で死んだ男と知り合いの奴は出てきてくれ！」

そう言うのと一人の女性がこっちに来た。

「私はヨルコと言います。彼の名前はカインズ。カインズとは元ギルドメンバーでした。今日は彼と食事に行く約束をしてたんです。ですが途中ではぐれてしまつて：それであの現場に遭遇しました」

「それじゃ最初の悲鳴も君が？」

「はい……すみません：気持ちを落ち着かせたいので話すのは明日で良いですか？……」

「分かった。アスナ、俺達と同じ宿に行くぞ。出来ればアスナはヨルコさんと同じ部屋に居てやってくれ。」

「分かった。ヨルコさん……行く？」

「はい……」

宿に着いて部屋に入るなり俺は考えを張り巡らせた。

(新しいPKの方法なのか？……待てよ……そもそも死んでなかったら：確かポリゴン粒子のようなエフェクトは死んだ時と………防具が壊れた時……！)

そしてある一つの仮説を建てた。

ただこれを確認するには情報が無さすぎるので

その日は寝ることにした。

翌日俺はアスナにやることがあると行って事情聴取は任せた。

俺はまずエギルの所へと向かった。

「いらっしやいま……お客さん以外は呼んでないぞ」

「客だよ。エギル、先日圈内PKが目の前であったんだがそれが厄介でな……」

俺はエギルに全て事情を話した。

「デュエル無しって……出来るのか？」

「分からない。だからまずこの凶器を調べて欲しい。もしかしたら何か特殊能力が着いてるかも知れないからな。」

「こりやまた禍禍しいな……えつと名前は【罪の茨】か……」

プレイヤーメイドだが聞いたことない前だ。名前は……グリムロックだ」

グリムロックね……

「ありがとなエギル。それじゃあまだ調べることもあるから行くわ」

次に俺は生命の碑へと向かった。ここには死者には斜線が引かれてる。

カインズだからCainzか……

……やっぱりな。思った通りだ。

カインズは死んでない。

すると突然メツセージが届いた。

アスナね：

【大変！ヨルコさんが誰かに後ろから誰かに刺されて窓に落ちちゃった。場所はさつきまで泊まっていた宿だよ！】

【ちよつと待つてろ。もうすぐ行く。】

ヨルコさんはYorukoだよな：

やっぱり引かれてないな。

ということはやっぱり死んでない。

あのポリゴン粒子は防具が壊れた事によるものだ。

あそこから消えたのは転移結晶か何か使ったのだろう：

肝心なのは何故こんなことをしたかだ。

それは事情聴取をしたアスナが知っているはずだ。

俺は急いでアスナの所へ行くことにした。

「あ、ハチマン君！」

「おう。その男は誰だ？」

「シユミットさん。ヨルコさんとカインズさんの元ギルドメンバーだよ」
「そうか。じゃあヨルコさんから聞いた内容を教えてくれ」

こうしてアスナはギルド【黄金林檎】に起きた悲劇を語りだした。

第13話 ラフィン・コフィン

「なるほどな。【黄金林檎】でレアドロップを売却するかしないかで揉めて結局多数決で売ることになったと。そしてリーダーのグリセルダさんが売りに行っているときに何者かにグリセルダさんが殺されたってことか。」

「うん。要約するとそんな感じ」

「そういえば俺の調べてた事だが凶器に使われた剣を調べてた。この剣の名前はギルティソード【罪の茨】だ。プレイヤーマイドで作った人の名前はグリムロックだ。そのこの男、この名前に聞き覚えは無いか？」

「グリムロックは：【黄金林檎】のギルドメンバーでグリセルダさんの結婚相手だ」

「なるほどな：圈内殺人：グリセルダさんの幽霊かもは」

「そんな：俺も殺されちゃう！」

「もし心当たりがあるのならグリセルダさんの墓に行つて謝罪してこい。そうしないと本当に殺されるぞ」

「実は少しだけあるんだ：分かった。行ってくる」

「さて。邪魔者も居なくなつたし本当の事を話そうか」

「うん。本当は幽霊なんかじゃなくてグリムロックさんの復讐ってことだよな?」

「違うぞ。俺は今日凶器を調べたあと生命の碑に向かったんだ。そこでカインズさんとヨルコさんの名前を見たんだが二人とも斜線が引かれてなかった。つまり死んでないって事だ。」

「でも確かに!」

「俺の推測はこうだ。あのポリゴン粒子は死んだ事によるものではなく防具が壊れた時によるもので壊れた瞬間に転移結晶を使いどこかに行った。」

「なるほど。そうすれば死んだように見えるかも。でも何でそんなことしたの?」

「ざつきシユミットって奴が心当たりがあるって言ってただろ。多分グリセルダさんが死んだ事件の真相を調べてるんだ」

「そう言っつてハチマンはあることに気づいた。」

「待てよ…だとしたらヤバイ!」

「アスナ!!グリセルダさんの墓の場所は分かるか?」

「分かるけど…」

「場所を教えてください!!後来れるだけの攻略組を来させろ!」

「何で?」

「このままじゃあの三人は多分殺される!グリムロックにな!」

「ええ!？」

俺は急いでグリセルダさんの墓へと向かった。

シュミット side

ハチマンが墓へと向かっている時にシュミットは墓の前で

謝罪をしていた。

「グリセルダさん・止めてくれよ!これ以上殺さないでくれ:俺が悪かったよ。俺は誰かが紙切れ残っていて、

その指示に従って報酬を貰ったんだ!その指示はグリセルダさんの部屋に侵入できるように「回廊結晶」の位置セーブをしてギルド共通のストレージに入れるっていう指示だった。本当に悪かった。謝る:だから殺さないでくれ!」

《それは本当か?》

シュミットは驚いた。墓から声がしたのだから。

「本当だ!本当に悪かった!」

そう言うのと目の前にはシュミットのよく知る人物が二人居た。

「カインズ:ヨルコ:何でだ?:死んでなかったのか:」

「ああ悪いがお前を嵌めさせてもらった」

「そうか:」

そう言うときシュミットは後ろからいきなり衝撃がした。

麻痺属性のついた剣で切り裂かれたのだ。

「何だ：お前は：」

「グリムロックの依頼だよ。じゃあな」

「何でグリムロックが：」

シュミットは死を覚悟して目を瞑った。

しかしシュミットが死ぬことはなかった。

代わりに自分を殺そうとした男の手が消えている。

「間に合って良かったわ。お前らは殺人ギルド ラフィン・コフィン【笑う棺桶】だな？」

ハチマン side

グリセルダさんの墓が見えると自分の想像してた最悪の状況が起きていた。

「クツソ：やつぱりラフィン・コフィンが絡んでたか：」

このままじゃ間に合わないと思ったハチマンは最近少しだけ上げていた投剣スキルを使ってシュミットを殺そうとしていた男の手を切り落とした。

「誰だお前は：」

「俺はハチマンっていう名前だ。見たところお前がリーダーみたいだな」

「ああレッドギルド ラフィン・コフィンのリーダーPohだ。早速だが邪魔をするな

「殺すぞ」

「痛い目見ないと止めないんですかね？なら戦ってもいいけど」

「俺は現役軍人だ。舐めない方がいいぞ餓鬼」

「そうですか。じゃあやろうか」

こうしてハチマン vs P o h の戦いが繰り広げられる事になる。

第14話 所有欲

戦つてみるとこの男は中々強い。

やはり現役軍人なだけはあるな

だけどな・

「やっぱりレベルが低いな」

ハチマンはPohの攻撃をいとも簡単に避けて剣でもう片方の腕も切り裂いた。

「現役の軍人だろうが何だろうがこの世界じゃレベルが全て何だよ。このまま後ろの二人も入れて戦つてもいいが後5分で攻略組が25人来る。今の内に退くか攻略組と戦うかどっちか決めろ」

「チツ・・・ハチマン。貴様は絶対殺す。次に会うときはそこがお前の墓場だ」

「中二臭いのありがと。さっさと消えな」

そう吐き捨てるとPohたちラフィン・コフインは森の中に消えていった。

「ふう。ヨルコさん、カインズさん、シユミット、大丈夫か？」

「ありがとうございます。私たちは大丈夫ですが何故ここに？」

「貴方達の圈内事件の絡繰りが解けたからですよ。ここで質問したいのですが貴方達の

防具を破壊した凶器はいつグリムロックからもらいました?」

「私達がこの作戦を計画した時にです。フレンドだったのでメッセージで連絡を取ってもらいました」

「なるほどね・さつきラフィン・コフィンが言つてたように貴方達を殺すように仕向けたのはグリムロックです」

「何でそんなことを!!グリムロックさんは私達に協力してくれたんですよ!」

「それはこれから話してくれると思いますよ?アスナそろそろ出てこい」
「分かった」

そう言つてアスナはヨルコ達によく知る人物を連れて森から出てきた。

「グリムロック(さん)!?」

「やあ。久しぶりだね」

「さつきラフィン・コフィンの言つてた事は本当ですか?」

「そうだよ。本当はグリセルダが死んだ事件を黄金林檎の関係者を全員殺すことで抹消しようとしたのにこいつらの邪魔が入ったからね。」

「グリセルダさんはお前が殺したのか?」

「違うよ。さつきのラフィンコフィンの人たちに依頼したんだ」

「何故グリセルダさんを殺した。指輪が欲しいだけの理由じゃないんだろ?」

「ハチマン君だったかな？その通りだよ。理由はそれだけじゃない。グリセルダと僕は現実でも結婚していた。」

「なっ!?!」

俺は自然と怒りが込み上げてきた。

「現実でのグリセルダは実に良かった。僕に何でも頼ってくれて幸せな生活を送っていたよ。それがS A Oに来てから一変したよ。彼女は勇ましくなった。この世界に怖がっていた僕と違ってね。だから殺したんだ！現実でのグリセルダはもう居ない！それならいつそ殺した方がいいと思っただよ！」

「歪んだ愛情ね……」

「アスナ君？歪んでなど居ないさ……ちゃんとした愛情だよ」

流石にキレたので俺は低い声でグリムロックにいい放った。

「お前がグリセルダさんに抱いていた感情は愛情じゃない。単なる所有欲だ」

「貴様に何が分かる!?!」

「そんなのは……本物」じゃない。こいつを見ると虫唾が走る。早く黒鉄宮に送ってくれ」

「分かった。それじゃあさようなら。おとなしく牢獄に行つてなさい。」

こうしてグリムロックが転移結晶で飛ばされ圈内事件は幕を閉じた。

第15話 何とかデイルさんとのデュエル

グリムロックを黒鉄宮に送った後少し遅れて攻略組がやって来た。

「アスナ！：それにハチマンじゃねえか！」

聞き覚えの声がすると思っただらそこには侍風の格好をしている男 クラインがいた。

「久しぶりだなクライン」

そう言うのとクラインがそつと耳打ちしてきた。

「おう。そのハチマン：もう大丈夫なのか？」

「まあ完全には立ち直れてないがキリトのお陰で楽になったよ」

「そうか：良かったな。まあお前さんにはアスナもいるもんなあ！」

「は？意味わかんねえよ。」

そんな会話をしてると一人の男がしゃしゃり出てきた。

えっと……この細長い顔は：何とかデイルだ。

「アスナ様！ラフィン・コフィンが出没する可能性があるって聞いて来たのですが……」

「ラフィン・コフィンならハチマン君がリーダーのPohと戦って勝利。そのまま逃げ

たわ」

「この男が？あり得ません！こんな目の腐った男がそんな強い訳が…」

「何？そんな目腐ってちやダメなの？しようがないだろ？つていうかそこまで言うならデュエルでもする？」

「受けて立とう。最も恥を書くのは貴様だがな」

「ブーメラン飛びすぎだろ…」

「こうして俺と何とかディールはデュエルをする事になった。

「早くやるぞ」

モードは半減決着モード。体力が黄色になったら勝敗の着くモードだ。

「その減らず口を叩きのめしてやる。秒殺でな」

アスナの掛け声でデュエルスタートだ

「よーい…どんー！」

かけっこじゃないですよ…アスナさん…

デュエルの結果は何とかディールの言ったように秒殺だった。アイツがだけど。

「こんなはずじゃない!!この腐ってる目の男は心まで腐ってる！イカサマしたんだ！
じやなきやこのクラディール様が負けるわけが…」

そうだクラデイルだ：

芋頭Ⅱクラデイル

この公式を覚えよう！

「キュイーン」

何の音かと思いきや見てみると芋の顔寸前の所にアスナがレイピアを突き刺したようだ。

「貴方は負けたの。これは事実よ。後ハチマン君の悪口は許さないわ。大人しく引きなさい」

おお：俺の事を庇ってくれるだなんて：

訓練されたエリートボツチの俺じゃなきや惚れて即効告って振られちゃってるよ!!

振られちゃうのかよ：俺……

「分かりました……」

そう言つてクラデイルはとぼとぼと帰っていった。

「他の攻略組の皆も帰っていいわよ！今日はありがと！」

アスナスマイルに癒されたのか皆上機嫌でかえっていった。

やだ！この子素であざといとか天使なの？

違うわ。攻略の鬼（笑）だったわ。

「俺も帰るわ。じゃあな。ヨルコさん達も元気だな。」

「本当にありがとうございます！」

「アスナも協力ありがとう。んじゃあな」

「ちよつと待って!!」

「ん？」

「フレンドなってよ！」

「ああ：分かったわ」

俺はアスナとフレンド交換をすると元居た宿に戻り

今日の疲れを癒すように熟睡した。

第16話 ユニークスキル

俺は今どこにいるでしょーか！

5！4！3！2！1！

正解はここー！ここー！

ここー！ここー！ここー！

正解はですね！リア充キリト君のスイートホーム前に居まーす！

このテンション疲れるな：

何故こんなところに居るのかと言うと

グリムロックの一件から一夜開けた後キリトからメッセージが来ていて急いで来て欲しいとのことだ。

まさか見せつけるための嫌がらせじゃないよな？

だって何回もノックしても出ないんだもの。

居ないのかと思ひ窓を覗いてみるとそこには何と…

熱い抱擁をしながら深い接吻をしておるキリト君とサチさんが居ました。しかも着ている服が乱れてる。

魔が指した俺は聞耳スキルを使って会話を聞くことにした。

「キリト君・激しすぎ・さつきからノックされてるけどハチマン君じゃないの？ 今日会うつて言つてたじゃない」

「サチが可愛すぎるからいけないんだよ！ 今夜はもつと激しいよ？ まあハチマンは大丈夫だよ。親友だから許してくれるはず」

………許さねえぞ

つていうかキリトつて肉食系なんですな。

戸塚見たいな顔してるのに。

まさか戸塚もか!? まあ大天使なら許せちゃうけどね！

「おーい！ キリトー！ いないのかー？ これ以上待たせるとサチさんにお前がナンパしてたこと言っちゃうぞー」

俺は冗談で言ってみると突然外からでも分かるレベルで

家が凍りついた？この感覚は：雪ノ下と一緒だ。

乙女ってマジ怖い。

5分ほど待つとゲツソリとした顔をしたキリトが出てきた。

「ハチマン!!何であんな嘘言うんだよ!」

「だって人を待たせて抱擁とか接吻とかされちゃつてもね……何か服も乱れてたし……」

「見たのかよ!!」

「ああしかも『今夜はもつと激しいよ?』とか言つてたしな……肉食系なんですわね」

「ああああああ忘れてくれえええええ!」

「まあお互い様ってことで。んで用件は何だ?お前が呼び出すことは相当なんだろう?」

「ああ：実はな……ユニークスキルが発現したんだよ……」

は?

「ユニークスキルってあの?」

「そうだ。出現条件が書いてないんだよ。名前は【二刀流】らしい」

「双剣か：んで何？自慢したかったの？」

「ちげえよ！両手剣って言うぐらいだから剣のレベルも同じぐらいじゃないと駄目だろ？俺の持つてるエリユシデータと同じレベルの剣が欲しいんだ。だけど生憎知り合いに鍛冶屋がない。お前の知り合いにマスタースミスは居ないか？」

「エギルは違うしなあ：アスナに聞いてみるか：」

「つていうかハチマン！お前も俺と同じぐらい強いんだからもしかしたらユニークスキルが知らない内に発現しれないぞ！俺もそうだったしな」

「はあ？アホかよ。んな訳：：：つて何このスキル：」

「冗談のつもりだったんだけどあつたの？」

「出現条件が書いてない。名前は：「大鎌スキル」だ。しかも専用武器の入手方法まで書いてある：」

「入手方法は？」

「ああ素材を集めてマスタースミスが武器を作ると100%成功するらしい。」

「んじやお前も必要だな。アスナにメッセージ飛ばしといてくれ」

「分かった」

アスナに知り合いのマスタースミスを聞くとリズベットと言う名の鍛冶屋が知り合いらしい。場所は町の中心の一角。自分で鍛冶屋を経営してるらしい。

「キリト。場所分かったから行くぞ。早くしないと夜遅くなってお前の楽しみが減るからな」

「その事は言うなよ！」

そんな居心地の良い会話をしながら俺らは鍛冶屋へと向かった。

リズベット武具店ねえ・そのままなのね：

「んじゃ入るか」

カランコローン

「いらっしやいませ！リズベット武具店へようこそ！……お客様お金持ってます？」

客の見た目で金持ってるか判断すんのかよ！

「持ってるぞ。キリトも持ってるよな？」

「ああ・んで早速だがリズベット。この剣と同じレベルの剣を作って欲しい」

そう言つてキリトはエリユシデータを差し出した。

「何これ！魔剣クラスじゃない！同じレベルの剣ならさつき私が作った最上級の剣があるけど……」

そう言つてリズベットは剣をキリトに渡した。

「んじゃ早速」

あれ？キリト君？売り物に何してるのかな？

エリユシデータの硬さじゃその剣が・

ほら！リズベツトも慌てる

「そんなことしたら貴方の剣が壊れちゃうわよ！」

・・・何言ってるのかな？

ピンクの髪の子ってアホな子多くない？ガハマさんとかガハマさんとかガハマさんとかガハマさんとかガハマさん

ガキイイイン

予想通り売り物が壊れました。

「ああああ何すんのよ！」

「俺の剣がバツキバツキに折れちゃう剣を頼んだぞ」

「腹立つ！それじゃあクリスタルドラゴンから生成される鉱石を取りに行くわよ！貴方達の名前は？」

「俺はキリトだ。んでそこにいるのはハチマン」

「うっす」

「あれ？いつからいた？」

存在さえ認識されないの？俺はゲームのシステムを超越した存在なの？

「最初からだよ。んでそのクリスタルドラゴンの所には俺も用があるからな。同伴させてもらおう」

「あれハチマン？お前の残りの素材ってそれなのか？」

「おう、偶然にな」

「何話てんのか分かんないけどよろしくね！私はリズベツト。リズって呼んで！」

女子をあだな呼びとかハードル高杉君じゃないかい？

「お、おうよろしくなりズ」

「よろしくな！リズ！」

キリト……いつからお前は葉山になったんだ。

爽やかスマイルを俺がしたら通報まである。

「ハチマンは何キョドってるのよ！早く行くわよ！」

「うっせえ……ぼつちにあだな呼びはキツいんだよ」

こうして俺、キリト、ハチマンはクリスタルドラゴンの居る極寒地帯へと向かうことになった。

第17話 恋する乙女

極寒地帯に来てみたのは良いものの：

寒すぎね？

VRどこまで進化しちやってるの？

良く見たらリズが一番寒がってるな：

俺も紳士だ。上着を貸してやろう。

でも中学の時同じことしたら

「ヒキガエルマジキモい！」って言われてトラウマなんだよなあ。まあリズは言わなそうだし意を決するか。

「リズ上着やるよ。俺は寒くないからな」

そう言つて渡すとリズは黙ってしまった。

あれ？もしかして嫌だった？俺本当に泣いちゃうよ？

「ハチマンつて以外と気が利くのね」

「は？俺が気が利くのは当たり前だ。気が利きすぎて周りから存在を関知されないように過ぎしてたからな」

「何それ！ どんだけ人間不信なのよ」

「おーい！ イチャイチャしてないで早く来いよ。目的地に着いたぞ」

「イチャイチャしてねえよ（ないわよ!!）」

リズさん顔真つ赤だよ。きつと霜焼けだよね？ そうだよね？

「彼処に眠ってるのがクリスタルドラゴンだ。聞いた情報だと俺とハチマンの二人で掛ければ余裕みたいだ」

「分かった。つてことでリズ。お前は出ていいと言うまでその岩影に隠れてろ」

「分かった」

「んじゃ俺が一発切り裂いてくるわ。キリトはその後に続いてく」

そう言い残してはまずドラゴンの尻尾を切り裂くと

ドラゴンが暴れだした。だが俺とキリトにかかれば

ただの中堅MOBだ。後少しで倒せる・と言う所で

「何よ！ 余裕じゃない！」

（クツツ・出てくんなって言っただろうが・）

当然ドラゴンのターゲットはリズへと向いて氷のブレスを吐き出した。

（間に合えよ!!）

俺は何とかリズを助ける事に成功したがそのまま吹き飛ばされてリズを抱き抱える

ようにして穴へと落ちてった

目が覚めるとそこには泣いてるリズが居た。

「あれ?…死んでねえのか?」

「ハチマン!! やつと起きた!!」

急に抱きついてきたので1回匂いを胸一杯に嗅いでから(変態じゃないよ!!ただ疲れ
てるからリフレッシュするだけなんだからね!!)慌てて離れた。

「とりあえず回復するか?」

「回復結晶あげるよ」

「ありがとな。もう泣くなリズ。所でここはどこだ?」

「分からない?」

「キリトはどこだ?」

「あの時離れちゃったみたいで?」

「んじゃメッセージ取ってみるわ?ってキリトから100件以上来てるし:とりあえず

返しとくか」

「ほんとに仲良いんだね！」

「まあ俺が数少ない信用できる人間だしな」

「あんたただだけ疑心暗鬼なのよ：私は信用できない側なの？」

「嫌、ピンクの髪のは奴は天然でアホだけど信用できるって決まってるからな。お前の事は信用できるぞ」

「何よそれ!!でも信用されてるんだ：ボソツ：良かった：ボソツ」

おい。ボソボソ言ってるけど難聴系主人公の髪の色で不良に見られちゃう男の子とか数台の専用器で国一つ滅ぼせちゃう兵器にに世界でただ一人乗れちゃう男の子とかじゃ無いんだから聞こえちゃうんだぞ。

勘違いしちゃうからやめてね！

「もう遅いし寝るぞ。ここが何処なのかは明日からだ」

「私寝巻何て持ってきてないよ？日帰りだと思ってたから：」

「んじゃ俺の使え。俺は地面で寝るわ」

「それじゃあんたに悪いでしょ。そうだ！一緒に同じ寝巻で寝よう！」

ナニイツテルノ？ハチマンワカラナイヨ？

頭がパンクしてる内に急に体に温もりを感じた。
もう入られちゃった？ハチマン君詰みました。

「ちよつと狭いね・」

狭いどころじゃないいいいい！

ふええ・2つの柔らかいのが当たってるよお：
っていうかこの子ももう寝ちやったの？

寝息当たってるよ？こんなの眠れないよ？

ほんとのほんとにゲームオーバーアアアアアア!!!

(結局寝れなかった・)

「あ、おはよ！ハチマン！」

「お、お、おはようございます！」

何で敬語になっちゃったんだよ：

ここで俺はあることに気がついた。

それは地面の事だ。昨日は暗くて分からなかったが良く見ると何かの鉱石だ。その瞬間俺は全てを理解することが出来た。

(なるほどね)

「おいリズ。この下の鉱石を取れるだけ取ってくれ。これが俺たちの欲しかった奴だ」

「え？そうなの？っていうか何で分かるのよ」

「この穴何かがおかしいと思ってたんだよ。んで何の為にあるのかって考えたらあのドラゴンの巣以外考えられない」

「それじゃあ…この鉱石は…う〇こってこと!?!」

「まあそうだな…多分もうそろそろドラゴンが帰ってくる。その時に捕まってるぞ。っていうてるそばから来たな」

「わあ！突っ込んでくる!!」

「リズ。捕まってるよ！」

俺はリズの手を引いて剣をドラゴンに突き刺して何とか食らいついた。

気が付くとその目の前には広大な空が広がっていた。

「出れたあ!!」

「リズ!ドラゴンから離れるぞ!」

「でもあんた剣は!？」

「もうどうせ使わなくなるからいい!早く離れるぞ!」

「うん!」

俺らはドラゴンから離れて上空1000メートル当たりから垂直落下していた。

「ハチマン!私ね!」

「ん?」

「あんたの事好き!!」

・・・うん。俺は何も聞こえなかった。

風で聞こえなかったんだ。

「風で聞こえないぞ!!」

「何でもない!」

その後俺らは無事に助かって駆けつけてきたキリトと一緒に宿へと戻っていった。

第18話 焰月

極寒地帯地帯から帰ってきた後俺らはリズの店へと向かっていた。

「そう言えばハチマンさつき剣は使わなくなるって言つてたけどどういふことなの？」

「あー：ちよつと待つてくれ：」

ユニークスキルの事を周りに知られると妬まれて何か事件に巻き込まれるかも知れないからな：

まあ俺は元々嫌われてますけど。

「キリト：リズにユニークスキルの事話していいか？」

「あー：まあ作つてもらうんだし他言禁止でいいんじやねえか？」

「まあそうか。俺は作つてもらう時に知られるしな」

「リズ。実は俺らはユニークスキルが発現したんだ」

「：：：え!? エエエ!? ユニークスキルつてあの?」

「そうだ。キリトは両手剣で俺は大鎌スキルらしい」

「なるほどね：それじゃあ腕によりをかけて作らないとね!」

そんな話をしてしていると店に着いた為リズはキリトの剣から作り始めた。

「キリト！出来たわよ！名前は：『ダークリパルサー』ね」

「すごい：剣のステータスもエリユシデータと同じぐらいだ」

「そりや良かったわ！次はハチマンね！レシピってある？」

「それならあるぞ。しかもマスターミスが作れば100%成功するみたいだからな」

「そうなんだ！それなら安心ね！」

そう言つてリズはレシピを見ながら素材を次々に調合していく。5分程立つとリズが嬉しそうにこつちに駆け寄つてきた。

「ハチマン！出来たわよ！名前は『焰月』ね」

その大鎌はその名前に相応しいほど紅く禍禍しかった。

「リズ。あの鉱石はまだ残つてるか？」

「え、うんあるけど：」

「それじゃあ残りの全部使つて盾を作つてくれ」

「どうして？」

「盾でパライイしてからこれで刈り取るつて言う戦闘スタイルにしたいからな」

「分かった！でも失敗する確立は高いよ？何せレシピが無いから：」

「その時はまた素材を集めに行くから大丈夫だ」

「分かったわ！じゃあ作つてくるわね！」

そう言って10分程たった。やはり苦戦してるのだろうか？そんな事を思っていると甲高い声が聞こえてきた。

「ハチマーン！完璧よ!!盾の名前は「ロスチャイルド」！」

その盾は先程の大鎌と動揺紅く染まっていた。

何であの煌めいてる鉱石からこんな禍々しいの出来ちやうのかね？

「キリト。ステータスはどうか？」

「さつきから空気になっていたがやつと出番が来たか：つて何だこの盾：俺のダークリ
パルサーでも余裕で耐えられるぞ」

メタいのは控えようね。まあキリトのお墨付きなのだから大丈夫だろう。

「所でハチマン？お前その大鎌で普段から戦うのか？」

「あ：完全に忘れてたわ：リズ悪いが剣を1つ買っていいか？」

「いいわよ！代金も要らないし！」

「嫌：それは悪いから！」

「私が要らないって言ってるんだからいいの!!」

「はい！」

おいそこ。キリト笑うなよ。

「まあそれにしても本当にリズはすげえな：ありがとよ」

「どう致しまして!!」

そう言って俺が大鎌を閉まっている時に不意打ちでリズが抱きついて来たため受け身を取ろうとした結果俺がリズを押し倒した様な形になってしまった。

っていうか何でハラスメント警告鳴らないの？

その時に店のドアが開いた。入ってきた人物は：

俺達に此処を教えにくれた副団長様（笑）だった。

「あんたリズに何してんのよ!!」

高速で放たれた閃光のようなりニアーが俺の腹に突き刺さり俺は意識を失ってしまった。

第19話 リズの告白

目を覚ますとそこには必死に謝っているアスナがいた。

「あ！ハチマン君起きた!!本当ごめんね！さっきは勘違いしちゃって…」

「別にいいけどよ…突然突いてくるとか暴君かよ…」

「もう1回やられたいの?」

「すみませんでしたああ!!」

綺麗に土下座を決めた俺にリズが話しかけてくる。

「えつと…アスナとハチマンは知り合いなの?」

「まあな。リズの事もこいつから聞いたしな」

「そう…なんだ…その…ハチマン?ちよつと来てくれない?」

「あ…ああ分かった…」

そう言つて俺はリズに連れられて近くの川に行つた。

「そのハチマン…私あんたが好き…」

「そうか…だけどその気持ちは受け取れない…」

俺は昔の様に勘違いだの何だの言つて逃げる事は止めた…

「ただ俺は…」

「アスナがいるから?」

「アスナは全く関係ない。アスナもお前も同じ様に俺の信用できる友達だ。だけど俺には・誰かを愛して守ってやる権利なんて無いんだ・」

「そう一度切ってからハチマンは続けた。」

「俺はこのSAO内で大切な人を守れなかった。多分そいつに俺は恋愛感情を抱いて居たのだと思う。その大切な人を・自分の判断ミスで見殺しにしてしまった。」

「そう。俺はエレンを見殺しにした。」

「本物が欲しくても・」

「俺はそれを手に入れる権利なんて無い。」

「それをリズの告白で実感させられてしまった。」

「そう・なのね・」

「ああ・正直告白なんて物は人生で一度もされたことが無かったから嬉しい。だけど気持ちを受けとる事は出来ない・これから俺の・大切な友達として居てくれないか?」

「……そこまで言われたら分かったわよ!でもせめて貴方の専属ミスをやらせなさい?」

「嫌それは…」

「断つたらアスナに今の間如何わしいことされたって言うてもう一度リニア放つてもらうわよ?」

「分かりましたよ…それじゃあお願いします」

「それでいいのよ!」

「じゃあ早く戻るぞ。そろそろ心配してるだろうしな」

「うん!」

そう言うってリズの武具店に戻った後俺とキリトはユニークスキルを練習する為に大きい庭のあるキリトの家へと向かっていた。

「なあハチマン…やっぱりさつき連れられたのって…告白されたんだろ?」

「ああ…まあな…でも俺に誰かを愛したりしてやれる権利なんて無いからな…断つたよ」

「それは…あの事件の事いつてるのか?」

「そうだ…俺は本物を見付けたい。だけどそれを手に入れる権利は無い。それを今日実感させられたよ」

「そうか…」

(アスナ当たりがハチマンの苦しみを解放してやれると良いんだがな…)

そう考えながらもキリトもこれ以上の詮索は控えようとした為会話を打ち切った。

そこからは他愛ない会話しか無く二人とも足早にキリトの家へと向かっていった。

第20話 大切な人達

「アスナ：ハチマンの事はどう思ってるの？」

ハチマンに告白した後アスナに話しかけた始めの第一声はこの言葉だった。

「え：？何で急に？」

「さつき私：ハチマンに告白したのよ。」

「そうなの!？」

「うん：でもね？断られちゃった：自分には人を愛したり守る権利が無いんだって言うて：」

恐らくその事はハチマン君が自分の大切な人を守ることが出来なかった事からの言葉だろう。

「アスナ：ハチマンの事好きとまではいかななくても気になってるでしょ？」

「え：？」

アスナは自分の心を確かめるように手を胸に置いて

ハチマンの事を考え始めた。

もしハチマン君が他の子と付き合い始めたらどうだろう？

「ハアアア!!」

キリトの家に着いた二人は庭でそれぞれスキルを磨いていた。

「スターバースト……ストリーム……」

そう言い放つて構えを取ったキリトは後の16連撃の奥義友達言える技を放った。

「オリヤアアア……」

7連撃目で急に力尽きたのを見て俺は急いで駆け寄りキリトを受け止めた。

「大丈夫か？」

「ありがとう……情けない所を見せてしまいすまなかったな」

「お前は頑張りすぎなんだよ。サチさんに迷惑かけないようにしっかりと休養取れよ。夜の営みも程々にな。それにしてもさっきの技すげえな」

「夜は余計だよ……さっきの【スターバーストストリーム】は本来16連撃の技で最終奥義の一手手前だな。でもまだ7連撃しか出せてないしな」

「そうか……なあキリト。もう少し休憩したらデュエルしないか？」

「お、それあるな！大鎌VS二刀流か！」

お前は折本か……と思いながら天を見上げた。

小町や雪ノ下や由比ヶ浜。一色に川何とかさんに両親。

俺の大切な人達は元気にしてるだろうか？

俺は大切な人達：すなわち”本物”を守る力が欲しい。

その為にはこのSAOと言う世界で何としても生き残らなければならない。

そしてこのSAOでも

リズやシリカやキリトやサチさん。それにアスナ。

この仲間達を誰一人失いたくない。

もう二度と失いたくない。

そんな思考を張り巡らせていると自分の目から涙が流れている事に気付いた。

「ハチマン！どうかしたか!？」

「何でもねえ：ちよつと思ひ出しちまってな。それよりもうそろそろデュエルやるぞ
！」

「おう！」

こうしてSAOユニークスキル保持者のデュエルが一つの家の庭で行われる事になった。

第21話 現実世界

「比企谷君……」

「ヒツキー……」

「先輩……」

「お兄ちゃん……」

四人はS A Oに囚われてから1年以上目覚めない八幡の病室に来ていた。

（比企谷君が居なくなると寂しいものね……もし帰ってきたら罵倒するのは少し控えようかしら……それにしても……いつ貴方は戻ってくるの？）

雪ノ下が思考を張り巡らせているとドアがノックされる音がした。

「どうぞ」

「君達は誰だい？」

「私たちは比企谷君と同じ学校のクラスメートです。この子は妹ですが……貴方こそ誰ですか？」

「そうか！ハチマン君もこんな美女達に囲まれて羨ましいよ。僕は通称 仮想課って呼ばれてる所に勤めてる菊岡です。要するにS A O対策本部だと思ってくれればいい

よ」

「えっと・菊岡さん。先輩はいつ戻れるんですか？」

「僕達はS A O対策本部何て立派な名前持つちゃってるけど実は何にも出来ないんだ・面目ない・でもS A Oの少しの現状なら分かるよ。今浮遊城 アインクラッドは半分以上攻略されてる」

「そうですか・じゃああと一年ですね・」

「菊岡さん。聞きたいのですが全部のS A Oプレイヤーを回ってる訳じゃないですよね？ 仮想課もそこまで人は多くないでしょうし・」

「えっと・」

「雪ノ下です。」

「じゃあついでに自己紹介しますね！ 由比ヶ浜です！」

「一色です！」

「お兄ちゃんの妹の小町です」

「ありがとね。えっと話を戻すと雪ノ下君は実に良いところに目をつけてる。実は僕達はレベルの高い、すなわちS A Oをクリア出来る可能性がある人を回ってるんだ」

「その一人が比企谷君なんですか？」

「彼の实力は恐らくS A O内でトップ4だ」

「えええ!? ヒツキーってそんな凄かったの!？」

「お兄ちゃん何覚醒しちゃってるの：」

「八幡君は何処のギルドにも入っていないソロプレイヤーだけど普段から同年代の男の子と行動してるね。後たまに同年代の女の子とも」

「ヤバい：ヤバいよ雪のん：ヒツキーが取られちゃう：」

「だ、大丈夫よ：あの人は姉さんから理性の化け物って呼ばれてるのよ? そんなことあるわけないでしょ?」

そう言いながらも雪ノ下は嘸みまくりだし手も震えてる。

(全くゴミいちゃんは：こんなに女の子を待たせて：帰ってきたらお仕置きだね)

「えっと：皆さん：? お兄ちゃんの事好きなんですよね?」

そう言うのと皆が顔を赤くして俯き始めた。

始めに口を開いたのは由比ヶ浜だ。

「私は：好きだよ。ヒツキーの事大好き」

「私も：先輩の事が好きです：だれにも取られたくありません：」

「私も女垂らし企谷君と3日以上会えなかったら死んでしまうぐらいには彼に好意を抱いてるわ」

「それじゃあ：私たちもVRMMOやってみませんか？」

「「え？？」」

「私：お兄ちゃんの見てる世界を体験してみたいんですよ：それにお兄ちゃんの見てる世界が分かればもしかしたらお兄ちゃんと少しでも仲良く出来るかもしれませんか？」

「それは名案だね：それじゃあ最近流行りのALOやろうか！」

「私は持つてるよ！実は1ヶ月前からALOはやつてるんだ〜！」

「結衣先輩抜け駆け禁止ですよ！私はこの後買いに行きます！アミユスファイアですよね？」

「それじゃあいろはさんに私も着いていきますね！」

「私は今AMONで頼んだわ」

（皆食い付きすぎでしょ：いつからお兄ちゃんにモテ期が来たのさ：）

こうして3人はVRMMOの世界に入り浸る事になる。

余談だがこの直後にキリトとデュエルをしようとしていたハチマンに妙な悪寒が襲ったとか何とか：

第22話 同志？

「それじゃあキリト：行くぞ：」

「分かった。それじゃあデュエル申し込むわ」

現実世界で雪ノ下達が暴れている時ハチマン達は

自分達のユニークスキルを駆使してデュエルを行おうとしていた。

「半減決着でいいよな？」

「おう。それじゃあ押すぞ」

〔3, 2, 1, Start!!〕

開始されたと共にキリトが襲いかかってきた。

初動が早かった為俺は反応が遅くなり何とか盾で防いだ物の体勢を崩してしまった。

そこにキリトが剣を切り込んできたが即座に反応し

大鎌スキルの基本技〔魂採^{こさい}〕でキリトの足に大鎌を振りかざした。当然ジャンプして避けられたが其処が狙いだ。二段構えで大鎌スキル〔墮蓮^{だれん}〕で体勢を建て直し切り込んだ。流石に受けきれなかったのか剣で攻撃を防ぐも後ろにふっ飛ばされていった。

「何でお前はこの少しの練習で使いこなせんだよ…」

「何か分かんねえけど剣よりは断然使いやすいわ」

「そうかい：それじゃあ俺も体力少ないからあれをやらせてもらうぜ」
「そう言うときリトは先程見たモーションを取った。」

「スターバースト：ストリーム：」

(16連撃だっけか？まあ問題ないか)

ハチマンはキリトの攻撃を盾で受け止めようとしたが

8連撃目から形勢が逆転した。

キリトの斬り込む素早さや力が格段に上がったのだ。

油断していた俺は隙が生まれてしまい庭に倒れこんでしまった。

俺の勝ちだな」

(あれを使えばここから形勢逆転出来るか…まあやってみるか…)

「一の舞」
【刻炎乱舞】
こくえんらんぶ

「な!?!」

キリトは狼狽えるように後ろに下がっていった。
なぜならハチマンの焰月が炎を纏っているのだから。

そこに追い打ちをかけるように美しいとも言える舞でキリトを圧倒してついにキリトの体力は半分になってしまった。

「負けちまったか…それにしてもさっきの技はなんだよ？心なしか熱く感じたぞ？」

「そりやそうだ。この技は大雑把に言うところと幻術だ。実際に燃えていないんだけどな…」
プログラムの何かで幻を見せているのか？

しかも熱いという感覚まであった。

茅場は本当に恐ろしい科学者だ…

「お前もスターバーストストリーム。だっけか？凄かったぞ。危なかった。ほんとに」

「16連撃放てないと意味ねえけどな…」

「デュエル終わったー？ご飯出来たから食べるよ！ハチマン君も！」

「じゃあお言葉に甘えて頂きます」

「敬語使わなくていいよ！」

「えっと…それじゃあ頂く」

サチさんの料理を食べてみたが旨い。旨すぎる。

何がどうなったらこんな上手いんだよ…

「もしかして料理スキルカンストしてるのか?」

「さすがハチマン君! キリト君が気付かないところに気付いてくれるね!」

「サチノ: それは無いだろ:」

「サチノ?」

「ああ: いつもの癖でな: まあハチマンならいいか: こいつの名前はサチノって言うんだよ:」

何か聞いたことあるような…

「へえ: ごちそうさまでした」

「お粗末様です。コーヒーいる?」

「それじゃあマツ缶で: あーえつと『マツ缶知ってるの!』え: ?」

何でサチは急に目を輝かせてるんだ? まさか: まさかなのか?

「そりゃあ千葉県民だからな。千葉の水だ」

「私ももの!! 私の周りにマツ缶の魅力に気付かない人多くてさ: 同志が居て良かった!!」

そう言つてサチさんは無意識に俺の手を持ってきた。待つて!! キリトに殺されちゃ

う!!!

「ハチマン……覚悟おおお」

「待ってくれ!!!」か……」

そう言っている時に思いつきり体術で飛ばされた俺は壁に激突した。

(またかよ……)

こうしてハチマンは昨日に引き続き

意識を失うことになった。

第23話 ハチマンのSAOでの生活は波乱万丈である。

「マン：ハチマーン？大丈夫か？」

ふとそんな声が聞こえてきた為情報を整理してみる。

← サチが無意識に俺に抱きついた事で胸が押し付けられる

← それに嫉妬したキリトに全力の貫手をされる

← 意識を失う

← 今

キリト怖すぎだろ：

「大丈夫だけど加減してくれよ：」

「悪かったよ：ついな」

「どんだけサチLOVE何だよ：んじやもう夜になりそうだし帰るわ」

「分かった。また手合わせしてくれよな！」

「分かったけどそんなしよっちゆうは行かねえよ」

「今度来た時はマツ缶そつくりなコーヒー作っとくね!!」

「マジで？毎日行くわ」

「もう一回やるぞ？」

「冗談だよ。じゃあな」

そう言つて俺は宿に行くために最短ルートで森を抜けていった。

しかしそこで事件は起こる。

「キヤアアアアア」

森の中で女性の叫び声がしたのだ。

声の声量的にここから1分もかからないはずだ。

そう思い一目散にそこへ向かうとそこには驚くべき光景が目の前で起きていた。

見たことのあるフードを被り手にギルドの象徴の絵を彫っている3人の男が一人の女性を襲っていた。

間違いない。あいつらはラフィンコフィンだ。

その瞬間リーダーのPohが剣を振りかざした。

それを庇うように俺は奴等の前へと表れて大鎌ではなく剣で受け止めた。

「ハチマンツ……!!!」

「久しぶりだな。Poh。またこんな事やってんのかよ」

「リーダーこんな雑魚そうなやつ俺に殺らせてください!!」

「待て!!ダヌス!」

リーダーの言うことも聞かずに一直線に向かってきた男はダヌスと言うらしい。この前会ったときに居なかったメンバーだ。

「しねええええ!!!」

「遅い」

俺は剣を使うことなく貫手でダヌスの鳩尾に一発食らわした。体力が全損する事は無かったがあと少しで死ぬという所まで来ている。

「リーダーああ・回復結晶を・」

「俺の言う事も聞かずに突っ走って言った奴に高価な回復結晶を使わせる訳にはいかないな。新入りだって言うから期待したのに……」

そう言ってから一息着いてPohは言い放った。

「残念だ。さらばダヌス」

目の前にはにわかにも信じがたい事が起きていた。

Pohが持っている剣でダヌスを突き刺して

殺したのだ。しかも突き刺した剣は返り血を帯びて少し光りその様は嗤っている様に見えた。

「ゴミ掃除の手伝いをありがとな。不思議そうな顔をしてるがこの剣の名前は「友切包丁」でな。人間の返り血を帯びて行く事でどんどん強くなっていく。」

「ご説明どうも。んで戦うのか？」

「残念だが今の俺では恐らく勝てない。また出直していつか必ず殺しに行つてやる」

「懸命な判断だ。それと俺は殺されねえよ」

そう吐き捨てるとPoh達は夜の森林の中へと消えていった。

「おい。大丈夫か？」

「大丈夫です。私の名前はサウサー。貴方は…つてえ?!?!」

何でこんな驚いてるんだ？待てよ…こいつ見たことあるぞ…

「間違ってたらごめんなさい。もしかして比企谷?」

「お前は…相模か?」

俺はこのSAOでリアルの知り合いと出会ってしまった。

しかも俺が総武校内で悪口を言われる様になった原因の一つがこいつだ。

「やっぱり…ハチマンって名前を聞いたときからまさかとは思ってたけど…久しぶり」
「おう…」

何でこんな所いるんだよ…

っていうか

最近になって思い始めたんだけど…

俺のSAOでの生活…波乱多くね?

第24話 仲直り

相模 side

「結局お前は誰かに認められなかったただけなんだ」

あの日屋上で比企谷に言われた言葉が脳裏に蘇る。

比企谷の言っていた通り私は誰かに認められただけだった。だから文化祭実行委員の委員長にもなった。

私がトップ層のカーズトに居続けるために。

だけど結果は最悪だった。

雪ノ下さんと比企谷の協力があつたから成功できたけど

もし二人が居なかったら文化祭は滅茶苦茶になつていただろう。

「お前は誰かに慰めて貰おうと思つてここに来たんだろ？ だけど結果はどうだ？ 最底辺の俺がお前を一番始めにお前を見つけたんだ。この意味が分かるか？ 皆誰もお前なんかを本気で探してないんだよ」

狡猾な笑みを浮かべながら私に言い放つた比企谷は憎く見えた。だから私は翌日学

校中に比企谷の悪口を広めた。予想どおり比企谷の評判は悪くなり当時はざまあみろと思つた。

しかしその2週間後私は気付くことになる。

「ねえ：今思つたんだけどさ：」

「なにになに？」

「比企谷の事」

「あははwほんとざまあみろだよねw」

「それなw」

「良いから聞いてよ！」

普段こんな声を出さない遥に驚き私たちは

素直に話を聞くことにした。

「その私達つて文実真面目にやってなかつたじゃない？そのせいで何度も危なかつたし
：」

「あー比企谷が助けてくれたこと？それだけは感謝してるよw」

「南少し静かにして？話戻すけど運良く文化祭は成功したけどその後私達はどうなつて

たと思う？」

「遙ごめん……うーんどうだろうか？」

「えっと……あ……」

突然ゆつこの顔が青ざめた。

「ゆつこは分かかったみたいだね。私達が真面目にやってなくて文化祭を危うく滅茶苦茶にする所だったのは文実の誰かから時間の問題で漏れてたと思うの。そして私達は立場が無くなる。でも現状私達の噂は全く立ってない。何でだと思う？」

そこまで言われて私は気づいてしまった。

「もしかして……比企谷が全部庇ってくれたってこと？」

「そう。比企谷の悪口のお陰で私達は助かってるのよ。要するに比企谷はあの時助けてくれたってこと」

そう言われた時私は体から血の気が引くのを感じた。

同時に吐き気もしてきた。

その後結局私は具合が悪くなり家に帰ってしまった。

私は最低だ。比企谷が自分に凶星を突き付けてきて腹が立ったからって悪口を広めてその上自分達が本来なるはずだった立場を押し付けてしまった。

比企谷に謝りたい。許してもらえとは思ってない。そう考えても結局謝ることは無く12/24日になってしまった。

12/24。町はすっかりクリスマス一色に染まっていて賑やかな雰囲気だ。

そんな中私は憂鬱になっている。結局謝れなかった。

そんなことを考えていると兄からメールが届いた。

【今日は彼女の家に泊まるわ！ナーブギア届いてると思うから開けといて。先やってても良いよ！名前もお前の好きな奴でいいから！】

【分かった】

そう返して私はナーブギアを包みから取り出した。

確かフルダイブ型の次世代ゲーム機だ。

ソフトにはソードアート・オンラインというゲームが入っている。確か今日から始まりだ。

【ゲームでもやってたら少しは頭空っぽに出来るかな？】

そう思いナーブギアを始めて私はゲームを始めた。

「リンクスタート!!」

そう元気良く言って私はソードアート・オンラインの世界に入っていった。
史上最悪のデスゲームが始まるとも知らずに。

相模 side out

ハチマン side

「文実の時以来か？ 久しぶりだな」

「そうだね：えつとひき：じゃなくてハチマンだっけ？」

そう一息置いてからサウサーは言った。

「文実の時は本当にごめんなさい。私達が迷惑掛けたのに貴方に全て罪を被せてしまっ
た」

「その時の事ならもういいぞ。気にしてねえし」

「でも許してもらえとは思ってないけど謝らせて：本当にごめんなさい」

「許すから止めてくれ。っていうか俺が罪を被ったのは俺の狙い通りだ」

「それでも辛かったはずでしょ？ っていうかこんな私を許してくれるの？」

「ああ：もう良いよ。お前が謝ってくれて嬉しいしな。だから早くいつもの調子に戻
れ」

「：ありがとう！ それじゃあお礼私が寝る所に連れてって上げる！」

「嫌：悪いしいいぞ：わざわざ気なんか使わなくても」

「女の子が誘ってるんだから来なさいよ！」

えっと・誘ってるって言うのは・まさか・

「エロいこと考えてんじゃないわよ！」

そう言つてビンタされた俺は半ば無理やりサウサーに連れられていった。

第25話　ハチマン、血盟騎士団に入るつてよ。

俺は今血盟騎士団の本部の前でサウサーに土下座している。何でこんな事になってしまったのか説明しよう。

俺がサウサーにつれられたところは何故か血盟騎士団の本部だった。そして本部に入ろうとした時に俺がこけてしまったのだ。

その時のサウサーの恰好は血盟騎士団の白い服とは裏腹に赤がベースの服を着ていて下はミニスカだった。

そのせいで俺はリトさんも驚きのスカートの中に顔を埋めつつ両手で胸を揉んでしまった。当然ハラズメント警告がなったのだがサウサーの良心により解除されて現在に至っている。

「本当にごめんなさい。こんな蛆虫がサウサー様の高貴な胸を揉み股に顔を埋めてしまつて大変申し訳ございませんでした…」

「改めて言うな！それに謝ってくれたしいいって。さっき私の事ハチマンは許してくれただでしょ？だから気にしないよ！それにハチマンにそういう事されてもいいし…」

「何か言つたか？」

今のは難聴系じゃない俺でも聞こえなかったぞ？

「何でもない！この馬鹿！鈍感！八幡！」

「俺の名前を悪口に使うな。まあ許してくれるならこれで終わりにするが償いとして俺のできる範囲で何でも一つ言うことを聞く」

「分かった！何でも一つね！それじゃあ中に入るよ！」

（何か悪い予感がするな…）

そう思いながら俺らは中へと入っていった。

それにしてもサウサーは血盟騎士団と何の関わりがあるんだ？

「はい！よ」

『団長室』

「はっ」

思わず変な声出ちまったよ。何で俺がアインクラッド最強と言われている血盟騎士団の団長と会わなきゃいけないの？罰ゲーム？

「失礼します。」

「サウサー!!心配したよ!連絡も付かないし!」

そう言つてサウサーに抱きついたのは血盟騎士団の副団長【閃光】の二つ名を持つアスナだった。

「ごめんねアスナ!面倒ごとに巻き込まれちゃった!この男が助けてくれたのよ!」
「ハチマンぎゅん?!?!」

そういつてアスナは顔を赤くして俯いてしまった。

やめろおとおお!!勘違いすんだろうううう!!

「久しぶりだな…アスナ」

「あれ?二人つて知り合い?なあんだ。ハチマンの昔からの知り合いは私しかないと思つてたのに」

「うん。その言い方だとサウサーもSAOの始まつた一年前からの知り合い?」

「あ…実はね…」

八幡side out

アスナside

驚いた。私の血盟騎士団内での友達のアスナが私の恋の相手のハチマン君を連れてくるだなんて。

しかも話を聞いたらハチマン君とはリアルの知り合いで高校が一緒らしい。そして

一番驚いたのがサウサーの告白だ。

高校の時にハチマン君の悪い噂を流していじめてたという事。正直怒ったけど誠心誠意謝ったらしく当のハチマン君も気にしていないようなので部外者の私が咎めるのもおかしいと思っただので何も言わず受け入れることにした。

「そういうえば団長、副団長。報告です」

サウサーが私の事を副団長と呼ぶときは真面目な話をする時だ。

「先ほど、この層での森林地帯でラフィンコフィンに遭遇。いたメンバーはリーダーの Poh と赤眼のザザと新入りのダヌスというものです。ただしダヌスはハチマンが交戦して勝利してその後リーダーが見捨てて殺しました。その後はハチマンがあいつらを威圧して撃退しました。」

「報告ご苦労。それにしてもハチマン君だったのかな？あのラフィンコフィンを退かせるとは中々の実力だね。血盟騎士団に入らないかい？」

ハチマン君が血盟騎士団に入ってくれたら私がたくさんアプローチ出来る!!

でもハチマン君なら…

「お誘い嬉しいですけど俺は入りませんよ」

「それじゃあハチマン！さつき何でも一つでも言うこと聞くとって言ったよね？それじゃあ血盟騎士団に入らって！」

「そこでそれ持ち出すのかよ…まあ約束しちまったしな…分かった。入ってやるよ
「上から目線すぎでしょ…」

「それじゃあハチマン君には諜報部に行ってもらおうか。実力もあるしね。」

「私の居るところだから明日案内してあげるね! 『ピコン♪』何だろう…あ! 今日諜報部
で会議あるんだった! ごめんアスナ! ハチマンに宿紹介してあげて!」

もしかしてサウサーって…

そう思っているとサウサーがすれ違い様に耳元に囁いてきた。

「私、負けないから。」

(っ!!)

私も…絶対に負けないよ!

「それじゃあハチマン君! 近くの宿紹介するから行こ!! 団長失礼しました!」

そんな気持ちを抱きながら私はハチマン君を半ば無理やり部屋から連れて行った。

第26話 アスナの家にお泊まりをする事になった。

(前編)

アスナ side

アスナ「それじゃあ行こうか！」

ハチマン「おう：んで質問なんだが諜報部って何するんだ？」

アスナ「他の巨大ギルドの動きとか町の動きを調べに行くの。実力が物を言う部署かな」

ハチマン「マジかよ：絶対嫌なんだけど」

まあハチマン君ならそう言うよね：

アスナ「でも諜報部で1番の成績を取ると副団長補佐になれるんだよ？そしたら私が沢山ハチマン君を可愛がってあげるから！」

ハチマン「お前の下に着くとか絶対嫌だわ。まあ諜報部よりはましだろうけどな」

そんな事言ったら傷ついちゃうよ！

これでも私も乙女なんだから！

ハチマン「そう言えばサウサーは諜報部何だよな？どれくらいの実力何だ？」

好きな人と話してるときに他の女の話されるとムカつくって言うけど本当何だね：

アスナ「：サウサーは諜報部No. 2よ。それが何か？」

ハチマン「何か怒ってないか？」

アスナ「別に！」

本当に鈍感なんだから：

まあ私が積極的に行かないのもあるけど：

だから今日は：

アスナ「その：ハチマン君？今から行っても宿は開いてないと思うの？だからその：私の家に泊まらない？」

ハチマン「は？」

私は顔が真っ赤になるのを自覚しながらハチマン君に言ってみたらこの反応：乙女心が分かってないなあ：

まあいきなり泊まりの誘いなんて流石にこうなるよね：

ハチマン「えつと：宿は開いてると思うぞ？それにアスナの家に一緒に泊まるなんて

俺にはハードルが高杉晋作だ」

ハチマン君って時々何言ってるか分かんないよね：

アスナ「あああもう!!これは副団長命令です!私の家に泊まりなさい!」

ハチマン「おいそれはずるいだろ!!待って!ランベントライトを出すな!!泊まるから待て!!」

よし!言質は取れた!

アスナ「今泊まるって言ったよね?」

ハチマン「嫌そのそれらその場の流れ「言ったよね?」で:はい。分かりました」

アスナ「よし!それじゃあ行こう!」

ハチマン side

アスナはいきなり泊まれとか言い出して何をしたいんだ?

アスナの事だから俺の事を嵌めるって事は無いだろうし:本当に意味が分からない

:

そんな事を考えている内にアスナの家に着いてしまった。女の子の家に入るなんて

久しぶりだ:

中学生の頃成り行きで女子の家に行ったら
クラスメイト「ヒキガヤ菌が移るから帰って!!」

って言われたなあ：懐しい悪い思い出：

アスナ「たごいま！」

ハチマン「おじやまします：」

部屋に入ってみると如何にも女の子っぽい部屋のレイアウトだった。

立派なソファア―に棚の上には花瓶が飾ってあってキッチンもしっかり整理整頓されてる。部屋も整理整頓されている為なお清楚感が出ている。アスナと結婚出来る奴は
幸せ者だな」

アスナ「え／／／そんな事急に言われても／／／」モジモジ

ハチマン「ん？急にどうした？顔真つ赤にして」

こいつさつきも顔真つ赤にしてたよな？

風邪でも引いてるのか？っていうかそもそもS A Oに風邪つてあるのか？

アスナ「だって：ハチマン君が今私と結婚したいって／／／」

心の声漏れてたのかよ：：っていうかあれ？少し違くない？何かアスナさんの脳内で
勝手に補正されてますよね？

ハチマン「おーい？アスナ〜？」

アスナ「ブツブツブツブツブツ」

ハチマン「俺もう帰るわ」

アスナ「待ってエエエ!!」

ハチマン「痛ってえ!! 思いつき突き飛ばすな!」

アスナ「帰るなんて言うからだよ! ご飯作るから待ってて! 私の物勝手に触っちゃダメだよ!」

言われなくても触りませんよ: んじやする事無いしソファーに座って新聞読んではか:

『攻略組! 今度は70層を攻略! 主に神聖剣ヒースクリフ率いる血盟騎士団が主力の様!』

へえ: つていうか後少してクォーターポイントか: また死者が数人は出るんだろうな:

今後の攻略には俺も参加しないといけないし授かったユニークスキルで一人でも救えるように動かねえといけねえな:

アスナ「ご飯出来たよ!!」

そう言われて席に着くとそこには刺身が並んでいて小皿には謎の液体が入っていた。謎の液体を舐めてみると馴染み深い味がした。

これは：

ハチマン「マジかよ：千葉県が誇る醤油じゃねえか：この世界にあるとはな：」

アスナ「私が調合したの。塩だけだと物足りないからね。それじゃ音頭とるね。はい、いただきます！」

ハチマン「いただきます！」

柄になく元気な声を出してしまつた俺だが実際かなりテンションが上がっている。あの醤油を堪能出来るのだから。マツ缶あれば最高なんだけどなあ：まあ俺は食わせてもらつてる立場だしあんま文句言えないな：

アスナ「その：ハチマン君？今日一緒にベッドで寝ない？」

ハチマン「おう！いいぞ！：：：：え？」

あれ？今とんでもないこと口走りませんでしたか？

アスナさんも口パクパクしちやつてるし：

俺も何気分がハイになつてるから返事しちやつたんだよ。

アスナ「言質は：取つたからね／／ごちそうさま！お風呂湧いてるから先入つてね

／／

(これは今日一日を無事に終われる気がしねえな：)

そんな覚悟をしたハチマンであつた。

第27話 アスナの家にお泊りする事になった。(後編)

アスナ side

体を洗い風呂に使っていたアスナは顔が真っ赤になっていた。もちろんのぼせたわけではない。

アスナ(へへへ…ハチマン君に結婚したいって言われちゃった…)

※言われてません

アスナ(ハチマン君もしかして私の事好きなのかな?もう今日告白しちゃおうかな?でももし私の勝手な勘違いで告白断られちゃったらもう今までの関係ではいられないよね…どうしよう…)

アスナ「ほんと恋愛ってむずかしいなあ…」

誰にも聞こえない声の大きさをそう呟いたアスナだった。

アスナ side out

ハチマン side

ハチマン(それにしても今日のアスナはなんなんだ?いきなり家に泊めてくるし同じ

ベッドで寝ようと誘ってくるし……女子が恋愛関係でもない男を夜遅くに自分の家に泊めるなんて事をするのはただ一つの理由しか無いよな……でも俺はアスナの気持ちを受け取る事が出来ない……だって俺には……)

ふとリスに告白された時の言葉を思い出す。

ハチマン「俺は“本物”を手に入れることが出来ないのか?……」

そう考えると自分の事が情けなくなり気が付くと静かに俺は泣いていた。

アスナ「お風呂上がったよー!残り湯で変なことしちやだめだよ?でもハチマン君ならいい……ってどうしたの!？」

アスナは泣いている俺の事をずっと抱きしめてくれた。俺が何で泣いているのか察してくれたようだ。

アスナ「ハチマン君の苦しみを私はわからない。でもきつと私の想像を絶するものなんだと思う。だからさ……辛い時は一人で抱え込むじゃなくて私に相談して?私は絶対に君の元からいなくなるから……ずつと一緒にいるから……」

そう一息おいた後でアスナは自分の言葉を思い出したのか、また顔が赤くなった。

アスナ「そそそそその一緒にいるって言うのはずっと友達とか相談相手でいるって意味で別にハチマンと一緒に暮らしたりとかそういうわけじゃないからね!?!ほんとだよ

!!」

ハチマン「分かってるよ。その…ありがとな。元気でたわ。そんじゃあ風呂入って来るからな」

アスナ「うん！」

俺は少し晴れ晴れとした気分です風呂場へと向かった。

—————

風呂を上がってリビングに向かうとアスナは顔を真っ赤にして後ろに後ずさった。何？アスナは最近赤面がマイブームなの？っていうか赤面要素ありますか？

アスナ「そのハチマン君…ハチマン君は心の準備ができてるかもしれないけど私はまだできてないの！！でもハチマン君が本当にその気ならその…私は…いいよ？」

ハチマン「え？」

そのままアスナはさらなる爆弾発言を投下してきた。

アスナ「初めてだから…優しくしてね？」

その爆弾発言に上目遣いに赤面はするいだろおおおおお!!耐えろ…耐えろよ俺の理性…俺は理性の化け物だろうが…

ハチマン「そのアスナ？俺がバスタオル一枚なのはただ単に熱いからだぞ？男は風呂上りにすぐ服とかは着ないでこうやってクールダウンするんだ。だからアスナが考えような事はしないぞ？」

そういうとアスナはぼけーとした顔で10秒ほどフリーズしていた。まあそりゃあそうなるわな。さすがに女子の前でバスタオル一枚はまずかったか？

あれ？アスナさん手が紫色に光ってませんか？気のせいですよ？

アスナ「ハチマン君の馬鹿あああ!!」

ハチマン「グゴオオオ!!」

そのまま俺は壁に打ち付けられた。

ハチマン（なんで俺は一日を無事におられないんだよ…）

俺はは気絶することはなかったもののしばらく腹を抑えていた。圈内だからってやりすぎだろ…

っていうかまた光ってませんか？しかも次はランベントライトですよ？

ハチマン「待て！何でもするから!!」

あ、やべ…

アスナ「今何でもするって言ったよね？じゃあ言う事聞いてね！とりあえず早く服着てベッドに来て／＼／＼もう寝るから／＼／＼」

ハチマン「分かりました…」

すぐ何でもするっていう癖直さねえとな…

—————

服を着て寝室に向かうとそこには下着姿のアスナが居た。上はブラのみで下はパンツの上にさすがに何か来ているようだが目のやり場に困る。ぶっちゃけて言えばエロい。

アスナ「私がいつも寝るときの恰好だから気にしないで！ほら早くベッド入って！」
ハチマン「お、おう…」

言われるがままにベッドに入ったところで状況を整理する。

下着姿の美少女と同じベッドに入ってる。これなんてエロゲー？

アスナ「そのハチマン君にしてもらいたい事は」

そういつてからアスナは衝撃的な行動を撮った。

アスナ「今夜私の抱き枕になって？」

アスナが俺に後ろから抱き着いてきたのだ。待つて！いろいろ当たっているから！
柔らかいし、いい匂いだしいい匂いだし、柔らかいから!!理性とんじゃうって！

落ち着け比企谷八幡：お前は今夜だけ抱き枕になりきるんだ。

俺は無機物俺は無機物俺は無機物俺は無機物俺は無機物俺は無機物俺は無機物俺は無機物
無機物……ふう取り敢えず落ち着いた。

そしてこのまま寝るだけ「スウウウ………美少女に寝息かけられて寝て居られる
ほどまだ俺は人間が出来てません。

ハチマン「今夜は格闘か……」
ぐっすりと寝ているアスナとは裏腹に強い決意？をしたハチマンだった。

第30話 諜報部の実態

ハチマン「結局一睡も出来なかつた。」

俺はアスナが寝息をかけてきたり抱きついて胸を押し当てて来るせいでまったく眠ることが出来なかつた。

マジでお騒がせな副団長様だ。

アスナ「んううう：おはようハチマン君」

下着姿のまま俺に挨拶をしてきたアスナを見ると完全に事後の様に見えるが俺らは全くそのような疚しい事はしていない。本当だぞ？

ハチマン「おう：早く服着ろ。つていうか何でハラズメント警告が流れないんだよ？ 本当なら今頃俺は牢獄だぞ？」

アスナ「それはハチマン君に対してのハラズメント警告を切断してるからだよ？ 設定で出来るし」

確かに考えればそうか。恋人同士がそのような行為を行うときに一々警告がなつていたら興も削がれるし雰囲気もぶち壊される。そこらへんはちゃんと設定されてるんだな：

ってどうか俺に対して切ってるって襲ってくださいってことか？

まあ俺は度胸ないからしないけど：

ハチマン「俺が襲ったらどうすんだよ？」

アスナ「ハチマン君ヘタレだしそんな事しないでしょ？」

┌

：：その通りなんだが異性に言われると何か傷付く。

アスナ「それにハチマン君になら襲われてもいいし：：」

ハチマン「冗談は良いから早く服着ろ。俺はもう家出るから」

アスナ「朝御飯ぐらい作るから待ってて！私の服とか勝手に触らないでね！」

ハチマン「分かってますよ：」

それにしても本当に大変だった：危うく理性が崩壊するところだったぞ？

この後諜報部に行かなきゃいけねえけど体力持つか？：

アスナ side

アスナ（ああああ!!本当に危なかった!!あれ以上ハチマン君と一緒にいたら絶対顔が

赤くなつてたよお!!)

アスナは自分の部屋で絶賛悶絶中だった。

下着はやりすぎたかなあ。それでもハチマン君襲つてくれなかったし：理性の化け物すぎでしょ：この後はサウサーの所に行っちゃうんだよね：絶対にサウサーには負けたくないからこんぐらいはしても良かったとは思うけど：それにしてもハチマン君は私の好意には気付いてくれたかな？何か鈍感キャラっぽいしなあ：

そんな思考を張り巡らしつつアスナは着替えて朝御飯を作る準備をしていた。

ハチマン side

アスナの作ってくれた朝御飯を食べて家を出た俺は血盟騎士団諜報部と書かれた看板のぶら下がっている部屋の前にいる。

ハチマン（マジでダルい：昨日の夜と今日の朝で一日分の体力使い切っちゃまったよ）

それでも行かなくてもいい理由にはならないので仕方なくノックして部屋に入ることにした。

ハチマン「失礼します。今日から所属される事になりましたハチマンで「ハチマン!!」

突然声だされるとうるさいから止めて…っていうか周りの視線もかなり痛いから止めて。

サウサー「一日ぶりだね！ようこそ諜報部へ！！」

ハチマン「お、おう…よろしくな。」

???「貴様！序列2位のサウサー様に敬語を使わないなんて無礼な真似をするとは！！」

What??序列とか某ラノベのアスタリスクかよ…

ハチマン「序列とかラノベパクツで恥ずかしくないんですかね？所であんたは誰だ

？」

???「私は序列6位のリユーネハイムだ！！」

名前まで世界の歌姫パクツちゃつてるよ…見た感じ20代後半のおっさんだけど

ぶつちやけおっさんでその名前はかなり痛くないか？

ハチマン「はいはいリユーネハイムさんね。んでサウサーに敬語を使えっか？それは無理だ。諜報部のメンバーという立場の前にこいつとは一応ほんの少しだけ友達だ」

サウサー「つてことだから気にしないでね。みんなも敬語使わなくていいんだよ？」

「「とんでもないじゃない！！」」

「「とんでもないじゃない！！」」

本当に鬱陶しい連中だな…。それにしても何でこんなにサウサーは崇められてるん

だ？序列の関係もあるだろうが俺の知ってるサウサーは一人で何にもできない無能な

かまってちゃんなはずなんだが…まあそのうちわかるだろ。

ハチマン「んじや仕事内容を教えてくれ」

サウサー「OK!とりあえず大まかな仕事は他のギルドの動きの観察や情報集めかな!でも最近ではラフィンコフィンも情報集めばっかりだよ…おかげで私もラフィンコフィンが出没されそうなところに張り付いてただけで逆に見付かって危うく死ぬところだったよ」

あの時サウサーは情報集めしてたのか。それにしても逆に見付かるなんてことがあるか?もしかしたら血盟騎士団何に内通者が…まあ憶測だから話さない方がいいな。

ハチマン「だいたい理解した。それで序列はどうやって上げるんだ?」

サウサー「だいたいは情報集めの功績で変わるんだけど2週間に一回【公式序列戦】つてのがそこで入れ替わる事が出来るんだ!まあ実力なんてそんな変わらないからほぼほぼ意味ないんだけどね」

制度までアスタリスクかよ…さすがに驚いたわ…

ハチマン「そういえば1位のやつは?」

サウサー「ああシンルーさんなら今あ出かけてるよ。今日公式序列戦あんのになあ…」

シンルーとか序列1位の幼女かよ…まさかそいつ幼女じゃないよな?

それよりも：

ハチマン「今日序列戦あるって言ったよな？それじゃあ今日からお前は序列3位だ」
サウサー「何偉そうなこと言ってるのよ。私だって今のところずっとこの地位を守ってるんだからね！絶対負けないから！」

ハチマン「お前何か余裕だわ。お前が俺に勝ってるのはコミュ力だけ「黙れ!!!」ん？」
リューネハイム「さっきから聞いていればサウサー様の罵倒ばかりしよって!!目の腐った分際で調子に乗るなよ！俺と戦え!!まあ俺とお前じゃ一瞬で勝負がつくがな！」
ハチマン「そうだな。お前が一瞬で地に倒れこむ姿が容易に想像出来るわ。っていうかサウサー様サウサー様ってナーブギアが故障して頭がおかしくなったか？こいつはそんな器じゃねえつつうの」

流石に言い過ぎたか？もちろんサウサーにだが。

だがサウサーは喜々としている。

まさかこいつ：

サウサー「Mとかじゃないからね？」

もしかしてサウサーさん心読スキルとか持つてます？

サウサー「確かに私はそんな器じゃないからね。リューネハイムもそこまで言うなら戦ってみれば。ハチマンも公式序列戦の扱いにしてあげるから」

まじか!!こんな雑魚倒して序列上がれるなら安いもんだ。

ハチマン「んじや戦う場所に移動しようぜ。リユースハイムも序列落ちするけどいいか？」

リユースハイム「その舐めた口を二度と開かないようにしてやる」
こうして俺はリユースハイムと戦うために闘技場に向かった。

第31話 初の序列戦

闘技場に歩いていく途中俺はユニークスキルを使用するかどうか迷っていた。

ユニークスキルが発言したことが世に出回ると逆恨みされて事件に巻き込まれる可能性が出てくる。

ハチマン（まあこいつ相手だったら拳だけでも勝てるか：）

そんなことを考えているといつのまにか闘技場に立っていた。

っていうか見てる人多くない？

団長もアスナも居るよね？

ざっと100人は越えてるんじゃないか？

サウサー「何でこんな人数居るのかって顔してるね！それは私が宣伝して暇な団員を集めたからだよ！期待の新人が序列戦に挑むって！」

めんどくさいことしてくれたな：

後で一発軽く殴るか：

リユーネハイム「半減決着で行くぞ！武器を用意しろ！」

ハチマン「俺は武器なんて用意する必要ねえよ。体術だけで充分だ」

リユーネハイム「舐めやがってええ：後悔するなよおお!!!」

そう言つてリユーネハイムは槍を取り出してきた。

剣かと思つたのにな：

槍があいつの武器か：リーチ長いし俺が圧倒的に不利だしノーダメ完全勝利は無理か：

ヒースクリフ「今回の序列戦は【乱閃槍】のリユーネハイムVS期待の新人のハチマン君だ。どうぞ見てつてくれ。きつとすごい試合が見られると思うよ」

「ワアアアアアア!!!」

立派な二つ名まであるのかよ：

まさか序列1位は万有天羅か：？

おっと：試合が始まるな：

3, 2, 1, Ready Fight!!

デュエルが始まったと同時にリユーネハイムは距離を詰めて首に向かつて槍を突いてきた。

ハチマン（確かに槍を突くスピードは早い：だけどな…）

ハチマン「動きが直線的すぎる」

俺は喉元まで槍が来たところで避けて槍を掴みすぎさま回し蹴りでリユーネハイムの喉を突き

狼狽えた所でスキル【閃打】で鳩尾を殴り体力を半分まで減らした。

Winner Hachiman

「ワアアアアアアアア!!」

盛大な歓声を受けて舞台から降りようとした時リユーネハイムが胸倉を掴んできた。

そんなに自分が負けたのを認めたくないのか？

リユーネハイム「貴様あ!!! どんな卑怯な手を使いやがった!! 目だけじゃなくて心まで腐ってるのか!」

ハチマン「お前の実力不足だよ、乱閃槍さん? 二つ名の割には弱かったな。こんな有利な状況でお前は公衆の前で負けたんだ。言い訳は出来ねえよ」

リユーネハイム「うるせえええ!!!」

そう吐き捨ててリユーネハイムは短剣をどこからか取り出して俺に目掛けて刺そうとした。

しかしその短剣は俺に刺さる事は無く宙に舞っていった。

サウサーが防いでくれたのだ。隣にはアスナもいる。

アスナ「諜報部 序列7位のリユーネハイム。序列6位のハチマン君に対しての誹謗

中傷や暴行未遂で貴方を副団長権限で降格とします。次の部署が決まるまで本部で待機すること」

めつちや序列の所強調するから笑つちまうところだったじゃねえか：

リユースハイム「そんな：ハチマン様ああああ!!お許し下さい!!数々の無礼な発言。大変申し訳ございませんでしたああああ!!」

なんだこいつは？自分の地位が危ぶまれるとすぐ手のひら返しかな？本当にムカつくな。

ハチマン「俺はアスナには逆らえないからな。あいつは副団長な訳だし。副団長の権限を使われたらどうしようもできねえよ。自分を恨むんだな」

リユースハイム「ツツ!!」

やつぱりリユースハイムも副団長の命令じゃ言うことは聞くのか：

こんなんばつかだつたら諜報部終わってるんじゃないか？

ハチマン「おいサウサー。お前と戦いたいんだが良いか？次はちゃんと武器を使って戦うからよ」

サウサー「：分かった。正直貴方の動きは人間離れしているけど序列2位の座は渡さないわ」

ハチマン「おう。んでお願い何だが観戦者が居ない状態にしてくれないか？少し事情

があつてな：俺の戦いかたを回りに見られたくないんだよ」

サウサー「それじゃあもう少し小さい闘技場あるからそこに行こうか！」

ハチマン「それとアスナとヒースクリフ。これはいずれお前らにも言わなきやいけな
いことだからな。暇だったら試合を見に来てくれ」

ヒースクリフ「私は大丈夫だよ。アスナ君は？」

アスナ「私も大丈夫!!それじゃあ行こうか！」

俺達4人は小さな体育館程の闘技場に向かうことになった。

それにしてもサウサーの実力はどの程度なのだろうか? :

第32話 最強の奥義は時に囷となるものである。

サウサー「着いたよ」

ハチマン「ここか：」

着いた場所はさつき戦った場所よりかは小さな闘技場の様だった。

アスナ「ハチマン君。サウサー。準備はいい？」

サウサー「私は大丈夫よ」

ハチマン「俺もだ。それじゃあ半減決着で送るぞ。早く武器を用意しろ」

サウサー「分かってるよ。っしょ!!」

何でこの子双剣持ってるの？キリトなの？

ハチマン「なあ：両手に剣持ってるけど片手しか使えなくなかったっけか？」

サウサー「どっかの超ムズいクエストクリアしたらスキルに追加されてたのよ！名前
は双剣スキル！」

なるほどな：エクストラスキルってやつか：

キリトの両手剣は双剣が進化したものって考えていいのか？

って言うか両手剣と双剣ってどこが違うんだよ：

サウサー「早くハチマンも武器用意して！」

ハチマン「ああ：わりい。んんっしょ!!」

「!!!」

まあ：そりやあ驚くよな：

ん？何でヒースクリフは驚いてないんだ？

自分がユニークスキルを持つて言うのもあるがあくまでヒースクリフのは最強の防衛術で俺みたいに新たな武器が有るわけでも無いのに：

まるで最初から知ってたかのような：

サウサー「ちよつと!!それ何よ!!」

アスナ「そうだよハチマン君！」

ハチマン「この事に関して説明させて貰いたい。ちよつと前にこのユニークスキルが追加されててな。名前は大鎌スキル。この武器の名前は焰月。マスタースミスのリズベットに作つて貰つたんだよ」

アスナ「もしかしてあの時の!?!」

ハチマン「あの時だ。んで話は戻すがこの事は周りに広めないで欲しい。妬まれて何されるか分かつたもんじゃねえからな」

マジでただでさえ色々巻き込まれてるだから止めてくれよ？ヒースクリフぐらいに

なると攻略組が動くから手を出さないだろうが俺何か出し放題だからな：

ヒースクリフ「分かった。必ず口外はしないと誓おう」

ハチマン「そうしてくれると助かる。それじゃあデュエルを始めるぞ」

序列2位の力：見せてもらおうぞ：

3, 2, 1, ready fight!!

サウサーは試合開始と同時にいきなり足を踏み込み距離を縮ませて剣を斬り込んできた。

(早いっ!!……)

どう考えても早さがおかしいだろ：

キリトもかなり早いとその1, 5倍は早いぞ：

あまりの早さに対応仕切らず何とか盾で受けきるがそのまま態勢を崩してしまつたが倒れこむ前に弧を描くように鎌を振つた事でそのまま追撃されることは無かつた。

それより見た感じ双剣だと同時に剣を振ることは出来ないのか：あくまで片手剣が両手にあるつて扱い何だな：

何とか態勢を建て直すがサウサーの攻撃が止まらない。

そのせいで防戦一方となり何とかパリイをしようとしても隙がないためする事の出

来ない絶対絶命の状況に陥っていた。

(このままだとヤバイな…一の舞を使うか…)

ハチマン【一の舞 刻炎乱舞】

炎を纏った鎌を的確に降り下ろしていくが何と全て捌かれてしまった。

(こいつ…剣を二つ持ったらこんな強いのかよ…この間は一本だったから弱かったのか…)

ハチマン「仕方ねえな…」

サウサー「ん?どうしたの?負けを認めるの?」

ハチマン「アホか。俺が今の所出せる最強の技を放ってやるよ。まあそれも防がれたら負けるのは確実だけだな。お前はめっちゃめっちゃ強い」

最強とか言っちゃったけど正直まだ完成してないんだよな…まあやるしかねえか

ハチマン【二の舞 焰帝の不死鳥】

この技は盾を捨てて鎌を両手で持ち振り下ろす8連撃の技なんだが…そして何故か鎌からは不死鳥の化身が出てる。

サウサー「遅いね」

サウサーの言う通りこの技はパワーを重視している分スピードが遅くなってしまうのだ。鍛練を積むことでどうとでもなるのだろうがまだ経験が足りない。

だから俺は鎌を捨てた。

鎌を振り下ろすギリギリの間合いで鎌を捨てる。

ようするにこの技は囷だ。

当然サウサーは鎌の動きに注意して避けてるから突然鎌を落とされたら状況が判断できなくなる。

その隙について脇腹に蹴りを食らわせてそのまま顔面に拳を入れて体力を半分まで減らすことが出来た。

winner! Hachiman

やり過ぎた：どう考えてもやり過ぎた：

ハチマン「ごめんなさい!!」

場合によっては土下座もする覚悟で謝る。

サウサー「あはは！別に謝らなくてもいいよ！私の事を認めてくれたから彼処までしたんでしょ？それなら別にいいから！」

何か：サウサー感じ良くなった？

若干天使になつてない？

ハチマン「それなら良いんだけどよ……」

ヒースクリフ「ブラボー！良い戦いだつたよ。特に最後の8連撃の技はお見事だつた。この試合の結果に基づいてハチマン君を序列2位とする。二つ名はそうだな……また後日考えようか」

ハチマン「そりやどうも。二つ名とか別に要らないですよ。」

つていうかそれよりこいつ……おかしな発言をしてなかつたか？まさかこいつは……

第33話 動き出した悪意

俺達が諜報部に戻ると一気に人が集まってきた。

M o b 1 「どっちが勝ったのですか!？」

M o b 2 「サウサー様に決まってるんだろ。いくらこいつが少し武道の心得があるからって勝てねえって」

サウサー 「ハチマンの侮辱は許さないわよ…」ゴオオ

M o b 2 「ヒイッ!!」

こっわ!! 殺気出しすぎだろ!! 皆足震えちゃってるよ!

サウサー 「負けたのは私。今日から私は序列3位でハチマンが2位よ。貴方より序列は上なんだから尊敬の念を持って接しなさい」

M o b 共 「分かりました!!」

そして俺が序列2位になった日から1週間後：

MOB1「ハチマン様！雑務でも何でもやります！」

MOB2「肩が凝ってらっしゃってるのでは？揉んで差し上げましょう！」

うぜえ…まじでうぜえ…こいつらは自分より強いやつらにこうやってへーこらするのか？

いくら俺がサウサーに勝ったからって崇められすぎだろ…

サウサー「しょうがないよハチマン。慣れれば何とかなるから」

こんな環境に絶対慣れたくねえ：

ハチマン「そういうもんか：『バタンツツツ！！』ん？」

アスナ「大変です！ラフィン・コフィンからこんな手紙が：

【お前から血盟騎士団のシンルーは俺らが捕まえた。殺されたくなければハチマンをよこすか俺達に関しての調査はもう止める。1ヶ月待つて動きが無いと判断できれば解放してやる。その間は色々な事に使わせてもらうがな】

サウサー「ありえない：シンルーさんは私の5倍は強いもの：いくらなんでもラフィン・コフィンごときのメンバーに捕らえられる訳がないわ」

となると可能性は：

アスナ「待ちぶせでの集団攻撃ね」

その通りだ。だがそれにはいくつか条件がある。

ハチマン「けど待ちぶせをするには前もって居場所を知らなければ絶対に出来ない。となると血盟騎士団の中に裏切者がいる可能性が高いな」

サウサー「そんな：裏切者何て：」

ハチマン「なあ。シンルーさんは女か？」

サウサー「ええそうよ」

ハチマン「となるとやべえな：」

労働等には使わないだろうが脅して倫理コードを切らせて強制的に行為に及んだり溜まつてるものを発散させたりする可能性はあるからな：そんなことされて1ヶ月も待てる訳がない。

ハチマン「よし。助けに行くぞ」

サウサー「そんなこと言ったってどこにいるか分かるの？」

ハチマン「先に血盟騎士団内の裏切り者を探すんだよ。目星はついてるしな」

アスナ「誰なの？」

ハチマン「恐らくリユーネハイムだな。アイツは俺に相等恨みを持つてるしシンルーさんがどこに行くかを把握してたはずだ。そしてリユーネハイムを勧誘した裏切り者が恐らく後もう一人はいる。まずはリユーネハイムだな」

絶対にラフィン・コフィン何かに殺させねえぞ：

八幡 Side out

??? Side

リユーネハイム「お前の言った通りにしたぞ」

??? 「良くやった。同じラフィン・コフィン同士PKを楽しんで行こうじゃねえか：」
そしてやがては：

必ずあいつを殺してやる。

第34話 クラディールの思惑

脅迫状を受けた俺達はリユーネハイムが犯人だと睨んでいる。だが……

ハチマン「どこにも居なくね？」

探しはじめて2日後

自分が疑われるのを知ってたのか攻略組本部の中にはおらず、フレンドも消されていたらしく連絡も取れない。

どうしたものか……

「コンッコンッ」

アスナ「どうぞ」

???「ハチマン君を貸してもらいたい」

アスナ「ゴドフリー。今はそれ所じや無いの。分かってるでしょ？」

確かこいつは：序列4位の奴だったな。

俺の事を様付けせず普通に読んでくれる数少ない一般人だったはず。

ゴドフリー「シンルーについての調査をしたいが俺一人じゃ心細くてな。そして今回

は別の目的もある。ハチマン君がリユーネハイムを倒したその晩にリユーネハイムがクラデールと話してるのを見掛けてな。聞耳を使ったら確かにラフィン・コフィンと聞こえた」

ここで最高の情報じゃねえか：

でもそれにしても言いづらいけど：

サウサー「クラデールって誰？」

同じこと思ってる人いて良かった！

アスナ「私の元護衛役よ。ハチマン君はグリムロックの1件でデュエルしたじゃない」

.....

思い出したわ。あの頭が少しおかしいやつね。

偏見だが彼奴みたいなのはラフィン・コフィンに居そうだな：

ゴドフリー「それで会話を戻すがハチマン君の実力を試すと言う名目でクラデールを誘うことに成功した。」

ほんとこの人凄いな：

もう副団長なってるいいんじゃない？

話を戻すが、

内容を聞いてみると結晶を全て回収した上での演習の様だ。毒を染み込ませた剣か何かを不意打ちで刺せば確実に殺せるな。

演習は今から30分後か：念のためにアスナには演習の近くで待機してもらってサウサーには何かあつた時用に本部に居てもらおう事にした。

そして30分後：

クラディール「お久しぶりです。ハチマンさん。今日はよろしくお願ひいたします」
笑顔で挨拶してきたクラディールだが陽乃さんの仮面を見破つた俺には分かる。笑顔は作り笑いで眼の奥にはどす黒い感情が籠ってるぞ。絶対に殺してやるってな。

ハチマン会 「よろしくな」

ゴドフリー「それじゃあ結晶を全て回収させてもらう」

この時俺らは回復結晶を5個隠した上で渡した。

もしも刺された時にすぐ麻痺を解除出来ようにだ。

クラディール「それじゃあ行きましょう！」

こうしてクラディールとハチマン&ゴドフリーはそれぞれの思惑を持って演習に向かった。

これからお互いにおこる悲劇も知らずに：

第35話 絶望

演習場に着いてある程度やってるとクラデイルが妙な動きをし始めた。

まるでこつちに來いと誘ってるかのようにな……

当然俺とゴドフリーは向かって何時でも対抗出来るように結晶を後ろに隠した手で握っていた。

クラデイル「キエエヤアアア!!」

やつぱりな。避けるのは簡単だがここは人芝居打つか……

ハチマン「グハアアアッ!クラデイル何しやがる……って体が動かねえ……」

クラデイル「ヒヤツハアアア!!やつとお前を殺すことが出来る!!冥土の土産に教えてやるよ!!俺はラフィン・コフィンのメンバーでなあ!!シンルーの事を教えたのも俺だああ!!」

クラデイル「お前を殺したあとそのおっさんも殺してやるから安心しろ。それじゃあ……じゃあなあああああ!!」

ここだっ!!

俺は直ぐに結晶を使い全回復した後ゴドフリーから貰っていた小さな短剣をクラ

デイールの肩に突き刺した。

クラデイール「いつてええええ!! 何で結晶を持ってやがるんだよ!!」

ハチマン「お前がラフィン・コフィンつてのは前から分かってたよ。要するに泳がせといたんだ。んで協力者はリユーネハイムだろ? んでリユーネハイムは:」

リユーネハイム「ここだよ」

ハチマン「なっ!!」

何とリユーネハイムは麻痺をしてるゴドフリーの背後に回り込んで剣を首元に突き刺していた。

生憎ゴドフリーは持っていた剣を落とされてしまっている。

リユーネハイム「今俺らを見逃せばお前らの事も見逃してやるよ。お前らを殺したら元々血盟騎士団は抜けるつもりだったからな」

どうする:もしこいつらを逃がしたら絶対にシンルーは助けられない:

かといつてゴドフリーを見捨てるわけにも:

こうなったら最悪だが:こうするしか:

ハチマン「分かった。回復結晶を手渡しする。クラデイールとゴドフリーに覚え」

リユーネハイム「それでいい。まあこれでシンルーは救えないけどな!!」

うざったらしいリユースハイムの声を聞きながら回復結晶を手渡しする瞬間俺は迷わず心臓の位置に拳を放って殺した。

ハチマン「クラデイル。シンルーはどこにいる？」

クラデイル「ヒイイっ!! 69層の森林地帯の奥です・これが地図でございませす・」
ガクガクブルブル

ハチマン「確かに受け取った。回復してやるが二度とこんなことすんなよ」

まあ回復させたらどうなるかは分かるけどな・

クラデイル「しねえええ!!」

剣を振り下ろしてきたクラデイルの攻撃を易々と避けていく。

そして俺は直ぐにクラデイルの元に向かって同じく心臓の位置に短剣を刺した。

クラデイル「この：人殺しが：」

ポリゴン粒子となって消えていく寸前に言われた言葉はクラデイルを殺した後突然自分に襲ってきた。

人を：殺してしまった。

ほんの数秒前の時は人を殺すのに躊躇いさえ無かった。

俺はあの最低集団と同じレベルだ。

そう考えるだけで吐き気がする。

唯一の救いはゴドフリーを。一人の命を俺の殺人で救えたって事だけだ。

ゴドフリー「すまない：俺のせいだ：」

ハチマン「気にするな：俺のやったことだ：」

俺は：本物が手に入れられないのか？

こうして演習はこちらの陣営の犠牲者が出ることを防ぐことは出来たものの最悪の結末となってしまうた。

第35話 赦されない罪

アスナ side

ハチマン君の指示で岩陰に隠れてるけど特に何も起きないなあ：このまま出番は無
いかな？

クラデイル「しねええええ!!」

アスナ(なっ!)

ハチマン君に何かあったの!?!急いで行かなきゃ!!

ハチマン君の身を案じて走って現場に着いたときに見た光景はクラデイルに短剣
を突き刺してるハチマン君の姿だった。

やがてクラデイルはポリゴン粒子となつて消えていき

ハチマン君は天をしばらく死んだ目で見上げていた。

その様子を呆然と立ち尽くして見ていた私に気付いたのかゴドフリーが近づいてき
た。

ゴドフリー「副団長!!全て私の責任なんです!私が力不足が故にハチマン君は殺人を
してしまった!処罰するなら私を!!」

アスナ「落ち着いて。まずは事情を教えてください。」

ゴドフリーから事情を聞いた私は不謹慎だが少しほっとしてしまった。

ハチマン君がラフィン・コフィンのように理由もないのに殺した訳じゃ無くてちゃんと人を助けるために殺したって事が分かったからだ。

アスナ「事情は分かりました。ハチマン君の所に言ってきました」

そう言っただけで私は急いでハチマン君の所に向かった。

ハチマン side

『殺す』

中高生の会話の中でよく用いられる現代では普遍的な言葉。

軽々しく使ってはいけない言葉。

自分はこの言葉の重みを少なくとも知っていると勝手に思っていた。そもそも殺人何てする機会が無かったからそれさえも楽観的に考えていたのかもしれない。

だがいざこのような状態になると何にも考えられなくなる。

頭に浮かぶのは『人ヲ殺メタ』という事実と死ぬ間際の二人の顔だ。

誰かが必死に話しかけているが誰かも分からない。

手を引つ張られるが殺すときに感じた感触が手に強く残っていて何も感じない。

少し落ち着いて何かを考えられるようになったときに真つ先に考えたのはあいつらの事だ。

最愛の妹の小町。奉仕部の雪ノ下と由比ヶ浜。後輩の一色。戸塚や平塚先生や雪ノ下さんについて材木座。

もし現実に戻っても殺人何て許されない罪をした俺に接してくれるのか？

そんな訳が無い。いくら血縁者の小町であつても殺人犯とは一緒にいたくないはずだ。

それなら殺したつてことを胸の奥に封印して現実で変わることなく過ごしていくのか？

それも無理だ。この事を胸の奥にずっと留めておくなんて苦しすぎるし辛いだろう。

正直に話して拒絶されながら生きるか。

偽って苦しみながら生きるか。

俺は：どうすればいいんだ？

第36話 アスナの論し

ある程度落ち着いて辺りを見渡してみるとそこは誰かの家だった。

そう言えば俺が考えてるときに誰か話しかけてた気がするな：

アスナ「ハチマン君!!」

アスナの家か：アスナの透き通るような声も今では掠れている様に聞こえる。

ハチマン「……………何だ？」

アスナ「やつと話聞いてくれたっ!!疲れてるだろうからシチュー作ってあげるね!」

アスナがあからさまに励まそうとしているのは分かるが正直邪魔でしかない。そもそも何故咎人の事を今更気にかけるのだろうか？俺は所詮ラフィン・コフィンの連中と同じ分類だぞ？：

無理に気にかげられるぐらいだったらいっそのこと見放してくれた方が良いのだが

アスナ side

ハチマン君：やっぱり落ち込んでるよね：

下手したら自殺とか考えちゃうかも知れない：

私が出る限りでのケアをしてあげないと：

よしっ！シチュー出来た！

ご飯食べてる間に少しでも心を軽くしてあげなきや！！

アスナ「ハチマン君！ご飯出来たよ！！せーのっ！頂きます！」

ハチマン「……頂きます」

アスナ「……」

ハチマン「……なあ？俺の事なんか無理して気になんかなくて良いぞ？」

アスナ「え？」

ハチマン「俺みたいな犯罪者に無理して接しなくて良いって言うてんだよ。アスナだつて嫌だろ？殺人者と一緒に飯食うなんて」

アスナ「何言ってるの!!!」

いけない。つい声を荒れげちやつた：

落ち着いて落ち着いて：

アスナ「ハチマン君は自分の事を殺人をした犯罪者でラフィン・コフィンの様な低俗

な連中と同類だと思つてる。違う?」

ハチマン「そうだが?」

アスナ「それは半分正解で半分間違いだよ。確かにハチマン君が人を殺したのは事実」

ハチマン「やつぱりそう『でもね?』……」

アスナ「ハチマン君はゴドフリーを助けるためにやむを得ず殺したんでしょ? 過剰防衛かもしれないけど自分達の欲を満たすために人を殺すあの連中とは違うよ。」

ハチマン「でも俺はこれから:」

アスナ「まず大事なのは一生を掛けてでも罪を償う事。間違つても死を持つて償うなんて考えないで。それは馬鹿のする事よ。そして忘れないで? 貴方は一人の命を救つてるの。そして辛いときには:私が居るから。ね?」

ハチマン「ありがとな:マジで気が楽になった。不謹慎だけどな。アスナの言う通りだ」

ハチマン君が笑顔を取り戻して良かった。

つていうか私さつき何気に物凄く恥ずかしいこと言つてたよね?

ハチマン「アスナ? おーい? 顔真つ赤だぞ?」

アスナ「何でもないよ!!それよりも帰つて!!まだ宿なら開いてるでしょ!!」

結局恥ずかしくなった私は勢いでハチマン君を家から追い出すのであった：

第37話 ホンモノ

アスナに励まされ家を追い出された俺は宿に着いた頃椅子に座って物思いにふけていた。

俺がアスナに対して抱いてる感情はなんだ？

というか本当は分かかってる。ただ逃げてるだけだと。

こういう時は俺が好きすぎて間違って最終巻を二回買ってしまった某王道ラブコメ漫画の舞子センパイの言う事を聞いてみよう。

確か虹を見つけたとき自分に些細なことでも嬉しいことがあった時に真っ先に伝えたい相手だったか？

……………参ったな。橙色の髪の毛のおてんば娘しかうかんでこねえ。

俺は……………アスナに恋をしてるのだ。

俺がアスナに恋愛感情を抱いたのはいつだったのだろうか？

さつきアスナの家に行ったときか？それとも一緒に居るうちにか？はたまた一目惚れだったのか？恐らくは全てなのだろう。少しずつアスナへの気持ちを中心に確立させていったのだ。アスナの事を考えると心の中がアスナだけになる。中学時の時に折本に告白するときとか雪ノ下雪乃や由比ヶ浜結衣と話している時とは違う。

戸塚はこういうことが何度かはあったが……………

ともかく告白出来るならしたい。

逃げるんじゃないやなくて本物を見つけると誓ったからだ。

もし断られた時はその時だ。家に帰って一生分泣こう。

でももし付き合うことになった時に俺はアスナと一緒に居る権利はあるのか？

アスナは本心でああ言ってくれたんだろうが世間から見たら咎人だ。

そんな奴がアスナを守るのか？

心の中で告白したいという気持ちと付き合った時の不安が葛藤していつまでも答えが出ない。結局その夜はそのまま寝てしまった。

朝起きるとサウサーからメッセージが届いていた。

【演習では嫌な思いさせちゃって本当にごめんなさい。また会う時に改めて謝らせてもらうね。話は変わるけど10分以内に血盟騎士団本部前に集合で。シンルーを救いに行くわよ】

送られたのが何分だ？……………30分？マエ？あ？

遅刻だああああああああああああああああああ!!

急いで顔を洗って装備を整えるとドアのノックが鳴った。

サウサー「ハチマン!!」早くして!!」

ハチマン「ちよつと待つてろ!」

昨日ずっと脳を使っていたっせいか疲れが溜まっている気がしたがそんな事はお構いなしにとサウサーは俺の腕を引っ張っていくのだった。

〈同時刻〉

???
s i d e

クラディールの奴は死んだか。まああいつは煩かったし俺の愛しいハチマンに感謝しよう。それに今日ラフィン・コフィンの奴らがこの場所に集まるってリークしてあるからな。あの女の監禁場所と一致してるから絶対に来るだろうな。

そこをあいつらが逆に襲って殺し合い。
考えるだけでゾクゾクする。

さあ I t , s s h o w t i m e だ!!

第38話 最悪の結末

寝坊した俺はサウサーに鉄拳一発を入れられてからクラデイルの地図を元にダンジョンのような洞穴に来ていた。メンバーはとりあえず諜報部は全員と血盟騎士団の中でも有名なやつばかりだ。だいたい30人だろうか？

当然キリトもサチも居るし何故かクラインまでいる。まああいつのギルドは絶対生還ギルドとか言われてるもんな……

少しの間モンスターを倒しながら歩いていると急に開けて丸い形をした地面が現れた。

周りは崖でその間には下が見えないほどの穴がある。恐らく落ちたら即死だろう。

サウサー「あ!!」

サウサーが指さす方向には縄で手足を結ばれている20代程度の人がいた。

この人が恐らくシンルーさんだろう。

それにしても上手くいきすぎじゃないか？

何か罠があると見た俺は即座に索敵スキルを発動させる。

一応カンストしてるため何を使って隠れていようがだいたいは分かる。

………20人だ?!?このままじゃヤバイ!!

シンルー・ハチマン&キリト「罠よ! 『だ! 武器を構えろ!!』」

どうやらキリトも分かっていたようだ。

そんな俺たちの叫びに呼応するようにラフィン・コフィンの奴らが崖からこっちに飛び降りて剣を振りかざす。

殺らなきゃ殺られる…!!

誰もがそう考え見事なチームワークで二人の体力を一撃の所までに減らす。

だがここからが違っていた。

残りの一発を入れるのに躊躇っていた三人は殺すことを何とも思っていないラフィン

コフィンの二人の奴に殺されてしまった。

そしてその二人はサチとアスナに向かっていった。

ハチマン・キリト「間に合え……!!」

口から必死の言葉が搾り出る。

そして俺らは一人ずつラフィン・コフィンの奴を殺した。

昨日の光景が脳内にフラッシュバックするが今はそれどころではない。

俺が本当に守りたい……

俺の大切な人を守るためになら悪魔にだってなる。

キリトもそうだ。最愛のサチに殺人の罪を犯させまいと一人目を殺してからサチに近ずいてくる奴を2人は殺してる。

俺はその後は殺すことは無かったが戦いが終わった後俺とキリトはそのまま倒れこんでしまった。

シンルー救出作戦は互いに多数の死者が出るという最悪の事態となり後に【SAO内

最悪の事件」と称されるようになった。

朝目覚めると恐らくほぼ同時に起きたであろうキリトが周りを見渡していた。

するとキリトの体が突然震え始めて目からは光が消える。

俺もこんな感じだったのだろうか？

出来るなら俺が救ってやりたいが同じ咎人の俺にそんなことを言われても説得力皆無だ。ここはサチに任せるとして俺はアスナを呼ぼうと血盟騎士団の仮眠室から出るのだった。

第39層 焰月の進化

仮眠室から出て諜報部に入ると流石に昨日の事を受けてか皆いつものような活気はなかった。あのサウサーでさえそうだ。サウサーは誰も殺さなかった見たいだからな………

そこだけが救いだ。

俺も言い方は悪いが二回目で大切な女一人を救えたのだと思うとそこまで気持ちは重くならない。この罪を一生をもって償うと決めたからかもしれないが………

そのまま諜報部に居るのも落ち着かなかったためサチにキリトの所に行つて貰おうと団長室へと向かった。確かサチは副団長補佐だから居てもおかしくはないからな。

ドアを開けると案の定サチが居た。

それにアスナもヒースクリフも居る。

アスナ「ハチマン君大丈夫!？」

ハチマン「何がだ？」

アスナ「だって昨日………」

ハチマン「あの罪は一生を持って償うって決めたからな。それよりヤバイのはキリトだ。完全に様子がおかしい。目は俺より死んでるし殺人をしてしまつてサチに顔向け出来ないと言う様な類の言葉があるんだろう。今すぐ行つてやつてくれ。仮眠室に居るから」

サチ「ありがとうハチマン君。それじゃあ行つてくるね」

サチが部屋から出て行つていったのとほぼ同時にヒースクリフが口を開いた。

ヒースクリフ「突然だがキリト君が正気に戻つたら73層の攻略に行こうと思う。ハチマン君にはそこでユニークスキルを存分に使つてほしい」

ハチマン「別に行くのは行きますが貴方が居るなら別に使う必要がないのでは？」

ヒースクリフ「生憎私は事後処理に追われていてね…アスナ君とシンルー君も居るし大丈夫だろう。だが念には念をだ」

ハチマン「分かりました。それじゃあり修繕の為にリズベットの所に行つてきます。夜には戻つてくるので」

———
先日大鎌【焰月】の進化素材が集まった。

皮肉な事にクラディールともう一人の殺した奴がちょうど集まらなかつた激レアアイテムを持ったいたのだ。奪うのは気が引けるが使うものは使わせてもらう。

そのため今俺はリズベット武具店へと向かつている。

ドアを開けるとそこには客が5人ほどいて忙しそうなりズベットの姿があつた。

リズベット「いらつしやいま…セエエエエエエ!!??」

リズベットの声で回りが驚く。まあそりやあそうだろうな。

リズベット「ハチマン!!今混んでるから少し待つてて!!新しく作つた盾とかもあるから是非見てつて!!」

確かに全員が武器の強化に来てる様子で時間がかかりそうだったためリズベットの言う事を聞いて新入荷した盾を物色していた。

第40話 本当の最終奥義

人もだいぶ居なくなつたところでリズベットに大鎌を渡して進化させてもらった。

色は赤ベースのままだが赤の部分が減り代わりに持つところに稲妻が刻まれていた。

名前は「天あまほむらのいかずち焰雷」だそうだ。何か言いにくいな…

そして今俺は全速力で73層のボス部屋に向かつている。

めつちや飛ばしたが経緯を簡単に話すと

俺が夜に血盟騎士団本部に戻つた時キリトは見違えるほど強い眼をしていた。

まあサチに諭されて俺と同じ決意したんだらうな。

それでアスナによると明日の朝市出発だそうだ。

俺だけだと確実に寝坊するからキリトと同じ部屋で寝ることにした。

その時間いても無いのにサチとの馴れ初め話を3時間も聞かされてうざつたくなつたので全て音をシャットアウトして眠りについた。

次の日朝市でキリトに叩き起こされて俺は目が覚めないままボス戦へと向かつて

いった。

まだボスに行くまでのダンジョンはクリアされてないみたいで意外とめんどくさかったが俺とキリトはカンスト近いスキルだ。流星に雑魚MOB相手は全て一撃で倒した。

ボス部屋から歩いて2分近い広い空洞。俺たちはフォーメーションやタンク係の最終確認をしていた。

その時全員が異変に気づいた流星は選ばれた選抜パーティーだけはある。15人ほどだろうか?…

誰かがこちらに向かってくる。そして姿を現したのは……………

顔のごつい人だった。え?この人誰?

顔面強人「このダンジョンの地図を渡して貰いたい」

ハチマン「いいぞ」

アスナ「ちよつと!?!」

顔面強人「それでいい。私たちは君達市民を守るために戦っているのだからな」

こいつ血盟騎士団知らないの？

あれか。25層でめちやめちや被害出した軍の奴らか。名前忘れたけど。

顔面強人「それではさらばだ。お前ら！行くぞ！」

ハチマン「ふう……………めんどくせえ……………」

アスナ「渡してよかったの？」

ハチマン「どうせ町で配布するつもりだったからな。それに部下の奴らも疲れてしすぐにボス戦突入なんてしないだろ『ぎやああああ!!化け物だあ……!!!』……………前
言撤回。今すぐ行くぞ！」

そして今に至る。本当に何してくれてんだよ。

やつと着いた……………案の定ドアが開いてるな。

そして中に入った見て先ず初めに見てしまった光景は牛のような姿の蒼い怪物とそれに襲われているさっきの顔面強人の姿だった。

アスナ「やめてええ!!!」

そんなアスナの声も虚しく次々とポリゴン粒子となつて消えていく。

キリト「めろ……………止めろおおおお!!!」

早速キリトがダーククリパルサーを取り出して構える。

あの構えは……………【スターバーストストリーム】か。

確かにこれなら全損とはいかなくても半分程度は削れるだろう。

キリト「スターバースト……………ストリーム……………」

そう呟いてから大きく跳躍して双剣をモンスターに振りかざす。

そういうえばモンスターの名前はグリーンムアイズというらしい。グリーンムアイズと間

違えそうだ。

そんな話はいいとしてグリーンムアイズの体力がみるみるうちに減っていく。

ユニークスキルまじやべえな……………

周りもすげえざわついてて見とれてるしな。

だけど今しなきゃいけない行動は…

キリト「ぐっ!!」

あんだけの大技を放つたのだから当然長い硬直が起きる。

そこを俺は大きく跳ね上がり大鎌でキリトに攻撃しようとしているモンスターの手をぶつたぎる。

焰月の時とは段違いの性能だな…

このまま攻めつづけてもうやられるのが目に見えてるの為俺とキリトは皆の所まで戻る。

キリト「助かった」

ハチマン「体力半分まで削ったんだ。俺が助けるのは当然だ」

クライン「おめえらあれなんだよ!?!チートじゃねえか!」

クラインの言葉にみんなが頷く。そんなことは無いと思うんだが…

ハチマン「説明は後だ。次は正面にアスナと俺とキリトで行く。他の奴らは側面から攻撃してくれ」

皆「おう!」

俺の言葉に真っ先に反応して前に走っていったのはアスナだった。

俺は全総力で“飛んで”いた。そのおかげか物凄いスピードが出てアスナに振りかざされる前に止めることが出来た。

アスナ「ハチマン……………君？」

ハチマン「おいMOB。俺の大切なアスナに何してやがんだよ。そして俺は死神だ。死を司る神としてお前を……………殺す」

ハチマン【零の舞 麒麟之終焉】

この技は大鎌スキルの最終奥義だ。相変わらず変な名前だよな…何だよきりんのしゆうえんって。アホみたい……………

確かこの技は36連撃とかいうガチのチート技だ。名前変な癖に。その上硬直はスターバーストストリームと同じぐらいだ。

しかも飛べる。完全に俺TUEE状態だ。

35連撃に差し掛かったところで大鎌に雷が宿った。

その雷はまるで神話の麒麟のような形をしている。

もしかしてあのサスケがイタチに放ったあの技放てちゃう？めっちゃ憧れてたんだけど。

よく印とか結んでたな……………

※作者の実話です。

作者の黒歴史はいいとして結論から言うところかなりのチート技だった。

どうやら振りかざすだけで麒麟が取り付いて雷や電流を流していた。

こうしてモンスターはポリゴン粒子となつて消えて俺らは74層をクリアすることが出来た。

第41話 俺の二つ名

あああああああああああああああああああああ
!!!

恥ずかしいいいいいいいいい!!!

あんな大声で「間に合ええええええ!!!」なんて言うキャラじゃねえし
死を司るとか死神とかよくわかんないこと口走ってたしいいい!!

ぜってえアスナに嫌われたわ…

まあ聞いているのがアスナだけで助かったけど…

クライン「ハチマン!!」

ハチマン「!?!:急に耳元で叫ぶな」

クライン「だつてずっと呼び掛けてるのに全然届いてなかったからよ。それよりさつきのはなんだよ」

ハチマン「キリトから説明は受けたか？」

クライン「おう！両手剣だっけか？」

ハチマン「あれもユニークスキルで大鎌スキルって名前だ。何か羽生えたし姿も変わったけどな」

クライン「ほんとに何だよ…あんなんチートじゃねえか」

ハチマン「まあ一回に飛べるのは1分30秒でクールタイムは5分だ。ちゃんと制限もされてるからチートにはならんだろ」

キリト「まあ俺ら二人はユニークスキルを持つてたつてことで…俺もハチマンも疲れだから先に帰るぞ」

ハチマン「ありがとな。あのまま居たら質問攻めだったわ」

キリト「ああ。こちらこそ戦闘中ありがとな」ニヤニヤ

ハチマン「何ニヤついてんだ？」

キリト「お前…アスナの事好きだろ」

ハチマン「な!?別に好きじゃ／＼／」

キリト「だってお前ずっとアスナの事見てるしな。気持ち悪いぐらい
え?まじで?こんな目にアスナずっと見られてたの?

キリト「んで本題だけどはよ告れ」

ハチマン「ああ。告るのなら今度会った時にプロポーズするつもりだ。さっきのボス
と戦う前に決意したからな」

キリト「そんなピンピンに死亡フラグ立ててよく死ななかつたな…」

ハチマン「まあな。もう逃げないって決めたしな。けどよ…こんな手の汚れた俺がア
スナと付き合ってもいいのか?」

キリト「あのな…サチは俺の事を受け入れてくれたぞ。仮にお前らが付き合うとして
アスナが受け入れない訳無いだろうが。あとお前の元ギルドメンバーが全滅した事件

で『俺は大切な人を守れない』だなんて思うなよ。少なくとも俺とサチは守って守られる共生の関係だ」

ハチマン「よくそこまで俺の考えてることが分かるな……………さすがは親友か。まあありがとな。当たって砕けてくるわ」

キリト「砕けんよ……………それじゃあな」

初めて親友という言葉を使ってみたが悪い気はしない。
俺にとってキリトが“本物”だからか?……………

後日朝起きて外に出ると沢山の人からサインを求められた。

俺なんかした?え?

ピコッ

ん?キリトからのメッセージか。

キリト【多分お前は今俺と同じ状況だ。何でこうなってるかはこれを見てくれ】

新聞か？

「74層のボスは血盟騎士団に隠れていた二人のユニークスキル持ちにより撃破!! 彼らの名前は《黒の剣士》キリトと『灰紅の死神』ハチマンだ!!」

そう書かれて大きく写真が載っていた。キリトのはスターバーストストリームの時の。俺のは零の舞を使って死神の姿になつてるときの俺だ。

くそつたれが……………

っていうか何だよこの二つ名……………

エレンからの贈り物のコートの色と大鎌の色で灰と紅か？んであの姿で死神か…
サインや握手を求められてさすがにうざったらしい為死神の姿になつて空を飛ぶ。
こんな使い方もできるのか……………

特にすることがなかった俺は血盟騎士団本部に向かった。

第42話 ユニークスキル同士の決闘

ヒースクリフ「私と血盟騎士団が開催する公式の場で決闘をしてもらいたい」

ハチマン「は？」

は？心の声出ちやったよ。今俺はヒースクリフと二人きりで話している。

ハチマン「なんでそんなことを？」

ヒースクリフ「75層のボス戦に向けて資金を集めたい」

75層………S A Oの中で最も難しいとされるクォーターポイントだ。

ヒースクリフ「ユニークスキル持ちの戦いとなれば十分に人を集められる。それに私も君と戦ってみたかったしね。」

ハチマン「はあ………そうですか」

ヒースクリフ「納得してないという顔だね。それじゃあ君が勝った時はアスナ君と共に休暇を与えよう。二人で存分に休みを楽しみなさい」

ハチマン「な／／何でそうなるんですか？／／それに俺とアスナは付き合っ

せん／＼／

ヒースクリフ「はて？ そうだったのか。それでも君はアスナ君に恋をしている。その休暇を使って存分にアタックすればいい」

ハチマン「……………わかりました。でもキリトも道連れにします」

ヒースクリフ「はっはっはっ！ わかったよ。それじゃあ話は以上だ。かえっていいよ。大会は明日の午後5時からだ」

ハチマン「分かりました」

決めた。ヒースクリフとの戦いが終わったら告る。っていうか告るなんて昔の俺なら考えなかつただろうな。振られるから。振られて家帰って1時間はベッドに潜ってる。

俺の悲しい心情は置いといて正直ヒースクリフには勝てる気がしない。まだまだ鍛

えればそれなりに戦えるだろうがそんな期間は無い。

ということでは今日はアスナとはなるべく関わらないようにしよう。

下手したら不意に気持ちが出ちまう可能性もある。

話しかけられても最低限の事しか返さねえ。

うん決めた。

ってそんなこと言ったらアスナじゃねえか……………

アスナ side

ハチマン君と団長が決闘かあ…面倒ごとにならなきやいいけど…

それよりハチマン君鈍感すぎない？

昔少しだけ読んだラノベの主人公より鈍感じゃない？

会うたびに告白しようっ！とは思ってるんだけどいざ前に立つと

サチはキリト君とイチヤイチャしまくってて夜の話とかされるし

確かにハチマン君とそういう事する妄想はたまにするけど／／／

それにサウサーもいるしなあ……………

サウサーがハチマン君のリアルの知り合いとは聞いているんだけど

どんな関係だったかまでは聞いてないんだよね……………

それよりハチマン君好きな人っているのかな？

前にキリト君に聞いたら何か誤魔化されちゃったし……………

あ！ハチマン君だ！話終わったのかな？

アスナ「お疲れ！話終わったの？」ニギツ！

ええと……………『どつきゅん！男の子を墜とす100のテクニク 大人

の魅惑編』通りだと手を握って上目遣い？こうかな？

ハチマン「っ！／／／……………終わった。明日は大会だからな。もう宿

に戻る」

アスナ「あ！待って！……………」

……………もしかしてハチマン君こういうの好きじゃなかったのかな？

ハチマン君に嫌われちゃった？……………

そんなの嫌だよお
お願いだから嫌いにならないでえ!!!

今後の流れについて～読者様によって話が変わります～

質問1 葉山をどうしたいですか？

どうでもいいですが作者は個人的に葉山が嫌いなのです。

なのでこの質問を設けました。

1. 葉山最初から味方。
2. 葉山敵。救済あり。(GGOにでも出そうかと思つてます。)
3. 葉山敵。救済無し。

質問2 ユウキをどうしたいですか？

作者はユウキが大好きです。

なのでこの質問を設けました。

1. 原作通り死亡。
2. 生存IFルート
3. その他(コメントでお願いします)

質問 3. アリシゼーション書いてもらいたいですか？

1. 当たり前だろ。
2. 別に要らねえよ
3. オリジナルストーリー希望

質問 4 オリジナルキャラ要ります？

どどここの編のどこにどのようなキャラを出して欲しいなどがあればコメントで。

質問 5 更新頻度

1. このままでいいYO！
2. もっと上げろよ。

質問6 ユイちゃん出してほしいですか？

ユイちゃん居ない場合はオリジナルAI作るつもりです。

1. 出すに決まってるだろ。
2. ー要らないっ！w
3. 出してもいいけどつくのはキリト達の方で！

— —
以上です。番号で答えてくれてもいいですが普通に何々をどうしてほしいとかでもいいです。これをコピペして回答した番号以外を消してメッセージに張り付けてくれると一番ありがたいです。

全ての質問に答える必要はありません。

ただ答えてくれないと小説進まないの強制とまでは行きませんがなるべくたくさんの方に答えてもらいたいです。

どうでもいいですが1000文字いかないのがので宣伝です。

私のもう一つの作品を知ってる方はいるでしょうか？

いろは「先輩との結婚生活っ!!」というタイトルです。

純粹な俺ガイル小説でハチマン×いろはです。

オリキャラで二人の子供や奉仕部メンバーの子供たちも出てきます。

この作品よりかなり評判はいいのでいろは好き、俺ガイル好きの方は是非読んでってください！後この作品もよろしくね!!!!

後23文字…何で埋めようか…

そういえば皆さ…↑1000文字目

第43話 欺瞞の關係

大会30分前。じゃんけんで俺が勝つたので後にやる事になった。
まあやるからには勝ちたいからな。まずはヒースクリフの戦いを見る。

キリト「はあ………何で俺がハチマンの戦いに巻き込まれなきゃいけないんだよ……」

ハチマン「悪いな。そういえばもしお前が勝てばサチと一緒に休暇を与えるって言うてたぞ」

嘘です。本当は言ってます。

まあヒースクリフの事だからそれぐらいはしてくれるだろう。

キリト「まじかよ。絶対勝つわ。それじゃ行ってくる」ガチャ

それじゃ俺も見に行くか。

サウサー「ハチマンーいるー？」

ハチマン「久しぶりだな」

そういえばラフィンコフィンの事とかボス攻略で全然話してなかったな。

サウサー「そのハチマン？二つ言いたいことがあるの。私の気持ち聞いてくれる？」

ハチマン「…」

まあ顔を紅潮させているあたりだいたい察せる。

俺はいつからラノベの主人公になったんだよ…

サウサー「そのハチマン？私………ハチマンの事大嫌い!!」

ハチマン「は？」

え？気持ちってそれ？勝手に俺モテてるのか思ってたの？恥ずかしくて死にそうなんだけど。

俺の黒歴史ファイル98に入ったな。っていうか98もあるのか。

サウサー「ちよつと前までは少し好きだった。正直かなり惹かれてたよ。でもハチマンの視線で分かっちゃった。ハチマンが見てるのは私じゃないな

………って。だからハチマンとは親友の関係がいいな」

サウサー……………相模南は逃げた。

けどその選択肢を選ぶことは間違っていない。今までの関係が壊れるぐらいならいつそのままの方が…と思う人は少なくないだろう。だが俺はその選択肢は勧めない。俺自身が逃げて……………

逃げたところで何も無いことを知っているからだ。

ただの欺瞞だらけの関係。そんなものは到底“本物”とは言えない。

まあ俺が口を出せるわけではない。俺がそれを決める権利はない。

ハチマン「お前がそれを望むなら……………俺はそれに従う」

サウサー「ありがとう。それじゃあじゃあね！私家に帰るから！」

ハチマン「ちよっ……………」

作り笑いを浮かべるサウサーを止めようと言いかけた所で俺はやめた。止めたところでどうする？あいつは逃げの選択肢を選んだ。それを止めるのはサウサーの選んだ事を全否定する事と同じだ。

そんなものはサウサーへの侮辱だ。

しかし俺は少し後悔してしまった。
去り際のサウサーの顔に瞳の中に涙が浮かんでいるような気がしたから。

第44話 ヒースクリフの正体

サウサーには悪いことしちゃったかもな……………

そんなことを考えながら観戦席に座ると既に試合は始まっていた。

まさかの優勢なのはキリトだ。

前よりも格段に剣の腕が上がっているからかヒースクリフも完璧に守れていない。

ヒースクリフの体力は残り僅かで半分に到達する。

そうすればキリトの勝利だ。

キリトがああ技の体制に入った。スターバーストストリームだ。

1、2、3連撃と目にも止まらぬ速さで攻撃をしていく。

14、15……………ここでヒースクリフの体力が拳一発でも半分になっ

てしまう程の体力になった。

16連撃目。ヒースクリフは体制を崩している。

このままなら完璧に攻撃が入ってキリトの勝利

.....

のはずだった。その瞬間ヒースクリフは体制を立て直したのだ。そのせいでキリトは16連撃目が決まらずスキル後の硬直の間に倒されてしまった。

恐ろしく早い体制直し。俺でなきや見逃しちゃうね。とかいつてる場合ではない。

あの状態から体制を立て直すのはゲームのシステムの的に無理だ。

まさか新しいユニークスキルか？

嫌、それは無いだろう。基本このゲームは平等に作られている。

一人にユニークスキルが2個なんて事はしないはずだ。

と考えると.....

GM権限、システムアシストなどの類だ。

確かにヒースクリフは前からおかしいところがあった。

大鎌スキルを見ても驚かなかった……………

つまりそれはあらかじめ知っていた事を示している。

要するにヒースクリフは茅場昌彦だ。

ならヒースクリフの伝説も分かる。

体力を半分切ったことが無いというのはシステムアシストで設定しているから。

この結論に至った俺は戦慄してしまった。

最大の味方であるSAO最強の勇者が最大の敵であるSAO創生者と知ってしまったからだ。

キリトの顔を見るとまだ思考中のようだ。

まあすぐに答えが出るだろう。

となると俺がすべきことは……………

—————

ハチマン・キリト「ヒースクリフ」

俺とキリトはキリトが戻ってきたときにヒースクリフが萱場昌彦だと同じ意見だった。

そこで俺たちはヒースクリフにある提案をするためにヒースクリフの元へと向かった。

ヒースクリフ「やあ、ハチマン君にキリト君。どうしたのかね？」

ハチマン「とぼけんな茅場昌彦。こっちは交渉をしに来たんだ」

ヒースクリフ「……………やはりさっきの戦いで分かってしまったか。ついキリト君の攻撃を防ぐために不正をしてしまった。謝るよ」

キリト「そんなことはいいんだ。こっちの提案を聞けないならお前の正体をばらす」

ヒースクリフ「分かった。それで交渉とは何かね？ S A O から全員を解放しろなんて言わないでくれよ？」

キリト「そんなことは分かっている。今度の75層で俺たちが生きていたらそこで決戦

をしろ。勿論チートは無しだ」

ヒースクリフ「良いだろう。私とI V S Iで戦うのかね？それは少し私が不利じゃないか？」

ハチマン「もう一人ぐらい協力者がいるはずだ。いくら管理をAIに任せていてもさすがに人がいないと無理だろうからな。」

ヒースクリフ「流石はハチマン君だ。その洞察力は恐ろしいよ彼女も向かわせよう」
なるほど……協力者は女か。

ハチマン「そりやどうも。そこで今から闘う大会はあくまで大会。これで決着は無しだ。当然チートも使っていない」

ヒースクリフ「嫌、今回ばかりは使わない。キリト君には使ってしまったが、；、それはこの会話は三人だけの秘密だ。くれぐれも私が茅場晶彦だとバラさないように。もしバラしたらその時点で君達はこの世界から消えるようにプログラムしておくからね」

キリト「茅場さん。貴方は何故この世界を作った」

ヒースクリフ「何でだろうね。強いて言うなら……子供の頃に描いていた世界を作りたかったからかも知れないね。」

キリト「そうか……それじゃあ失礼する」

俺らはヒースクリフが茅場だと再確認した為少し落ち着かないまま部屋へと戻った。

って言うか俺ってこれから茅場とタイマンすんの？

何の罰ゲーム？

第45話 二人の思惑

結果から言おう。

まさかの俺が勝ってしまった。

やはりヒースクリフの完全防御も俺の死神姿からの零の舞は守る事が出来なかったらしくシステムアシストも使っていない為何とか体力を半分まで削れることが出来た。

というかヒースクリフシステムアシスト無しでも強くな？

たまたまヒースクリフのカウンターを全部勘で防げたけど俺もかなり危なかったよ？後一撃食らってたら確実に負けてた。

キリトが「俺もシステムアシストが無ければ今頃サチと…」とか言ってるがそんなものは知らない。

休暇を手にしたのは俺だ。やっぱり社畜に何てなりたくないな。血盟騎士団にいて身に染みて感じた。

そんな事を思っていた矢先ヒースクリフがまさかの発言を大会後に言ってしまった。

ヒースクリフ「今を持って血盟騎士団の団長をハチマン君とする。勿論私も在籍はするが基本は裏方だ。これからはハチマン君を団長と呼ぶように」

あの野郎………まさか最初から俺を団長にさせるつもりだったのか？

そうすれば自由な時間が増えて最終決戦に向けての準備が出来るからな。

わざと負けたのか………

ヒースクリフ「だが大会の前にハチマン君に休暇を与える約束をしている。休暇が終わるまでは私が団長だ」

ほんとヒースクリフさん神。この世界を作ったとは思えないほど仏の様な心だわ。

それで俺がすることは………

アスナへの告白か………

アスナの態度を見る限り自意識過剰でなければアスナも俺に少なからず好感を抱いてると思うんだが………

まあその自意識過剰で中学の時失敗しちゃったからな………

まあ当たって見るだけ当たってそれでダメならその時だな。

アスナ side

ハチマン君かつこよかったなあ…まさか団長に勝っちゃうとは…
それよりも団長の発言の方が驚いたけど…

あれ？でもハチマン君が団長なら副団長の私が一緒に居られる？

それでそのまま愛し合って結婚してゆくゆくは子供を…

って何想像しちやってるのよ！／＼はあ…すっかり乙女になっちゃってる。

現実では誰かと付き合うことはあっても相手の下心全開ですぐ別れちゃったりした
からこんなに人を好きになる経験なんてなかったからかなあ…

ヒースクリフ「アスナ君？」

アスナ「ひゃい?!?!」

危ない危ない…

自分の世界にのめり込んでた…

ヒースクリフ「やつと戻ってきたかい？アスナ君にも休暇を与える。この休暇でハチマン君にアタックしなさい」

アスナ「な……………／／はっはい!!!」
「精一杯否定しようとしたのに流れで頷いちやっただよ…／／
もうこうなったらやけくそ!!無理矢理にでもアタックしなきゃ!!
まずはハチマン君を家に誘わないと!!」

第46話 こうして比企谷八幡はSAOで本物を知る。

アスナ「ハチマン君っ
!!!!」

ハチマン「ん? ってうわあ!」

あーやつちやつたっ! 勢いつきすぎてそのまま突撃するとは思わなかったなあ。

ハチマン「いきなり突っ込んでくるな! そんなで何か用か? すごい急いでみたいだが」

アスナ「そのことなんだけど今日私の家に泊まって! 分かった!」

あゝ!! 何か無理矢理に誘っちゃった……………!!

ハチマン「んな!?! / 突然どうしたんだよ!!」

アスナ「良いから泊まって!! 早くいくよ! せっかくの休暇なんだから!!!」

ハチマン「分かった!!分かったから引つ張るな!!!」

ハチマン side

いきなり家に誘われるとかやべえだろ：

ハチマン貞操の危機？奪われるんだったらアスナがいいわ。

そんな事を言っている場合ではない。

俺は今日アスナに告白をするんだ。

どんな言葉がいいか今の所自称高スペックな頭で1000通りは考えたがいまいち
思い浮かばない。

鉄棒で懸垂したら告白受けてくれるのかな？

西野さんほんと最高。

ちなみの俺は東城さんが一番好きです。

つていうかこの作品でヒロインの名字に全部東西南北が入っててその中心に居るっ
て意味で名字が真中なんだってな。

そんな豆知識を頭の中で披露しているとアスナの家に着いた。

これで来るのは二回目だが恋愛感情を持っていてる時と持っていなかった時ではだいぶ違う。

全然落ち着かない。これでもかかっていう程落ち着かない。

アスナ「今日はS級食材のラグーラビットを使ったシチューだよ！滅多に現れないんだから!!」

どうせならマツ缶がS級食材だったらなどと思ったがそんな事を口走ったら冗談抜きでぶん殴られそうなので言うことは無かったがいぎシチューを食べているとそんな考えは全てはじけ飛んだ。

ハチマン「旨え……………なんだこれ」

アスナ「でしょ!!」

ハチマン「さすがは料理スキルカンストだ。ご馳走様でした」

アスナ「お粗末様です！それじゃあ先にお風呂入ってね！私皿洗っておくから！」

「自分も洗おうかと言いだそうかと思ったが一度決めたら覆さないおてんば娘がアスナなので何も言わず風呂に入る事にした。
はあ……どのタイミングで切り出そう……」

—————

風呂から上がるとソファで丸くなってアスナがモジモジしていた。
何あれ可愛い。保護欲掻き立てられるわ。

ハチマン「アスナー？風呂出たぞ？」

アスナ「……………ヴェ!?ハチマン君風呂出たの!?私入って来るね!」

ハチマン「馬鹿!!ここで脱ぐな!」

アスナ「え?……………ハチマン君のド変態!!」

ハチマン（酔っ払いかよ……………）

そこで俺の意識は途絶えてしまった。

アスナ「aチマン君！」

ハチマン「ん？今何時だ？」

時計を見ると30分ほどしかたっていないかった。

今の時間は22時30分。もうアスナも寝る時間だろう。

切り出すなら今だな……………

ハチマン「アスナ……………話がある。寝室で話していいか？」

アスナ「分かった……………もう来ていいよ」

く移動中く

アスナ「それで話って？」

ハチマン「君の瞳にライジングサン!!!」

アスナ「へ？」

やべ……………つい政宗君レベルのイケメンしか使う事の許されない禁忌の言葉を言っちゃったよ！

つていうか心臓の鼓動がやべえ……………

中学の頃に告白したのとはてんで大違いだな。

やっぱり本気で恋をするってうのはこういう事なのか？

ハチマン「待て。今の無しだ。それで話させてもらうが俺は現実世界では小中とずつとぼっちだった。ぼっちって言うのは読んで字の如くだ。中学の時には告白しただけでクラスに広まりいじめられて何度も死のうとした。でもそんな俺に高1の時に二人の奴に出会ったんだ。そいつらと一年間過ごして俺は“本物”を探すようになった。上辺だけの欺瞞の関係では無い“本物”をな。そんな俺はこのSAOに巻き込まれた。そこで俺がギルドに入って本物が見つかるうとした時……………もう分かっているだろ？」

アスナ「……………」

アスナは何も言うことなくただ頷いた。

ハチマン「続けるぞ？そこで俺にとつての本物：エレンは死んだ。そこで俺は全てを諦めた。このクソみたいな世界に希望なんてないってな。でもそこで俺に手を差し伸べてくれたキリトにクライイン。そしてその中で一番助けられたのはアスナだ」

アスナ「っ！」

ハチマン「お前の家に行つて諭されてから俺はまた“本物”が欲しいって思えたんだよ。それで俺にとつて一番大切な本物はお前だ。アスナ、好きだ。俺と付き合つてくれ」

アスナ「私は暴力女なんだよ？」

ハチマン「それがお目の取り柄だろ」

アスナ「サウサーとか他に私より素敵な人がいるのにな？」

ハチマン「俺に告つて来た人は全員振つてきた。お前しかいないんだよ」

アスナ「そんなこと言われたら断れないよ……………」

私も好きです。付き合ってください」

こうしてこの夜。

比企谷八幡はSAOで本物を手に入れた。

第47話 やはりアスナは小悪魔だった。

はあああああ……………

やつと言えたしまさかのまさかで両想いだったとはな……………

俺にこんな青春が来ていいのか？

青春とは嘘であり、悪である。

とか書いてた頃が懐かしいぜ……………

そういうえば付き合うってことは……………

「えつと……………アスナ？付き合うってことは俺と結婚してくれるのか？」

「うえ！／＼／＼まだ結婚なんて早いよ！でも将来は子供2人は欲しいな！男の子と女の子！それでえつとえつと……………／＼／＼」

「落ち着け。結婚っていうのはSAO内での結婚だ」

このSAOには3つの人間関係が制度にある。

一つ目はフレンド。相手の場所や連絡が分かる程度の関係。

二つ目はギルド、またはパーティー。

お互いの名前やHPが見える様になりフレンドより親密な関係。

そして最後は結婚だ。

これはグリムロックとグリセルダさんもしていた。

相手と自分のアイテムストレージやお金などは全て共通になる。

隠し事などは勿論。お互いの信頼関係がコストしていないと作る事の出来ない関係。

「え？最初からそのつもりだよ？」

「え？お前はいいのか？ストレージ共有だぞ？」

「別に隠し事なんて無いし。ハチマン君モ無いヨネ？」

こっわ!!アスノ下さんかよ!口元笑つても目が笑つてないぞ!!
こんな時は……………

「当たり前だろ。俺の世界で一番大事で愛してるアスノに隠し事なんてしない。それじゃあ送るな?」

「世界で一番愛してるって:~/~/」

なるほどね。アスノさんはこういう愛の文句系に弱いと。

これで遊ぶつもりはないが逃げるときの一手法として覚えておこう。

そんなことはさておき送るとは結婚のメッセージだ。

デュエルと同じようにメッセージを送って相手が認証するだけで結婚という一種の束縛の関係が作られてしまう。まあ俺は束縛なんて思わないけどな。

もうちよつと教会に行つて結婚式を上げるとかムードがあつてもいいとは思うんだけどなあ……………

「分かった!ぽちつとな!これで良しと!これで私とハチマン君は結婚した……………んだよね~/~/」

改めて言われるとかなり恥ずかしい。

というか恥ずかしいといえばアスナと付き合えたという興奮で忘れていたが告白の時のセリフが過去最大級の黒歴史だった気がする。

まあアスナも覚えてないだろう。

「まあ…そうだな／＼／」

「それじゃあ…／＼／」

「?…って何下着になってるんだよ!!」

「だってその恋人同士がすることっていったら…」

「そんな告っていきなりはしなくても…」

「あのね!!女子にだって性欲はあるの!!私だって処女なんだから少し怖いんだからね!!」

アスナさん凄いこと口走ってるなあ…

あ。自分の言ったこと思い出してモジモジしてる。

本当に可愛いな。

「それは分かったが出来るのか？システムの的に」

「前にサチから聞いたの。何か設定の奥の方にある倫理コードどーのこうのって奴を切ったら出来るようになるんだって」

「それでもゴムは…必要ないか」

一応仮想世界なのだから中に出したところで子供などが生まれるわけではない。

っていうかいつの間にか裸になってるしな…

意外と胸でかいんだな…由比ヶ浜程は無いがそれでも十分にでかい。

「今他の女の事考えてたよね？私の胸見て」

「滅相もいけません!!」

こっわ!!本日二度目だけど怖いわ!!

何で心読めるんだよ!!

「それならいいけど…」

突然いつもの無邪気さが無くなり大人の笑みへと変わった彼女は箏一言置いてから

…

「それじゃあハチマン君…私の純潔を貰って?」

その小悪魔的な妖艶な誘いに俺は耐えきる事ができず

俺自身も裸になり

そのまま俺はアスナの入っているベッドへと入り濃厚な接吻をそのまま交わした。

第48話 結婚報告

朝起きると隣には一糸纏わぬ姿のアスナが俺の腕に抱きついて寝て居た。

結局昨日は3回もやつちまつたんだよな……ほんとに猿かよ……

取り敢えずこれからどうしようか？

取り敢えず俺の告白のきっかけを与えてくれたキリトに報告しなきゃな……

「んっ……」

「起きたか。昨日は疲れだろうに。まだ寝ても良いぞ。朝飯は俺が作っておく」

「大丈夫。ハチマン君ちゃんとわたしが痛がつてたら辞めてくれたし優しく愛してくれ
たから。それじゃあご飯作ってくるね！」

「おい！取り敢えず服を着ろ！」

「そんなの行つてから着るよ。ハチマン君になら見られても良いし」

いや、俺の理性が持ちません……

あんな良いスタイルして現実世界ではモデルでもやってんのか？

「そうだ！その前に……！」

チユツ……

突然アスナが俺の頬にキスをしてきたのだ。

「おはようのキスだよ！それじゃあハチマン君も早く服着てこっち来てね！」
全く・俺はアスナには敵わないな……

朝食を食べた後俺らは知り合いの元へと向かって結婚の報告をしに行った。

キリトとサチには

「よかったなハチマン!!互いに幸せにやっこうぜ」

「おめでとうー!これからお互い頑張ろうね!」

と言われ

リズベツトには

「そう……………二人とも幸せにね!でも私まだハチマンの事好きだから隙があつたらどンドン外堀から埋めていくから覚悟しなさいよ!!」

と言われ……………

っていうか何言ってるんだよ……………

アスナなんか軽く発叫してリズとにらみ合ってたぞ……………

それはさておき

クラインとエギルには

「ハチマン!!おめえだけはリア充にはならねえつて信じてたのによお!!」

「良かったじゃないかハチマン。俺も早くカミさんと会いたいぜ
.....」

と言われ

ヒースクリフこと茅場には

「おめでとう。これからは二人で血盟騎士団を支えてくれたまえ」

と言われた。

諜報部にも報告に行こうと思ったがどうせ血盟騎士団の中では時期に広まっていく
しなによりサウサーが居るので報告をするには少し気が引けてしまった。

そんな中アスナはサウサーと話したいことがあると行ってどっかに行ってしまった
が.....

頼むから修羅場るんじゃねぞ.....

その後俺一人で回ったのは二人で同棲する家探した。

アスナの家で住むには少し小さすぎる。

何より金があまりに余って余りまくってる。

多分ある程度でかい家を買っても全然余裕があるだろう。

ということであんな候補の20件ほど探して22層のログハウスに決めた。

ここなら周りの音も静かだな。

しかし勝手に独断で決めるわけにも行かない為

俺は血盟騎士団へと戻ってアスナを待つことにした。

第49話 サウサーの宣戦布告

アスナside

ハチマン君はやる事があるって行って行っちゃった！

まさか浮気……まあハチマンくんはそんな事しないだろうけど！
それはさておき今私はサウサーを探している。

ハチマン君に話を聞いたところサウサーは振られるのが分かっていたから最初から親友のままにいるという逃げの手段を取ったみたい。

リズムみたいに諦めない相手もいるのに……………

何より本物を求めていたハチマン君に逃げて欺瞞の関係を保ち続けるというのはハチマン君への侮辱だと思う。

「サウサー〜居る？」

「居るよ……………おめでどう！団長から聞いたよ！結婚したんだってね！
何かプレゼントとか上げた方が『それでいいの？』え？」

「それでいいのって聞いているの。告って振られたからって逃げたんでしょ」

「アスナに何が分かるのよ!!ハチマンと付き合ってる勝者が敗者の気持ち分かるの!?!」

「私には振られた側の気持ちなんて分からない。けど私の親友もハチマン君に告白して振られたけどめげずに私に挑戦めしてきた。いつか必ずハチマン君を奪ってやる!」

「そう少し置いてから」

「何より逃げて親友のままでもいいだなんて所詮偽物の関係だよな?そんなの本物を探し続けてきたハチマン君への侮辱だと思わないの!?!」

「つい苛立ち大きい声を出してしまおうと」

「気付いた時にはサウサーの頬に涙が流れていた。」

「私だって……………諦めたくないよお!!でもハチマンが誰を視ているのかは分

かかってたし……それに昔私は……」

「そんなの遠慮しないでよ」

思つてたより低い声が出てしまった。

「ハチマン君は昔の事は気にするなつて言つてたでしょ？それに損なので遠慮するのは辞めて。私はサウサーと対等に戦いたいの。今は私が一歩リードしてるだけでしょ？」

「本当にいいの？私なんかが……？」

「私も本物を見てみたくなつたの。対等に闘える”ライバル”をね」

「そこまで言うならやつてやるわよ。後で取られて泣き喚いても知らないからね！」

「やつと元気になつたね！負けるつもりなんてないし一歩リードしてるのはわ・た・し

！」

「そんなん関係ないし！それじゃあ改めてハチマンの所行つて宣戦布告してくるね」

！」

私のハチマン君を取ろうとする2人の親友。

そしてライバル。

本来なら自分の彼氏が取られるなんて言うのは嫌なはずだが

自分がハチマン君を信じているのもあるだろうが私にとつての

”本物”である2人と競うのは不思議と悪い気持ちになる事は無かった。

第50話 アスナの正体

「ハチマン！私は比企谷の事が好き！アスナと付き合ってるのは分かるけどバンバン攻めてくからね！それじゃあ！」

「は!?お前この間大嫌いって…行きやがったか」

「サウサー!!ってハチマン君!もしかしてサウサーに告白された?」

「お、おう。その通りなんだが…まさかお前が?」

「うん!サウサー私に気を使って逃げるつもりだったから活を入れてあげたの。これからリズも入れて三人ライバルね!」

「面倒くさい事しやがって……………まあ俺はアスナへの思いを変えるつもりはないけどな」

「ハチマン君って結構あざといよね／＼／」

「は?俺は全然あざとくねえよ。あざとさなら一色の方が上だ」

「ハチマン君？一色ツテダレ？」

やばい……………完全に言動をミスった。

無理やり誤魔化すか……………

「俺の現実での後輩だよ。それより新居買うぞ。場所は一応決めたけどアスナの意見も聞きたいからな。取り敢えず向かおう」

「むう…すごい誤魔化されたけどまあいいよ。それより行こ！ハチマン君死神になって乗せて！」

「へいへいかしこまりましたアスナお嬢様」

「(イイ)だ」

「22層かくー！ここ良いね！周りも静かだし！良しここに決めた！それじゃあここに手を合わせよ！」

アスナに気に入ってもらえて良かった：

これでセンス無いか言われたら自殺するまでである。

「これでいいのか？」

「良し!!これでこの家は私たちの家になったね！」

見た感じ中はかなり広い。

ダブルベッドもあるし生活に必要な家具は予めすべて置いてあるようだ。

「私こんぐらい狭い家がちょうどいいんだよね！だから前の家もあのぐらいの広さだったんだ！」

は？今この子この家狭いって言った？

「アスナさん？君本当にお嬢様なの？」

「うーん。お嬢様と言えばお嬢様かな。千葉県の中でも雪ノ下家とか高田家とかより地位は上だし……」

え？あの雪ノ下家の上なの？

それで高田家は確か何かの自営業で日本no1に輝いたところだよね？

それより上つてことはアスナつて……

「もしかして結城家か？」

前に雪ノ下に聞いた事がある。

あの雪ノ下さんでさえ下手に出る家系が千葉にあると。

「よく知ってたね……でも結城家の一人娘だからお見合いが凄く多かったんだ……でもハチマン君の事は絶対に納得させて見せるからね！」

「当たり前だろ。もし結婚できなかつたら裁判まで発展させるつもりまである」

「それはやりすぎじゃないかな……」

「そうか？まあそんな辛気臭い話は後にして取り敢えずここの周りを見に行こうぜ。さつきバカでかい池とかもあつたし」

「うん！それじゃあレッツゴー！」

第51話 刺身には醤油が一番！

俺らの家から徒歩数分歩いた所に先ほど見つけたバカでかい池があった。見たところ釣り場になっているようだ。

数人おっさんが居るしな。

釣りか……………前に一回やって一時期ハマってたんだよな。連れ？勿論一人でだぞ。

ちよつとやってみたいがアスナはどうだか……………

「なあアスナ。釣りって好きか？」

「うーん…経験無いから一回やってみたいとは思ったことあるけど…」

「そんじゃあそこのおっさんに貸してもらおうぜ。凶々しいのもダメだから貸していただけますか程度でな」

「分かってるよ！」

「すみません。釣りをしてみたいのですが…」

「ん？それなら私の釣り具を貸すよ……………つて攻略組の長様!」

「え？何でそんな呼び名……………」

「君！今日の新聞の一面に載ってた人だよね！ほら！」

「公式大会でヒースクリフ敗北！それに伴いヒースクリフが団長辞退宣言！新団長は今回ヒースクリフに勝ったあの『灰紅の死神』ハチマン！」

「なんで漏れてんの？しかも写真がめっちゃドヤ顔だよ。目が腐ってドヤ顔かよ。あれ？でも目の腐りが減った気が…」

「そんな事は良いとして本当にどこから漏れた？」

「セキュリティガバガバな訳ないしな…」

「情報提供者：ハッチーが大好きな鼠のお姉さん」



第52話 池の主

「ああ、美味しかった。まさか本当に醤油があるとはね。ご馳走様でした」

俺らの場合だとこの魚がめちやくちや旨かった。

やっぱ新鮮度が高いと旨味も変わるんだな。

「お粗末様です。良かったら貰ってください。たくさんあるので」

「いいのかい？それじゃあ遠慮なく。それで釣りがしたいんだよね？私の道具貸すよ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます！やったねハチマン君！」

「本当に仲良しだね。それじゃあ早速行こうか」

「つと… これでもいいんですよね？」

「うん。それじゃあやっていいよ」

釣り何てマジで久しぶりだな…

「そういえばニシダさんって現実でも釣りをされてたんですか？」

「おいアスナ。現実の事を聞くのはプライバシー的にダメって前言ったろ」

「あ… ごめんなさい」

「別にいいよ。私現実ではゲーム制作会社の裏側で働いてたんだ。プログラマーって奴だね。それだから現実では釣りなんてほとんどした事なかったよ」

「始めたのはこのSAOからだね。老いぼれが攻略に参加できないって言うのとかこの世界の池とか海に魅了されたんだ。でもこうして釣りが出来るのも後何ヶ月… 何年なのかねえ… クリアされなくても病院で最低限の養分を取ってるだけであっていつかはしんでしまうだろうし…」

確かにそうだ。

恐らく皆は後1年は確実にかかるだろうと思ってるだろう。

だが俺とキリトは違う。

必ずこの1ヶ月以内にこの世界を終わらせる。

大切なものを守る為に。

「チマン君；、ハチマン君！竿！すごい引つ張ってる！」
「ん？つてうわあ!？」

竿が凄い勢いで引つ張られる。

生憎筋力はカンストなので池に落ちる事は無いがそれでもかなり引き摺られる。何だこいつ!？」

「まさかこいつは…主!？」

「何ですかそれ!？」

「この池で前から噂されていた怪物だよ！まさか本当に居たとわ…」

くっそ…なんだよ主って…

引つ張るしかねえな！

取り敢えず大きく下がって…

「ハアアアアア!!!」

釣り上げると青空に浮かび上がったのは…

「でつけええええええ?!?!？」

何だよこの化け物!?!マジでやばいって！つべーよ！

潰されるべー！

「皆下がって!!ハチマン君が何とかしてくれるから!!」

取り敢えず落ち着いて鎌を取り出して……よし。

【大廻刈】

このスキルは名前の通り

鎌を大きく廻して刈る。そういう技だ。

取り敢えずタイミングを合わせて…

「これでどうだあああ!!」

上を見上げるとそこには真つ二つの化け物がポリゴン粒子となって消えていく姿があった。

「「わああああ!!!」」

「ハチマン君!すごいよ!!」

「まさかあれを切るとはね… 恐れ入ったよ」

ふう… 疲れた…

取り敢えず疲れたから地面に寝そべるか…

ドスンッ！

いつてええ!!!突然何だよ！

何か落として来たのか？

俺の上を見ると・・・

そこには俺と同年代ぐらいの女の子がほぼ全裸で俺の上に倒れて居た。

アスナさん？その目はやめようね？

第53話 JKはAI

俺の上に落ちてきた少女は銀髪で瞳は碧眼。

そして思わず見惚れてしまう見事なスタイル。

うん。完璧だね。

そしてアスナさん。その目は本当にやめて？あ

周りの皆さん凍りついてるから。

アスナさんユニークスキルで【絶対零度】とか手に入れちゃった感じ？

「ん… あれれー？ここどこだー？君はだれ？」

「こつちのセリフだ。お前は化け物みたいな魚の中から出て来たんだよ」

「へー。あつ！思い出した！そう言えばシステムのバグで外に出されたんだよねー！ユ

イユイは大丈夫かなー？」

…… こいつ今なんて言った？

システムのバグ？

こいつはこのSAOにログインした人間じゃないのか？

取り敢えず聞きたいことが沢山出来たな。

「おい。取り敢えずお前を俺の家に連れてく。アスナも早く行くぞ」

これ以上彼女の身が晒されているのも可哀想だからな。死神の姿になって彼女を羽で隠すようにしてアスナも家に連れてくか。

「そんでお前。取り敢えず名前は？」

「エレン・ランドルフエンだよー！」

……名前のせいでかなり心に来るが取り敢えず置いとこう。

それにしてもこの間延びした喋り方は何だ？

「それでランドールフェン「エレンー！」…は？」

「エレンって呼んでよー！オレンジの髪の毛も！」

「うん！エレン！私の名前はアスナだよー！」

「アスナねー！よーし！名前も覚えてもらったしハチマンも聞きたいこと全部聞いていよー！」

「よし分かった。取り敢えず何で俺の名前を知ってるんだ？」

「えつとねー。上手く説明は出来ないんだけど取り敢えず前提として私はAIなんだよ

ねー！それでこの世界のメンタルヘルスケアをしてるの！要するに心が病んじゃった人を癒すって事！それでこのS A Oの中で一番病んでたのがハチマンだったからかな〜！」

俺？一番病んでたの？

「だけどハチマンの心の闇見たいのが無くなつて私は役目が無くなつちやつたんだよね。それでシステムから排除されてここに来たんじゃないかな？」

それは恐らくアスナを含めて本物を見つけられたからだな。

「成る程な。取り敢えず状況は分かった。それとユイユイって何だ？」

「私と同じ役割のA Iだよー！本名はユイで見た目は幼女だよー！多分私と同じようにバグってどつかにいるんじゃないかなー？」

「成る程な。それで一番重要な事を聞きたい。お前はこっち側か？」

そう。それが一番知りたいのだ。これでもし茅場側で動向を探られてたら…なんて事があつちや溜まつたもんじゃやない

「うん！私個人的にハチマンを支えるって決めたし〜！それじゃあ私はハチマンとアスナの子供ね〜！」

「はっ。」

いやいや、何でそうなる。

「子供、子供、子供、子供／＼／＼」

ぶつぶつ呟いている奴がいるが気にしないでおこう。

「だってそれじゃあ私はハチマンの何なの？」

「しらねえよ……せめて兄弟とかにしてくれ」

「兄妹かくそれでも良いかも！それじゃあお兄ちゃんです！アスナはお姉ちゃんね！」

「おう、それでいいよ。お前はそのユイって奴と通じる事は出来るのか？」

「ちゃんとエレンって呼んで！それとユイユイとは連絡は取れないけどユイユイの居場所なら分かるよ！えつと今は……ここ！」

こいつが提示してくれた地図の場所は……

「キリトの家じゃねえか！」

「お知り合いさん？それじゃあ行こっか！」

「そうだな。アスナ、起きろ。目を覚ませ」

「ブツブツブツ……はっ！ごめんごめん！それじゃあ準備してくるからちよつと待ってて！」

第54話 ユイユイとエレン

「キリトー？居るかー？」

「ちよつと待て!!今色々あつて動けない!! サチー!ドア開けてやってくれろ」

「はいはい。ハチマン君今行くから少し待つてねろ」

ガチャ

「こんにちは。アスナも来てたのね!それとこの子は?..:」

「AI。今その家にいる幼女と一緒にだよ」

「え...? ユイちゃんがAI?...: ごめん。何言ってるのかな?」

「まあ詳しくはこいつが話してくれるから取り敢えず立て込んでなければ家に入れてくれないか?」

「ええ...: じゃあ入つてね」

「はろはろろ! ハチマンとアスナの妹兼元メンタルヘルスケア用AIのエレン・ラン

ドルーフエンだよー！よろしくねー！」

「私はサチ。宜しくね！こっちは私の夫のキリト君」

「よろしくな」

そうキリトが言うのと俺の所に来てそつと耳打ちして来た。

「お前あいつの名前：： 大丈夫なのか？」

．．．． ああ、そういうことね。やっぱり俺の親友は優しいな。

ほんとこいつと親友になれて良かったよ。

「ああ、大丈夫だ。全く容姿も違うしな」

「それなら良かった」

「ばばーまー」

ふとそんな声が聞こえた。声の主はユイだ。

「ありやりやく。これはユイユイバグりにバグって記憶喪失だねー。」

バグりにバグるって何だよ：：

「エレン：： だったか？ユイは何者なんだ。全部説明してくれ」

「おけおけー！」

そういつて説明し始めたがふと思ったことがある。

こいつってなんでこんな間延びした喋り方なんだ：：？

そんな事を考えている間に説明は終わったようだ。

「ユイユイ〜早く記憶を戻せ〜って事でチョーっツプ!!」

あいつあんな可愛い幼女に容赦なくチョップしたぞ…

皆若干引いてるしな。

あんなんで記憶が戻るわk 「… ってエレンさん!?!」

何で戻ったんだよ… あんなんで治るとか昭和のテレビか?

「パパ・ママ! 記憶を取り戻しました! それとそこにいる方達は?」

こんな小さい子なのに凄い礼儀正しいな。

「俺はハチマン。そこでこっちが嫁のアスナだ。エレンの兄と姉をやらせてもらってる」

「ハチマンさんとアスナさんですね! これからもパパとママと仲良くしてあげて下さい!」

「サチとキリトだっけ〜? こっちからもよろしくおねがいます〜」

「…「おう(うん!)」」

こうしてS A Oの中でもトップを争うバカップル夫婦に新たな家族が出来たのであった。